

藥無驗逝水不留因斯悲慟即作此歌

七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并

短歌

栲角ハ枕詞ナリ  
人事乎云々人言の意也左註  
に遠く王徳に感して聖朝に  
歸化すといへるに當れり  
國放流ハものいひやる意也  
太皇ハ天皇の誤なり  
思美彌爾ハ繁くの意なり  
都禮毛奈吉ハ由縁もなきな  
布細乃ハまくらこは也  
年緒長久ハ年の續く事に  
憑有之人乃繼云々ハ左註  
いへる大家石川命婦有馬の  
温泉へ行たる間に死し  
まひいへる也  
佐保河乎云々是より葬の事  
暁闇跡ハ夕闇の如くの意也  
徘徊ハ思ひ迷ふさまをいふ

栲角乃新羅國從人事乎吉跡所聞而問放流親族兄弟無  
國爾渡來座而太皇之敷座國爾内日指京思美彌爾里家  
者左波爾雖在何方爾念鷄目鴨都禮毛奈吉佐保乃山邊  
爾哭兒成幕來座而布細乃宅乎毛造荒玉乃年緒長久住  
乍座之物乎生者死云事爾不免物爾之有者憑有之人乃  
盡草枕客有間爾佐保河乎朝川渡春日野乎背向爾見乍  
足氷木乃山邊乎指而晚闇跡隱益去禮將言爲便將爲須

直獨而ハ左註にいへる如く  
坂上郎女一人留り居たるを  
いふ  
有間山云々温泉へ行たる母  
さしものもさとしていふ有  
馬ハ攝津國なり

彼シラニタモトホリタビヒトリシテシホタヘノコロモテホサズナゲキツ、リガナクナミ  
敵不知爾徘徊直獨而白細之衣袖不于嘆乍吾泣淚有間  
山雲居輕引雨爾零寸八  
ダアマ、マヤマクモ非タナヒキアメニフリキヤ

反歌

留不得壽爾之在者敷細乃家從者出而雲隱去寸

尼の下舊本名の字あり

右新羅國尼曰理願也遠感王徳歸化聖朝於時寄住

逕を舊本經さあり

大納言大將軍大伴卿家既逕數紀焉惟以天平七年

石川命婦ハ卷四の註ハ大伴  
坂上郎女之母石川命婦さあ  
り安座卿の室也  
哀ハ喪の誤にあらじか

乙亥忽沈運病既趣泉界於是大家石川命婦依餌藥

事往有間温泉而不會此哀但郎女獨留葬送屍柩既

訖仍作此歌贈入温泉

十一年己卯夏六月大伴宿禰家持悲傷亡妾作歌一首



六月のいと末に身まかりたるなるへし歌のうへにて去か知らるゝ也

過去人之云々黄泉の人も獨れれつゝすらんさなり所念く附のいひおさへて歎く詞也拾穂本去の下之の字あり

二句見つゝ去のへさてかの意也

移朔ハ上に六月とあれハ七月一日をいへる也

虚蟬之云々秋風の肌寒きハ常よりいしへ人のまははしき也

水鴨成ハ水鴨の如くの意也借古本に借に作れるそよき断身の借れる物の如き云

霜露一本と露霜のさあるに從ふへし

曾許念案ハそれをれもふにの意なり

時者霜云々ハ時もあるへきに未幼き兒を置て死し事よの意なり吾妹可のハハハの意すみて訓へし  
際ハあらかじめも訓へし

屋前爾ハ咲云々ハ花ハ宿に咲て時を經たり也

如千歳ハ千歳相住みぬへきの如くの意也

山隠都禮ハ葬りつれハの意あり例のハを省きし也

イマヨリハアキカセハクノキナムチイカアカヒトリナガキヨナ子ム  
從今者秋風寒將吹烏如何獨長夜乎將宿

弟大伴宿禰書持即和歌一首

ナカキヨチヒトリヤ子ムトキミガイヘバスギニシヒトノカモホユラクニ  
長夜乎獨哉將宿跡君之云者過去人之所念久爾

又家持見砌上糶麥花作歌一首

アキサラバミツシシベトイモガウエシヤドノナデシコサキニケルカモ  
秋去者見乍思跡妹之殖之屋前之石竹開家流香聞

移朔而後悲嘆秋風家持作歌一首

ウツセミノヨハツ子ナシトシルモノアキカセサムクシメツルカモ  
虚蟬之代者無常跡知物乎秋風寒思努妣都流可聞

又家持作歌一首并短歌

ソカヤドニハナシサキタルツチミレドコ、ロモユカズハシキヤシイモガアリセ  
吾屋前爾花會咲有其乎見杼情毛不行愛入師妹之有世  
バミカモナスフタリナラビ非タナリテモミセマシモノナウツセミノカ  
婆水鴨成二人雙居手折而毛令見麻思物乎打蟬乃惜有

ミナレバツユツシケルガゴトクアシビキ、ヤマサチサシテイヒヒナス  
身在者霜露乃消去之如久足日木乃山道乎指而入日成  
カクリニシカバソコモフニム子コソイタメイヒモカ子ナツケモシラニアトモナキ  
隱去可婆曾許念爾胸己所痛言毛不得名付毛不知跡無  
ヨノナカナレバセムスベモナシ  
世間爾有者將爲須辨毛奈思

反歌

トキハシモイツモアラムチコ、ロイタクイニシワギモカワクゴチオキテ  
時者霜何時毛將有乎情哀伊去吾妹可若子乎置而

イデ、ユクミナシラマセバカ子テヨリイモナト、メムセキモカカマシ  
出行道知末世波豫妹乎將留塞毛置末思乎

イモガミシヤドニハナサクトキハヘメツガナクナミダイマダヒナリニ  
妹之見師屋前爾花咲時者經去吾泣淚未干爾

悲緒未息更作歌五首

カクシノミアリケルモノナイモモツレモチトセノゴトクタノミタリケル  
如是耳有家留物乎妹毛吾毛如千歲憑有來

イヘサカリイマスツギモチトメカ子ヤマカクリツレコ、ロドモナシ  
離家伊麻須吾妹乎停不得山隱都禮情神毛奈思



可都知跡ハまれごもかつこ  
意得へし

多奈引霞ハ火葬の煙より霞  
なほあはれふ意なり

波之吉ハ愛る意なり

大日本ハ大八洲をいふ  
此鳥子儲君ハこれにてまほし  
けん  
久遠乃京ハ山城國相樂郡恭  
仁卿也  
乎爲利ハ乎烏利の誤なり  
小ハ子の誤なるへし  
日異ハ日々之意なり  
白細爾ハ白布の事なるを轉  
りてたゞ白き事いへり  
和豆香ハ相樂郡なり  
御輿ハ御葬のくるまをいふ  
展轉ハ臥しまるひ也

於保爾ハおほるけたほよそ  
なごの意ありさて此歌も太  
子かれの皇子ふれはかくい  
いへり  
足檜木乃云々皇子を花にた  
さへまつれり

八十伴男ハ多くの部類を云

率比ハいさなひきぬる也

見爲明米之ハ見ばらして心  
を明かにし給ふ意也

移爾家里ハ驚し給ひしを云  
大夫之云々ハ舍人等かいて  
たちをいひてさてかくて万  
代にさたのめりしなかくれ  
まして白布の裏服さなりて  
かはれる姿を見れば悲し  
なり  
五月蠅成ハ枕詞なり

世間之常如此耳跡可都知跡痛情者不忍都毛  
サホヤマニタナビクカスミルゴトニイモチオモヒデ、ナカヌヒハナシ

佐保山爾多奈引霞每見妹乎思出不泣日者無  
△カシヨソヨソニモミシカワギモコガオクツキトモヘハシキサホヤマ

昔許曾外爾毛見之加吾妹子之與柳常念者波之吉佐寶山

十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿禰  
家持作歌六首

掛卷母綾爾恐之言卷毛齋忌志伎可物吾王御子之命萬  
ヅヨニメシタマハマシホヤマトクニノミヤコハウチナビクハルサリヌレバヤマ  
代爾食賜麻思大日本久遠乃京者打麻春去奴禮婆山邊  
ニハハナサキナチリカハセニハアユコサバシリイヤヒケニサカユルトキニガヨ  
爾波花咲乎爲里河湍爾波年魚小狹走彌日異榮時爾逆  
ヅレノマガトトカモシロタヘニト子リヨソヒテヅカヤマミコシタタシ  
言之在言登加聞白細爾舍人裝束而和豆香山御輿立之  
テヒサカタノアメシラシヌレコイマロビヒツチナケドモセムスベモナシ  
而久堅乃天所知奴禮展轉泥土打雖泣將爲須便毛奈思

反歌

吾王天所知牟登不思者於保爾曾見鯨流和豆香蘇麻山  
ワガオホキミアメシラサムトオモハ子バオホニツミケルワヅカソマヤマ  
足檜木乃山左倍光咲花乃散去如寸吾王香聞  
アシビキノヤマサヘヒカリサクハナノチリニシゴトキワガオホキミカモ

右三首二月三日作歌

掛卷毛文爾恐之吾王皇子之命物乃負起八十伴男乎召  
カケマクモアヤニカシヨシワガオホキミミコノミコトモノ、フノヤソトモノチメシ  
集聚率比賜比朝獵爾鹿猪踐起暮獵爾鷄雉履立大御馬  
ツドヘアトモヒタマヒアサカリニシ、フミオコシユフガニトリフミタテオホミマ  
之口抑駐御心乎見爲明米之活道山木立之繁爾咲花毛  
ノクチオシトメミコ、ロチミシアキラメシイクサヤマコダチノシバニサクハナモ  
移爾家里世間者如此耳奈良之大夫之心振起劔刀腰爾  
ウツロヒニケリヨノナカハカクノミナラシマヌラチノコ、ロフリオコソツルキヤコシニ  
取佩梓弓鞞取負而天地與彌遠長爾萬代爾如此毛欲得  
トハキアツサユミユギトリオヒテアメツチトイヤトホナガニヨロツヨニカクシモガ  
跡憑有之皇子乃御門乃五月蠅成驟騷舍人者白袴爾服  
モトタノメリシミコノミカドノサバヘナスサツグト子リハシロタヘニココロモ



矣上ハ云みなのへたるふり  
更經ハかほろを延たるなり  
悲召ハ呂の誤からんかなし  
きるもハ只悲しきかしの  
意にてるハ助辞なり

見之みしハいへるハ古言  
の格にて見させ給ひしハ  
ふ意也常に待におほせし  
今ハ絶たるをいへり

大伴之云々大伴氏に靱負と  
賜へる事あるを名に負  
ふ靱さいへり帯而ハ負て也

袖指可倍氏ハ袖をさしかハ  
してなり  
新世爾ハ只世にてあらたハ  
めでいふ詞なり  
不絶射ハいハ助辞なり  
事者ハ言ハなり  
丹杵火爾之ハ卷一に詳也住  
なれし家をいふ

朝霧ハほのりといはん爲也  
髪髭爲年ハ葬りゆくを見送  
りてやうハ遠くをり行  
ないふ或ハおほにさ讀てハ  
ほしくの意也さといへり  
妻屋ハ庭所をいふ  
嘆舍ハなけきを延へたる也  
さて舍ハ合の誤なるへし  
狭ハ狭母ハ毎の誤なり  
百見抱見ハ百もしいたきも  
しなり  
群不問ハものいはぬなり  
入爾之山ハ葬りし相樂山を  
いふ  
因鹿ハ由縁處の意なり

因香爾の爾ハ一本に跡さあ  
るてよき

朝鳥之ハ朝鳥の如く也  
鳴六ハ鳴の誤にてれのみし  
なハハハハハハハハハハハハ  
んさいふへき所あらす  
本居翁いはれたり

取著而常有之咲比振麻比彌日異更經見者悲召可聞

反歌

波之吉可聞皇子之命乃安聖我欲比見之活道乃路波荒  
爾鷄里

大伴之名負靱帶而萬代爾憑之心何所可將寄

右三首三月二十四日作歌

悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并短歌

白細之袖指可倍氏靡寢吾黑髮乃真白髮爾成極新世爾  
共將有跡玉緒乃不絶射妹跡結而石事者不果思有之心  
者不透白妙之手本矣別丹杵火爾之家從裳出而縁兒乃

トクチモガキテアサギリノホノニナツトヤマンロノサガラノヤマノマニキスギ  
哭平毛置而朝霧髣髴爲乍山代乃相樂山乃山際往過奴  
レバ イハムスベセム スベシラニワギモコトサチ シツマヤニアシタニハ  
禮婆將云爲便將爲便不知吾妹子跡左宿之妻屋爾朝庭  
イテタナシヌビユフベニハイリ非ナゲカヒソギバザムコノチコトニチノコジセノオヒミイダギ  
出立徳夕爾波入居嘆舍腋狭兒乃泣母雄自毛能負見抱  
アサトリノ子ノミナキツトコフレドモシルシチナミトコトトハヌモノニハアレドワギ  
見朝鳥之啼耳哭管雖戀効矣無跡辭不問物爾波在跡吾  
妹コガイリニシヤマチヨスガトゾホモフ  
妹子之入爾之山平因鹿跡叙念

反歌

打背見乃世之事爾在者外爾見之山矣耶今者因香爾思  
波牟

朝鳥之啼耳鳴六吾妹子爾今亦更逢因矣無

右三首七月廿日高橋朝臣作歌也名字未審但云奉



率膳ハ續紀神護景雲二年高橋安發二氏の内膳司に任る者ヲ以テ率膳とすあり但名字より下ハ後人の加筆なるべし

膳之男子焉

萬葉集卷第三

以下族人卿家持卿不比等公の任官の畧歴をのせたるハ此卷迄を古万葉と思ひ誤まりつゝ仙覺の物せられし也と先人の説あれさ今ハしこのまゝに出しくになん大納言安麿ハ右大臣大紫長徳の男也養老ハ元正帝の御代の年號也三月三日續紀卷八に三月戊戌車駕自美濃至乙巳爲中納言とありされハ乙巳に三日とあるハ違へり戊戌より八日目をあつたれハなり三年正月十三日云々五年正月五日云々一本になり神龜ハ聖武帝の御代の年號也天平も同じ御代の年號なり十月一本十一月とあり正月廿七日叙從二位と一本にあり家持卿の傳續紀卷三十八に出たり天平十七年と一本にあり兵部少輔紀卷十六に宮内少輔とあるに從ふへし又紀に

大納言從二位大伴宿禰旅人大納言安麿  
養老二年三月三日任中納言不歷參議  
三年正月七日叙正四位下  
五年正月七日叙從三位  
神龜元年二月日叙正三位  
天平二年十月一日任大納言  
三年正月七日叙二位七月一日薨二在官  
中納言從三位大伴宿禰家持大納言贈從二位安麻呂之孫大納言從二位旅人男之  
天平七年正月叙從五位下  
十八年三月任兵部大輔



六月爲越中守とあり  
天平寶字ハ淳仁帝の御代の  
年號也  
六年云々紀卷廿四に正月爲  
信部大輔とあり此處に三月  
任民部大輔といへるハ不審  
なり

神護景雲ハ稱徳帝の御代の  
年號也

一本九月日の上に寶龜元年  
の四字ありて十月日の上に  
はきに從ふへし  
寶龜ハ光仁帝の御代の年號  
なり

紀卷三十二ハ右中辨從四位  
下大伴家持爲兼式部員外大  
輔とあり

天平寶字二年六月任因幡守

六年三月日任民部大輔

八年正月日任薩摩守

神護景雲元年八月日任太宰少貳

四月六日任民部少輔日月并官不審可尋

九月日任左中辨兼中務大輔

寶龜元年十月日叙正五位下

二年十一月日叙從四位下

三年二月日兼式部權大輔

五年三月日任相摸守九月日兼左京大夫上總守

六年十一月日任衛門督

七年三月日任伊勢守

八年正月日叙從四位上

九年正月十七日叙正四位下

十一年二月一日任參議同九日兼右大辨

天應元年四月十五日叙正四位上同十四日兼春宮大夫

五月四日任左大辨大如夫八月一日復任參議大如夫十一

月十三日叙從三位延暦元年閏正月坐事除官位五月十

一日兼春大宮夫六月日兼陸奥按察使

二年七月十三日任中納言春宮大如夫

天應ハ光仁帝の御代の年號  
なり

八月一日一本八月八日とあ  
り

延暦ハ桓武帝の御代の年號  
也



八月日一本八月廿八日さあ

三年二月兼持節征東將軍  
四年八月日薨

右大臣正二位藤原朝臣不比等内大臣大織冠第二男子

大寶ハ文武帝の御代の年號なり

大寶元年三月十九日任中納言

同日停中納言叙正三位任大納言

慶雲も同じ御代の年號なり

慶雲元年正月七日叙從二位

五年五月臥重病詔賜度者二十八

和銅ハ元明帝の御代の年號也

和銅元年正月七日叙正二位任右大臣

年六十二愼風藻にハ六十三

養老四年八月三日薨年六十二

詔贈太政大臣正一位江國淡海公以近

萬葉集卷第四

相聞

難波天皇妹奉上山跡皇兄御歌一首

岡本天皇御製一首并短歌

額田王思近江天皇作歌一首

鏡王女作歌一首

吹黄力自歌二首

田部忌寸櫛子任太宰時歌四首

柿本朝臣人麻呂歌四首

基檀越往伊勢國時留妻作歌一首

力自ハ刀自の誤なり

太宰の下帥字を脱せるハ本文になさからハ時きてハけるにヤ

基本文に基に作れり



柿本朝臣人麻呂歌三首  
 柿本朝臣人麻呂妻歌一首  
 阿部女郎歌二首  
 駿河妹女歌一首  
 三方沙彌歌一首  
 丹比真人笠磨下筑紫國時作歌一首并短歌  
 幸伊勢國時當麻呂大夫妻作歌一首  
 草孃歌一首  
 志貴皇子御歌一首  
 阿倍女郎歌一首

報贈一本に答あり

追同本文の一本に追和あるに從ふへし

草本文に藤さあり麻呂字なし又大伴の大伴さあり

大伴の上本文に又字あり

中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首  
 阿倍女郎報贈歌一首  
 大納言兼大將軍大伴卿歌一首  
 石川郎女歌一首  
 大伴女郎歌一首  
 後人追同歌一首  
 藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌一首  
 京職大夫草原磨太夫贈大伴郎女歌三首大伴郎女和歌四首  
 大伴坂上郎女歌一首



天皇賜海上女王御歌一首

海上女王奉和歌一首

大伴宿奈麻呂宿禰二首

安貴王戀歌一首并短歌

門部王戀歌

高田女王贈今城王歌六首

神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時爲贈從駕人所詠

娘子笠朝臣金村作歌一首并短歌

二年乙丑春三月三香原離宮之時娘子笠朝臣金村

作歌一首并短歌

宿禰の下歌字を脱せり

戀字本文になし

歌の下文文に一首の二字あり

川の下幸字を脱せり

五年戊辰太宰少貳石川朝臣足人遷任餞于筑前國蘆

城驛家歌三首

大伴宿禰三依歌一首

丹生女王贈太宰帥大伴卿歌二首

太宰帥大伴卿贈大貳丹比縣守卿遷任民部卿歌

賀茂女王贈大伴宿禰三依歌一首

土師宿禰水通從筑紫上京海路作歌二首

太宰大監大伴宿禰百代戀歌四首

大伴坂上郎女歌二首

賀茂女王歌一首

歌の下文文に一首の二字あり



太宰大監大伴宿禰百代等贈驛使歌二首  
 太宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時府官人等餞卿  
 于筑前國蘆城驛家歌四首  
 太宰帥大伴卿上京之後滿誓沙彌贈卿歌二首  
 大納言大伴卿和歌二首  
 太宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井大成連悲嘆作歌  
 一首  
 大納言大伴卿新袍贈攝津大夫高安王歌一首  
 大伴宿禰三依悲別歌一首  
 金明軍與大伴宿禰家持歌二首

大伴坂上家之大嬢報贈大伴宿禰家持歌四首  
 大伴坂上郎女歌一首  
 大伴宿禰稻公贈田村大嬢歌一首  
 笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首  
 大伴宿禰家持和歌二首  
 山口女王贈大伴宿禰家持歌五首  
 大神女郎贈大伴宿禰家持歌一首  
 大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌  
 西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈夫君歌一首  
 佐伯宿禰東人和歌



歌の上本文に和の字あり

- 池邊王宴誦歌
- 天皇思酒入女王御製一首
- 高安王累鮒贈娘子歌一首
- 八代女王獻天皇歌一首
- 娘子報贈佐伯宿禰赤麻呂歌一首
- 佐伯宿禰赤麻呂歌一首
- 大伴四綱宴席歌一首
- 佐伯宿禰赤麻呂歌一首
- 湯原王贈娘子歌二首
- 娘子報贈歌二首

朝の下本文に贈字あり

- 湯原王亦贈歌二首
- 娘子復報歌一首
- 湯原王亦贈歌一首
- 娘子復報贈歌一首
- 湯原王人贈歌一首
- 娘子復報贈歌一首
- 湯原王歌一首
- 紀女郎怨恨歌三首
- 大伴宿禰駿河麻呂歌一首
- 大伴坂上郎女歌一首

人ハ本文に亦に作れり



之ハ本文に足に作り一の上  
歌字あり  
大伴の下宿禰の二字を脱せ  
り

- 大伴宿禰駿河麻呂歌一首
- 大伴坂上郎女歌一首
- 大伴宿禰三依離復相歡歌一首
- 大伴坂上郎女歌二首
- 大伴宿禰駿河磨歌三首
- 大伴坂上郎女歌六首
- 市原王歌一首
- 安都宿禰年之一首
- 大伴像見歌一首
- 安倍朝臣蟲麻呂歌一首

久字本文になし

- 大伴坂上郎女歌二首
- 厚見王歌一首
- 春日王歌一首
- 湯原王歌一首
- 和歌一首 不審作者
- 安倍朝臣蟲麻呂歌一首
- 大伴坂上郎女歌二首
- 中臣女郎贈大伴宿禰家持歌五首
- 大伴宿禰家持與交遊別久歌三首
- 大伴坂上郎女歌七首



王の下二の字あるハ新なり

- 大伴宿禰三依悲別歌一首
- 大伴宿禰家持贈娘子歌二首
- 大伴宿禰千室歌一首 未詳
- 廣河女王二歌二首
- 石川朝臣廣成歌一首
- 大伴宿禰像見歌三首
- 大伴宿禰家持到娘子之門作歌一首
- 河内百枝娘子贈大伴宿禰家持歌二首
- 巫部麻蘇娘子歌二首
- 大伴宿禰家持贈童女歌一首

和贈大伴宿禰家持の八字本文になし

- 童女和贈大伴宿禰家持來報歌一首
- 粟田娘子贈大伴宿禰家持歌二首
- 豐前國娘子大宅女歌一首
- 安都扉娘子歌一首
- 丹波大女娘子歌三首
- 大伴宿禰家持贈娘子歌七首
- 獻天皇歌一首
- 大伴宿禰家持歌一首
- 大伴坂上郎女從跡見庄贈賜留宅女子大嬢歌一首并  
短歌



獻天皇歌二首

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌二首

大伴坂上大嬢贈大伴宿禰家持歌三首

又大伴宿禰家持和歌三首

同坂上大嬢贈家持歌一首

又家持和坂上大嬢歌一首

同大嬢贈家持歌二首

又家持和坂上大嬢歌二首

更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌十五首

大伴田村家之大嬢贈姊坂上大嬢歌四首

姉ハ妹の誤なり

舊京二字本文になく剛の下  
一首の二字あり

大伴坂上郎女從竹田庄贈賜女子大嬢歌二首

紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首

大伴宿禰家持和歌一首

在久邇京思留寧樂宅舊京坂上大嬢大伴宿禰家持作歌

藤原郎女聞之即和歌一首

大伴宿禰家持更贈大嬢歌二首

大伴宿禰家持報贈紀女郎歌一首

大伴宿禰家持從久邇京贈坂上大嬢歌五首

大伴宿禰家持贈紀女郎歌一首

紀女郎報贈家持歌一首



二首ハ三首の誤なり

大伴宿禰家持更贈紀女郎歌五首  
 紀女郎褻物贈友歌一首  
 大伴宿禰家持贈娘子歌三首  
 大伴宿禰家持報贈藤原朝臣久須磨歌二首  
 又家持贈藤原朝臣久須磨歌二首  
 藤原朝臣久須磨來報歌二首

相聞

難波天皇妹奉<sub>レ</sub>上在山跡皇兄御歌一首

一日社入母待告長氣乎如此所待者有不得勝  
ヒトヒコソヒトモマナツゲナガキケチカクマタルレバアリガテナクモ

岳本天皇御製一首并短歌

神代從生繼來者人多國爾波滿而味村乃去來者行跡吾  
カミヨヨリアレツギクレバヒトサハニクニ、ハミチテアガムラノイザトハユケドワガ

戀流君爾之不有者晝波日乃久流留麻豆夜者夜之明流  
コナルキミニシアラチバ、ヒルハヒノク、マデヨルハヨノアケル

寸食念乍寐宿難爾登阿可思通良久茂長此夜乎  
キハミオモヒツ、イチカテニシテアカシツラクモナガキコノヨチ

反歌

山羽爾味村曠去奈禮騰吾者左夫思惠君二四不在者  
ヤマノハニアガムラサラギユクナレドワレハサアシエキミニシアラチバ

淡海路乃鳥籠之山有不知哉川氣乃已呂其侶波戀乍裳  
アフミザノトコノヤマナリイサヤガハケノコノゴロハコヒツ、モ

難波天皇ハ仁徳天皇ハ申す  
 待告ハ微ク意にて待つ  
 るなり或云告ハ首の誤にて  
 まつこいへこよむべしこも  
 いへり長氣ハ月日久しくな  
 るハハ  
 有不得勝ハ待堪かたき意也  
 所待ハ本居翁ハ所ハ耳の誤  
 にならんさいはれたり  
 製の下歌の字を脱せり  
 牛糞は生れついき来たれハ  
 の意なり味村乃ハ枕詞也  
 去來者ハ都の大路の人の行  
 きまなり本居翁ハカハハ  
 〇けさ訓へしさいへり  
 麻宿難爾登の句一死豆二字  
 の誤にて五首の句一舒明  
 たるなるへしてよませ給へ  
 る也もし後岳本の御歌と給  
 へは舒明天皇の御歌と給  
 ては舒明天皇の御歌と給  
 味村曠云々味見を群行の人  
 左夫思惠ハさひしよさいふ  
 同し



不知哉川ハ川の名をやかて女の情をいさまらすさいふに付けてよみ給へり

王の上女字脱たるなるへし近江天皇ハ天智天皇を申す此女王はしめ此天皇にめさせたまはし武天皇太子にておはせたまはし時より御心をわづらへ給へる事卷一の歌にてまらる

王女ハ例の女王の誤なり風乎太爾云々必来んと思て待たは何かいふ歎くへき戀の時ハ風たに乏しくて必しも來ぬ故になげくも世三の句上なる詞を重げたるのみ也此歌右の額田女王の歌を聞てよめる見ゆ

將有

右今案高市岳本宮後岡本宮二代二帝各有異焉但稱岡本天皇未審其指

額田王思近江天皇作歌一首

君待登吾戀居者我屋戸之籬動之秋風吹

鏡王女作歌一首

風乎太爾戀流波乏之風小谷將來登時待者何香將嘆

吹黄刃自歌二首

眞野之浦乃與騰乃繼橋情由毛思哉妹之伊目爾之所見カハカミノイツモハナノイツモイツモマセツガセコトキシケメヤモ河上乃伊都藻之花乃何時何時來益我背子時自異目八方

田部忌寸櫛子任太宰時歌四首

衣手爾取等騰己保里哭兒爾毛益有吾乎置而如何將爲

置而行者妹將戀可聞敷細乃黑髮布而長此夜乎

吾妹兒矣相令知人乎許曾戀之益者恨三念

朝日影爾保做流山爾照月乃不厭君乎山越爾置手

柿本朝臣人麻呂歌四首

三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨

古爾有兼人毛如吾歎妹爾戀乍宿不勝家牟

今耳之行事庭不有古人曾益而哭左倍鳴四

百重二物來及我常念鴨公之使乃雖見不飽有哉

此歌妹といへるから吹黄刃の脱失せしなるさいふ端の歌ハ刀自利へたる歌と見ゆれこも端調失たるなるへし

伊都藻ハ多く生たる藻を云さて何時々といはん序也

時自異目八方ハ時ならぬ事なくいつにてもの意なり

衣手爾云々母の衣に兒のすかりなく比して別を惜む

也此歌の末に元曆本に舍人千年といへる名あり此歌をくめる人なり

黒髮布而ハ妹の髪の自から下にまゐるをいふ元曆本に田部忌寸櫛子にあり是ハ妻をいへる也

相令知ハはしめに媒せし人を今中々に恨み思ふ也是も櫛子が歌なり

朝日影云々もさあひさるさいはん序なりこも櫛子の妻に別るを悲しめる歌也又ハ君といへれハ右の千年なさしていへるカ

三熊野之云々二句百重とい















佐保大納言ハ安麻呂卿なり  
那女ハ家持卿のむすびにて又  
姑なり  
歌ハ族の誤なり

漣之官能ハ岸の高き所を云  
柴木ハくぬき也さて小きを  
柴に刈て焼けばかくかり  
鳥ハ碇の誤なる事しるし  
張ハ借字にて春の意なり忍  
ハ助辞君と共立隠れて忍  
ひ逢んさ也さてこハ旋頂歌  
なり  
天皇ハ聖武天皇を申す御の  
下製ハ字を脱せり  
馬柵ハ馬せきの意にて馬を  
さむる柵をいふ  
擬古之作云々源道別云擬ハ  
擬往當ハ當時の誤りて轉到  
したるもて疑古之作也但以  
當時便云々さありしならん  
さいへるさもあるべし  
爪引夜音之ハ隨身ハ夜の軍  
に弓絃をならすを爪引と云  
さてよとのさほさハ二つな  
いへるなりよそなからに  
も

被寵無備、而皇子薨之後時、藤原麻呂大夫娉之郎女、  
焉、郎女家於坂上里、仍疾氏號曰坂上郎女也、

又大伴坂上郎女歌一首

サホガハノキシノツカサノシ、バナカリソアリツ、モハルシキタラバ、タチカリルガ子  
佐保河乃涯之官能小歷木莫刈鳥在乍毛張之來者立隱金

天皇賜海上女王御歌一首

アカゴマノコユレリマセノシメユヒシイモガコ、ロハウタガヒモナシ  
赤駒之越馬柵乃絨結師妹情者疑毛奈思

右今案此哥擬古之作也、但以往當便賜斯歌歟、

海上女王奉和歌一首

アツサニミツマビクヨドノトホトニモ、キミガミコトナキクハシヨシモ  
梓弓爪引夜音之遠音爾毛君之御幸乎聞之好毛

大伴宿禰麻呂宿禰歌二首

ウチヒサスミヤニユクコナマ、ガナシミトムレバ、クルシヤレバ、スベナシ  
打日指宮爾行兒乎真悲見留者苦聽去者爲便無

ナニハガタシホヒノナ、ゴリアクマデニヒトノミルコナ、ワレシトモシモ  
難波方擲干之名凝飽左右二人之見兒乎吾四乏毛

安貴王謂一首并短歌

トホヅマノコ、ニアラチバタマホコノミチナタドホミオモフソラヤスケクナクコナクソラ  
遠嬌此間不在者玉杵之道乎多遠見思空安莫國嘆虛不

ヤスカラスモ、ナミノソラユククモ、モガモタカクト、トリニモガモア、スユキテ  
安物乎水空往雲爾毛欲成高飛鳥爾毛欲成明日去而於

モニコト、ヒロガタメニイモトコトナクイモガタメワレモコトナクイマモシゴトタ  
妹言問爲吾妹毛事事無爲妹吾毛事無久今裝見如副而

毛欲得

反歌

シキタヘ、タマクワマカスヘ、ダテオキテトシツヘニケルアハ、ヌオモヘバ  
敷細乃手枕不纏間置而年曾經來不相念者

右安貴王娶因幡八上采女、係念極甚、愛情尤盛、於時

君ハ御音をきけハ、あらし  
也但御幸ハ御事の誤にて言  
の意なり  
大伴宿奈麻呂云々の下元歴  
本に佐保大納言第三之子也  
こあり  
眞悲見の眞ハほむる詞にて  
かはやく愛で思ふ意也集中  
かなしき子らなさいへるに  
同じ  
難波方云々ハ其けしきの面  
白きをめつる如くよ人々の  
あかす見るへき妹を吾ハ見  
る事のすくなしき也  
遠嬌ハ左注にいへる八上采  
女をいふ  
多遠見のたハ發語なり  
思空嘆虚ハ今も何々する空  
しなしなさいふそらに同じ  
妹毛事無ハ一つの事の字  
衍字なり  
今裝見如ハ京に在し時見し  
如く今もさいふ意なり  
不相念者ハ相の下日の字落  
しにてあはれむ日わもへハ  
よむへし賀茂翁いはれき  
さても猶穩ならす若ハ念字  
の誤字ハ本居翁いへり  
八上采女ハ因幡國八上郡の  
采女なり



飲字能海ハ出雲國意字郡の  
海をいふきて上三句ハ片想  
さいはん序也  
道之永手呼ハ永手のてハ  
に通ひてやめて道なり

君伊之哭者ハ伊ハ下へ付る  
助辞之も助辞にて君なくハ  
の意なるへけれと一首の意  
解つたし猶考ふへし  
心在如ハあたし心にてあハ  
わやうに思ふ事なけれと也  
吾背子師のしハ助辞にて我  
せハ也此歌始に贈りしな  
るへし歌の次第ハ悉前後せ  
復者不相香ハまたあハさら  
んかと思ひし故かの意なり  
基ハ元暦本ハ墓に作れるに  
従ふへし

常不止云々ハ常に通ひ來し  
君も通ひ來す使さへ來ハハ  
今より逢ハさらんと思ひた  
めめるならんとの意なり  
續紀十年辛卯紀伊へ行幸の  
事見たり

天州哉玉田次麻裳言ハみな  
枕詞なり  
親吾者不念云々は吾を親し  
み思ひおせて御幸なつこと  
に別れて行手の景色を見樂  
しつゝ旅居をよるしき事思  
ひつゝあらんこと也  
安蘇ハ淺々にて君の心の  
淺々しきをいしれさもの意  
なるへし  
默然得不在者ハ後の物語文  
にならしなさいふに同  
しくたゞにもあらねハの  
意なり  
道守ハ次の反歌に關守とい  
へる同し事なり

勅斷不敬之罪、退却本郷焉、于是王意悼怛、聊作此歌也、

門部王戀歌一首

飲字能海之鹽于乃滴之片念爾思哉將去道之永手呼

右門部王任出雲守時娶部内娘子也、未有幾時、既絶

往來累月之後、更起愛心、仍作此歌、贈致娘子、

高田女王贈今城王歌六首

事清甚毛莫言一日太爾君伊之哭者痛寸取物

他辭乎繁言痛不相有寸心在如莫思吾背

吾背子師遂常云者人事者繁有登毛出而相麻志呼

吾背子爾復者不相香常思基今朝別之爲便無有都流

現世爾波人事繁來生爾毛將相我背子今不有十方

常不止通之君我使不來今者不相跡絶多比奴良思

神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時、爲贈從駕人所詠

娘子笠朝臣金村作歌一首并短歌

天皇之行幸乃隨意物部乃八十伴雄與出去之愛夫者天

翔哉輕路從玉田次畝火乎見管麻裳吉木道爾入立眞土

山越良武公者黃葉乃散飛見乍親吾者不念草枕客乎便

宜常思乍公將有跡安蘇蘇二破且者雖知之加須我仁默

然得不在者吾背子之往乃萬萬將追跡者千遍雖念手嬭

女吾身之有者道守之將問答乎言將遣爲便乎不知跡立







ふ欲に當る也さいへり  
 二走良武の逢夜とあほの夜  
 と經行ないふ走の去の誤な  
 らんさいへり  
 古人乃ハ則脚をさせるな  
 令食飲む事をもたす云  
 吉備能酒ハ吉備の國より出  
 せる酒なるへし  
 賀茂の養を編て盟の上にか  
 けて水のちらぬ用意にする  
 物なるをこい酒に酔病て  
 嘔吐する料にせんさいふ也  
 脚の許まり女王へ酒を贈  
 られたるに答へたる歌なる  
 へし痛元曆本に病さあり  
 脚ハ脚の誤なり  
 障之符酒ハ酒を作るをりむ  
 さいふさて人をまつに殊更  
 醸せるを待酒さいへり  
 安野ハ筑前國夜須郡なり  
 米毛不來者ハまた來ぬにさ  
 いふ意なり  
 荒振公ハ疎くなる君さ也  
 傍乃進ハすさみさいふに同  
 じさて次の歌と合せ見るに  
 海路のたやかならずして  
 日を經るまゝにゆるるなら  
 ん  
 將賜ハ幣を返し給はれさ也

丹生女王贈太宰帥大伴卿歌二首  
 アマガモノソキヘノキハミトホケドモコハロシユケバコフルモノカモ  
 天雲乃遠隔乃極遠鷄跡裳情志行者戀流物可聞  
 イニシヘノヒトノササセルキビノサケヤメバスマナシメキスタラム  
 古人乃令食有吉備能酒痛者爲便無貫寶賜牟  
 太宰帥大伴卿贈大貳丹比親守卿遷任民部卿歌一首  
 キミガタメカミシマサケヤスノヌニヒトリヤノマムトモナシニシテ  
 爲君釀之待酒安野爾獨哉將飲友無二思手  
 賀茂女王贈大伴宿禰三依詞一首  
 ツクシブチイマゴモコチバアラカジメアラアルキミミラミセガナシサ  
 筑紫船未毛不來者豫荒振公乎見之悲左  
 土師宿禰水通從筑紫上京海路作歌二首  
 オホフチチコキノス、ミニイハニフリカヘラバカヘレイモニヨリテバ  
 大船平榜乃進爾磐爾觸覆者覆妹爾因而者  
 ナハヤアルカミノヤシロニワカケシメサハタバラムイモニアハナクニ  
 千磐破神之社爾我掛師幣者將賜妹爾不相國

生來ハ在來の誤なるへし  
 老奈美ハ年次のふみに同し  
 くやうく老くをいふ  
 後者ハ元曆本に時者に作れ  
 り  
 大野ハ筑前國大野郡あり  
 人之眉根乎云々ハ人に戀ら  
 るれハ眉のつゆきさいふ  
 のありて集中によめる歌に  
 まし  
 大伴坂上郎女の歌ハ前の百  
 代の歌に合せ見るに和へた  
 る歌ならんか  
 山菅乃ハ只實さいはん爲也  
 ならぬさいふ詞まてハカ  
 らす  
 吾爾所依ハわれさ事あるよ  
 し無名立て人にいハれし君  
 ハ誰に違らんさ也  
 大伴乃ハ枕詞也さて難波の  
 御津にいへる詞なるをやい  
 いひ馴來りて見つるさいふ  
 赤根指も枕詞なり

太宰大監大伴宿禰百代戀歌四首  
 コトモナクアリコシモノチオイサミニカ、ルコヒニモワレハアヘルカモ  
 事毛無生來之物乎老奈美爾如此戀于毛吾者遇流香聞  
 コヒシナムノチハナニセムイケルヒノタメコソイモナミマクホリスレ  
 孤悲死牟後者何爲牟生日之爲社妹乎欲見爲禮  
 オモハヌサオモフトイハハオホメナルミカサノモリノカミシラサン  
 不念乎思常云者大野有三笠杜之神思知三  
 イトマナクヒトノマユチナイダツラニカ、シメツ、モアハメイモカモ  
 無暇人之眉根乎徒令搔乍不相妹可聞  
 大伴坂上郎女歌二首  
 クロカミニシロカミマヅリオユルマテカ、ルコヒニハイマダアハナクニ  
 黑髮二白髮交至者如是有戀庭未相爾  
 ヤマスゲノミナラヌコトナラレニヨセイハレシキミハタレトカヌラム  
 山菅乃實不成事乎吾爾所依言禮師君者與孰可宿良牟  
 賀茂女王歌一首  
 オホトモノミツトハイハツアカチサシテレルツクヨニタバニアヘリトモ  
 大伴乃見津跡者不云赤根指照有月夜爾直相在登聞



副而會來也ハ遠くわくり來れるをいふ  
四鹿乃濱ハ筑前國なり

磐國山ハ周防國玖珂郡石國郷あり

悉ハ丞の誤なり

看ハ元曆本に舎に作れり

瘡ハ愈の誤にハあらさるか

太宰大監大伴宿禰百代等贈驛使歌二首  
草枕羈行君乎愛見副而會來四鹿乃濱遊乎

右一首大監大伴宿禰百代

周防在磐國山平將超日者手向好爲與荒其道

右一首少典山口忌寸若麻呂

以持天平二年庚午夏六月帥大伴卿忽生瘡脚疾苦

枕痛因此馳驛上奏望請庶弟稻公姪胡麻呂欲語遺

言者勅右兵庫助大伴宿禰稻公治部少丞大伴宿禰

胡麻呂兩人給驛發遣令看卿病而速數旬幸得平復

于時稻公等以病既瘳發府上京於是大監大伴宿禰

大伴卿天平二年十月大納言に任せられたり

三崎廻ハ地名にあらず汀をみさきさといひて廻らうらわしまわふさのわの如しさて上句の立ても居てもさいはん序なり

辛人乃ハ韓人のなり又ハ辛ハ波の誤にてよき人ハ本居ハ辛ハ字万二字の誤といへりさて上句ハ只心に染てさいはん序のみ  
山跡邊ハ大和の方へなり近の下元曆本に付字あるそよき

行毛不去毛ハ行く帥もさよまる官人もの遊なり

百代少典山口忌寸若麻呂及卿男家持等相送驛使  
共到夷守驛家聊飲悲別乃作此歌

太宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時府官人等餞卿

筑前國蘆城驛家歌四首

三崎廻之荒磯爾緣五百重浪立毛居毛我念流吉美

右一首筑前掾門部連石足

辛人之衣染云紫之情爾染而所念鴨

山跡邊君之立日乃近者野立鹿毛動而會鳴

右二首大典麻田連陽春

月夜吉河晉清之率此間行毛不去毛遊而將歸



佐八佑の誤なり

所謂借字にて後れて也  
左備作ハ心さひしくの意也  
痛懸庭云々年経ても男女  
の戀に逢時あるを此別ハ  
再逢いたしとの意なり

此間在而云々ハ京に歸りて  
後たへたるなり

草香江ハ河内國なりさて上  
句ハたつしと語ハん序  
なり

多豆多頭思ハ後の物語文な  
とにたさしとあるよ同  
じく心もさなき意なり

城山ハ太宰府より筑後へ越  
る道の高山なりとそ  
吾將通常ハ同卿のもさへ常  
に通ハんと思ひしと也

右一首防人佐大伴四綱

太宰帥大伴卿上京之後沙彌滿誓賜卿歌二首

眞十鏡見不飽君爾所贈哉旦夕爾左備乍將居

野干玉之黑髮變白髮手裳痛懸庭相時有來

大納言大伴卿和歌二首

此間在而筑紫也何處白雲乃棚引山之方西有良思

草香江之入江三求食蘆鶴乃痛多豆多頭思友無二指天

太宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井連大成悲嘆作歌

一首

從今者城山道者不樂牟吾將通常念之物乎

大納言大伴卿新袍贈攝津大夫高安王歌一首

吾衣人莫著曾網引爲難波壯士乃手爾者雖觸

大伴宿禰三依悲別歌一首

天地與共久住波牟等之而有師家之庭羽裳

金明軍與大伴宿禰家持歌二首

奉見而未時太爾不更者如年月所念君

足引乃山爾生有菅根乃勸見卷欲君可聞

大伴坂上家之大娘報贈大伴宿禰家持歌四首

生而有者見卷毛不知何如毛將死與妹常夢所見鶴

丈夫毛如此戀家流平幼婦之戀情爾比有目八方

生而有者云々ハ今こそあひ  
相見ん事の得へきしられ  
比有目八方ハたくひあらん  
やハの意なり



月草今露草といふものに  
て集申鴨頭草といふけり花  
して衣に摺れはよくつきて  
早く色の變るものなれ人  
の心のうつりやすきに譬へ  
いへり  
念可母の心かもしいふ意也  
不居日無の意のたぢぬ日  
なきか如くの意なり  
出而將去云々の旅たつ時よ  
めるにや出てゆくへき時よ  
あるへきをなせ也  
立而可去哉ハ出立てゆくへ  
き事ハあらす也  
田村大嬢云々の下元曆本に  
大伴宿奈麻呂卿之女也と有  
本名ハもろしもなくなり  
戀者ハ行末戀しくハの意也  
首ハ云の誤なるへし

ツキクサノウツロロヤスクカモヘカモフヒトノコトモツゲコ  
月草之徒安久念可母我念人之事毛告不來  
カスガヤマアサタツクモノ井ヌヒナリミマケノホシキキミニモアルカモ  
春日山朝立雲之不居日無見卷之欲寸君毛有鴨  
大伴坂上郎女歌一首  
イテバイナムトキシハアラムサコトサラニツマゴヒシツ、タチテユクベシヤ  
出而將去時之波將有乎故妻戀爲乍立而可去哉  
大伴宿禰稻公贈田村大嬢歌一首  
アヒミズハコヒザラ マシナイモナミテモトナカクノミニコヒバカニセム  
不相見者不戀有益乎妹乎見而本名如此耳戀者如何將爲  
右一首姉坂上郎女作  
笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首  
ワガカタミミツ、シメバセアラタマノトシノチナガクワレモオモハム  
吾形見見管之努波世荒珠年之緒長吾毛將思  
シラトリノトバヤママツノマナツ、ソワガコヒワタルコノツキゴロチ  
白鳥能飛羽山松之待乍曾吾戀度此月比乎

衣手平ハ枕詞打廻乃里ハ大  
和の神南備の邊なるへし本  
居翁ハ折の誤にてなり  
はれハ至る里にて近きまし  
也乃の字ハ誤りて入れるな  
るへし地名ハあらすとい  
へり  
今師波止のしハ助辭なり相  
馴て年久しきに心ゆるみて  
吾命を人しに告るなと也  
人爾令知哉ハ人にしらすは  
よ也  
闇夜爾云々聲のみ聞て相見  
ぬにたさへたり  
鴨一本に鶴とあるそよき  
暮陰草ハ庭の夕陰の草を云  
草の名ハあらす上旬ハ消  
いはん序のみ  
消蟹ハ消し失るほとの意也  
幸ハ元曆本に平に作れるに  
從ふへし  
八百日往ハ多くの日数をあ  
ゆみゆくといふにて限なく  
遠き濱といふ意なり  
奥島守ハ假によひかけてこ  
ふなり  
宇都蟬之石走ハ枕詞なり  
人者死爲ハ戀にも人の死  
るものにぞあるらん也

コロモデナリウツノサトニソレアルチシラテゾヒトハマテドコズケル  
衣手平打廻乃里爾有吾乎不知曾人者待跡不來家留  
アラタマノトシノヘユケバイマンハトユメヨワガセコワガナノラスナ  
荒玉年之經去者今師波登勤與吾背子吾名告爲莫  
ワガカモヒチヒトニシラセヤタマリシゲヒラキアケツトイメニシミエツ  
吾念乎人爾令知哉玉匣開阿氣津跡夢西所見  
クラキヨニナクナルタツノヨソニノミキ、ツ、カアラムアフトハナシニ  
闇夜爾鳴奈流鶴之外耳聞乍可將有相跡羽奈之爾  
キミニコヒイタモスベナミナラヤマノコマツガシタニタチナゲキツル  
君爾戀痛毛爲便無見檜山之小松下爾立嘆鴨  
ワガヤドノ、ユフカゲガサノシラツクノケカニモトナオモユルカモ  
吾屋戸之暮陰草乃白露之消蟹本名所念鴨  
ワガイ、ノチノマタケムカギリソスレメヤイヤヒニクニハオモヒマストモ  
吾命之將全幸限忘目八彌日異者念益十方  
ヤホカユリハマノマサゴモワガコヒニアニマサラメヤオキツシマモリ  
八百日往濱之沙毛吾戀二豈不益歎與島守  
ウツセミノヒトシシゲミイハバシノマナカキキミニコヒワタルカモ  
宇都蟬之人目乎繁見石走問近君爾戀度可聞  
コヒニモソヒトハシニスルミナセガハシタユラヤスツキニヒニケニ  
戀爾毛曾人者死爲水瀬河下從吾瘦月日異







劔太刀の枕詞なり

從菅邊云々二句いやましに  
さいはん序のみ

押照ハ枕詞難波乃菅さハれ  
もころさいハ人料なり  
四乎ハ四手の誤なるへし  
年深云々ハ末々永く絶はし  
さいへハさなり  
磨師情乎云々ハすよかな  
る心をゆるして人に疏きし  
さの意なり  
其日之極ハ其日よりしてこ  
の方なり  
云云意者不持ハ涙さ共に  
なた此方へ願く深の如き心  
ハもたて一筋に思ひたのみ  
し程にさ也  
神哉將離ハ我中を神のさけ  
ましにやの意なり  
人歎禁其武ハまた人のさ  
へたるやらんさ也  
赤羅引ハまくらこさハふり

言察知久ハ手力もなくやわ  
くじき女さいふししく  
さ也  
手童之ハたわらハの如く也

長謂管云々ハ長歌に年深く  
長くしいへハ云々さいへる  
意なり不念ハ不念の誤なる  
へしたのめすはいたのまし  
めすハなり

無間云々夫の絶間なく戀ふ  
ねハよあらん夢に見はつ  
るハ也

汝乎ハ妻をさしていへりあ  
まりに戀悲しむ事なけれ  
慰さむるなり  
由移去ハうつりぬにれなし  
黄泉乃ハ枕詞過哉ハあハね  
夜のあまた過ぬるよさなり  
鳥ハ元曆本に遊さあるそよ

ツルギダチナノチシケクモワレハナシキミニアハズテトシノヘヌレバ  
劔太刀名惜雲吾者無君爾不相而年之經去禮者

從蘆邊滿來鹽乃彌益荷念歎君之忘金鶴

大神女郎贈大伴宿禰家持歌一首

サヨナカニトモヨブチドリモノモフトワビチルトキニナキツトモトナ  
狹夜中爾友喚千鳥物念跡和備居時二鳴乍本名

大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌

オシテルナニハノスゲノ子モゴロニキミガキコシテトシフカクナクシイヘバ  
押照難波乃菅之根毛許呂爾君之聞四乎年深長四云者  
マソカバミトギシコハロチユルシテソノヒノキハミナミノムタナビクダモノカニカクニ  
眞十鏡磨師情乎縦手師其日之極浪之共靡珠藻乃云云  
コトロハモタズオホア子ノタノメルトキニチハヤブルカミヤサケムウツセミノヒト  
意者不持大船乃憑有時丹千磐破神哉將離空蟬乃人歎  
カサフラムカヨハセルキミモキマサズタマツサノツカヒモミエズナリヌレバイト  
禁良武通爲君毛不來座玉梓之使母不所見成奴禮婆痛  
モスベナミメバタマノヨルハスガラニアカラヒクヒモクルトマテナゲ  
毛爲便無三夜子玉乃夜者須我良爾赤羅引日母至閻雌

トドモシルシナナミオモヘドモダツキナシラニタナヤメトイハクモシルリタラハ  
嘆知師乎無三雖念田付乎白二幼婦常言雲知久手小童  
ノ子ノミナキツトタモトホリキミガツカヒチマチヤカ子テム  
之哭耳泣管徘徊君之使乎待八兼手六

反歌

ハツメヨリナガクイヒツタノメズハカトルオモヒニアハマシモノカ  
從元長謂管不念恃者如是念二相益物歎

西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈夫君歌一首

アヒダナクコフレニカアラムクサマクワタビナルキミガイメニシユル  
無間戀爾可有牟草枕客有公之夢爾之所見

佐伯宿禰東人和歌一首

クサマクワタビニヒサシクナリメレバナチコソオモヘナコヒソワギモ  
草枕客爾久成宿者汝乎社念莫戀吾妹

池邊王宴誦歌一首

マツノハニツキハユツリメモミザバノスギメヤキミガアハヌヨオホミ  
松之葉爾月者由移去黃葉乃過哉君之不相夜多鳥



天皇ハ聖武天皇を申す  
酒人女王云々の下元曆本に  
女皇者穂積皇子之孫女也  
思云吾妹の云ハ念の誤にて  
思ハふわきしならん本  
高安王云々の下元曆本に高  
安王者後賜大原真人氏と有  
高安王云々の下元曆本に高  
安王者後賜大原真人氏と有  
高安王云々の下元曆本に高  
安王者後賜大原真人氏と有  
高安王云々の下元曆本に高  
安王者後賜大原真人氏と有

皇子誰ぞし知れず報ハ術字  
又別に贈歌有しハ落たる  
吾手本云々の本居翁いふ此  
歌ハ三二四五の句を次第  
して三二四五の句を次第  
して三二四五の句を次第  
して三二四五の句を次第  
して三二四五の句を次第  
して三二四五の句を次第  
して三二四五の句を次第

白髮生流云々の上の歌をう  
けてよし娘子の白髮生ふる  
とも歌ハしと也  
奈何鹿云々の此宴に來らぬ  
人にくれるなるなり

初花之云々の思ふ女の案に  
花の木あるを思ひやりの  
にやまたは花を女にたさへ  
てよめるにてもあるへし  
宇波弊無ハ上重にてなきハ  
そへたる詞ならんさて人ハ  
にやハ斗の物なるかなの意  
にやハ斗の物なるかなの意  
にやハ斗の物なるかなの意  
にやハ斗の物なるかなの意  
にやハ斗の物なるかなの意  
にやハ斗の物なるかなの意  
にやハ斗の物なるかなの意

天皇思酒人女王御製歌一首  
道相而咲之柄爾零雪乃消者消香二戀云吾妹

高安王製贈贈娘子女歌一首  
奥幣往邊去伊麻夜爲妹吾漁有藻臥束鮎

八代女王獻天皇歌一首  
君爾因言之繁乎古郷之明日香乃河爾潔身爲爾去

一尾云龍田超三津之濱邊爾潔身四二由久  
娘子報贈佐伯宿禰赤麻呂歌一首

吾手本將卷跡念牟大夫者戀水定白髮生二有  
佐伯宿禰赤麻呂和歌一首

白髮生流事者不念戀水者鹿奏藻闕二毛求而將行

大伴四綱宴席歌一首  
奈何鹿使之來流君乎社左右裳待難爲禮

佐伯宿禰赤麻呂歌一首  
初花之可散物乎人事乃繁爾因而止息比者鴨

湯原王贈娘子女歌二首  
宇和弊無物可聞人者然許遠家路乎令還念者

目二破見而手三破不所取月内之楓如妹乎奈何責  
娘子報贈歌二首

幾許思異目鴨敷細之枕片去夢所見來之







飲元曆本に飯に作れり  
流一本に泣きあるそよき  
不負物可聞ハワッなげきを  
妹ハおふましきやま也物語  
文にうらみなれふなさいへ  
るわふに同じ

繁君爾阿禮ハ左註にいへる  
如く近親の贈答としていへる  
かなる事ありてかくよめる  
にか

好去哉ハよくな延へいへり  
平安なりやとよ意也

夏葛ハ本居翁云夏ハ葛の誤  
にてはふくすの訓へしと  
いへりたねのついで枕詞  
なり  
此ハ者の誤なるへくたほ

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

マスラヲノオモヒワビツ、タビマ子リナゲクナゲキチオハハモノカモ  
丈夫之思和備乍過多嘆久嘆平不負物可聞

大伴坂上郎女歌一首

コ、ロニハワスル、ヒナクオモヘドモヒトノコトコソシゲキミニアレ  
心者忘日無久離念人之事社繁君爾阿禮

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

アヒミズテケナガクナリメコ、ゴロハイカニヨクヤイアカシワギモ  
不相見而氣長久成奴比日者奈何好去哉言借吾妹

大伴坂上郎女歌一首

ナツクゾノタエメツカヒノヨドメレバ、コトシモアルゴトオモヒツルカモ  
夏葛之不絶使乃不通有者言下有如念鶴鴨

右坂上郎女者、佐保大納言卿女也、駿河麻呂此高市  
大卿之孫也、兩御兄弟之家、女孫姑姪之族、是以題歌

送答相問起居

大伴宿禰三依離復相歎歌一首

ワギモコハトヨノクニ、スミケラシムカシ、シヨリワカエマシニケリ  
吾妹兒者常世國爾住家良思昔見從變若益爾家利

大伴坂上郎女歌二首

ヒサカダノアメノツユシモオキニケリイヘナルヒトモマナコヒヌラム  
久堅乃天露霜置二家里宅有人毛待戀奴濫

タマメシニタマハサツケテカツガツモマクラトワレハイザフタリチム  
玉主爾珠者授而勝旦毛枕與吾者率二將宿

大伴宿禰駿河麻呂歌三首

コ、ロニハワスレメノチタマノ、モミザルヒマ子クツキツヘニケル  
情者不忘物乎儻不見日數多月曾經去來

アヒミテハツキモヘナクニコフトイハバチソ、ロトソレナオモホサムカモ  
相見者月毛不經爾戀云者乎曾呂登吾乎於毛保寒義

ガモハメナオフトイハバ、アメツチノカミモシラサムウタガフナユメ  
不念乎思常云者天地之神祇毛知寒邑禮左變

相歎ハ目錄及元曆本に相歎  
とあるに従ふへし

變者ハわかかへる事なにいふ

露霜ハ暮秋うすくむく霜を  
いふ文字濁てよむへし此  
歌ハ太宰にての歌ならん家  
なる人さハ駿河麻呂の妾を  
いふなるへし

玉主ハたまより訓へし玉  
女をたごへたり勝且ハ事の  
呂をたごへたり勝且ハ事の  
また儘ならすはつくなる  
かいふ此句ハ初句の上へた  
きて意得へしと本居翁い  
れり

儻ハ直ひいけす不意に也  
乎曾呂ハ今傳言ハ字曾とい  
ふハ乎曾の轉ふりさてるハ  
そへたる詞なり  
邑禮左變誤字なるへし舊訓  
さされさハハリとあれと  
さる詞ハなき事なり今ハ試  
に削きつ猶考ふへし



音乃名具左曾ハ吾心をなく  
さめんここそ也

翼醉色ハあかき色をいふは  
れすハ唐棣花ともよめり或  
人云今俗に庭梅といふもの  
春夏の間赤き花開くこれ  
ふらんさいへり  
僧ハ信の誤なるへし

四馬也ハ歎息の聲なり  
奥毛ハ行末もの意なるへし  
汝乎與吾乎ハ汝さわれさの  
中なり  
聞起名ハきく事なかれされ  
かふこまはなり  
長常念者ハ未長く逢んきた  
もハの意なり

網兒之山ハ志摩國英虞郡の  
山をいふなるへし  
佐提乃崎ハ佐ハ信の誤にて  
伊勢朝明郡あり  
左手ハ和名抄に織佐天と有  
さて其崎にて魚とる業する  
女を思ひ出てよめるならん

佐保度ハ大和の佐保を渡り  
て来て也さて上句ハこゑな  
つしきさいはん序也

石上ハ枕詞なり今日逢はん  
と妹にの契りしかハ雨も  
いとハすさなり  
鏡之ハ鏡の誤なること前に  
いへり  
續紀天平九年九月正七位上  
阿部朝臣虫麻呂授外從五位  
下とみ  
向座而云々左註を見るに大  
伴坂上郎女と戯によみて贈  
りし也

夜波隱良武ハ夜のまた深く  
残れるをいふ結句ハまほら  
く待てあれと也

大伴坂上郎女歌六首

ソレノミヅキミニハコフルワガセコガコトフコトハコトノナグサソ  
吾耳曾君爾者戀流吾背子之戀云事波言乃名具左曾

不念常曰手師物乎翼醉色之變安寸吾意可聞  
オモヘドモシルシモナソトシルモノナナソコ、バクモワガコヒソタル

雖念知僧裳無跡知物乎奈何幾許吾戀渡  
アラカジメヒトゴトシゲシカクシアラバシエヤラガセコオクモイカニアラメ

豫人事繁如是者四惠也吾背子與裳何如荒海藻  
ナサトワサヒトソサクナルイデソギミヒトノナカゴトキ、コスナユメ

汝乎與吾乎人曾離奈流乞吾君人之中言聞起名湯目  
コヒコヒテアヘルトキダニウルハンキコトツクシテヨナガクトオモハバ

戀戀而相有時谷愛寸事盡手四長常念者

市原王歌一首

アゴノヤマイホヘカケルサデノサキサテハヘソコノイメニシムル  
網兒之山五百重隱有佐堤乃崎左手蠅師子之夢二四所見

安部宿禰年足歌一首

サホソタリソギヘノウヘニナクトリノコエナツカシキハシキツマノコ  
佐穂度吾家之上二鳴鳥之音夏可思吉愛妻之兒

大伴宿禰像見歌一首

イソノカミフルトモアメニサハラメイモニアハムトイヒテシモノサ  
石上零十方雨二將關哉妹似相武登言義之鬼尾

安倍朝臣蟲麻呂歌一首

ムカヒ非テミレドモアカメソギモコニタチワカレユカムタツキシラズモ  
向座而雖見不飽吾妹子二立離往六田付不知毛

大伴坂上郎女歌二首

アヒミメハイクバクヒサモアラナクニコ、バクワレハコヒツ、モアルカ  
不相見者幾久毛不有國幾許吾者戀乍裳荒鹿

戀戀而相有物平月四有者夜波隱良武須曳羽蟻待  
コヒノ、テアヒタルモノナツキシアレバヨハコモルラムシマシハアリマテ

右大伴坂上郎女之母石川内命婦與安倍朝臣蟲滿  
之母安曇外命婦同居姊妹同氣之親焉緣此郎女蟲







首根之ハみたれてさいハハ  
まくらこさハナリ

蓋毛ハもしもさいふ意ナリ

氣緒爾四而云々ハ交をた  
んともなけれハ命の限戀ふ  
るさの意ナリ  
將ハ一本に相に作れるそよ  
き

恐國曾ハれそろしき意にて  
人言のさかき國そき也  
紅之ハ色に出さいハハ料也  
言跡云莫苦荷ハ唯いばぬに  
の意よていふハそへたる也  
集中云思といふ言を添てい  
ふ例多しこいもまかり  
二鞘之ハ二重にかこみたる  
家をいふハ本居宜長ハたり  
隔のまくらこさハさいハナリ  
猶考ふへし  
比者ハわかれて久しからぬ  
はさなるにの意ナリ

欲見鴨ハ見まくほりする心  
よりハく思ふにハ見ま  
くほれハハものハを略けり  
將崩ハくハハハハハハハハハ  
青山乎云々ハ背き山に白き  
雲のたさひきて色のけちめ  
まるき如くの意也歎ハ然の  
誤ナリ  
目言乎谷裳ハ見る事すらも  
の意ナリ

照日乎ハ照月乎の誤なるハ  
しと本居翁のいはれたるさ  
もあるへし

得羽重無ハ此巻の上に云り  
人情乎令盡ハ吾心をつくさ  
するの意ナリ

過跡者無二ハ思ひをやりす  
くされぬナリ

イナトイハバシヒムヤリガセスガノ子ノオモヒミダレテコヒツモアラム  
不欲常云者將強哉吾背菅根之念亂而戀管母將有

大伴宿禰家持與交遊別歌三首

ケダシクモヒトノナカゴトケルカモコトマテドモキミガキマサメ  
蓋毛人之中言聞可毛幾許雖待君之不來益

ナカノニタエントシイハバカリイキノチニシテワガコヒメヤモ  
中々爾絶年云者如此許氣緒爾四而吾將戀八方

アヒオモフヒトニアチナクニ子モゴロニコ、ロツクシテコフルソレカモ  
將念人爾有莫國勸情盡而戀流吾纒

大伴坂上郎女歌七首

イフコトノカシコキリニクレナ井ノイロニナイテソオモヒシヌトモ  
謂言之恐國曾紅之色莫出曾念死友

イマハワレハシナムヨワガセイケリトモワレニヨルベシトイフトイハナクニ  
今者吾波將死與吾背生十方吾二可緣跡言跡云莫苦荷

ヒトゴトナシゲミヤキミヲサヤノイヘチヘダテ、コヒツ、チラム  
人事繁哉君乎二鞘之家乎隔而戀乍將座

コノゴロニサトセヤユキモスギメルトワレヤシカモフミマクホレカモ  
比者千歳八往裳過與吾哉然念欲見鴨

ウツクシトリガモフコ、ロハヤカハノセクトセクトモナホヤクンレム  
愛常吾念情速河之雖塞々友猶哉將崩

アチヤマナヨギルク、ロノイナシロクワレトエマシテヒトニシラユナ  
青山乎横欬雲之灼然吾共咲爲而人二所知名

ウミヤマモヘダ、ラナクニナニシカモメゴトナゲニモコ、タトモシキ  
海山毛隔莫國奈何鴨目言乎谷裳幾許乏寸

大伴宿禰三依悲別歌一首

テレルヒチヤミニミ、ナシテナクナミダゴロモスラシツホスヒトナシニ  
照日乎闇爾見成而哭淚衣沾津千人無二

大伴宿禰家持贈娘子歌二首

モ、シキノ、オホミヤヒトハオホカレドコ、ロニノリテオモホユルイモ  
百磯城之大宮人者雖多有情爾乘而所念妹

ウハヘナキイモニモ、アルカモカリ、バカリヒトノコ、ロナツクスオモヘバ  
得羽重無妹二毛有鴨如此許人情乎令盡念者

大伴宿禰千室歌一首 未詳

カクシノミコヒヤラタラムアキツムニ、タナ、ビリクモノスグトハ、ナシニ  
如此耳戀哉將度秋津野爾多奈引雲能過跡者無二



戀草ハ只戀なり力車ハ物を  
積て挽く車をいふ七車ハ敷  
多きをいふなり  
戀者今葉云々ハ今ハ吾心に  
なくなりしと思ひたりしを  
何方よりか又吾身につかみ  
つく如くさりつきたるそま  
の意なり  
戀過目八方ハ戀ふる心をや  
り過去難きをいふ  
泉之里ハ山城相樂郡泉川の  
あたりを云へし奈良の故郷  
の妻を戀ひてよめる歌なる  
へし  
刈薦之ハ枕こさばなり  
直香ハすへて人の上の實  
事實説を説ききく事にい  
ひてこいハ君かどありか  
りなと人のいふを聞ても堪  
かたく思へハ君か事ハけ  
てもしひいつる事なけれ  
の意なり  
春日野爾云々二句ハまくま  
くさいハんためあり  
障真比ハさいり延へ云り  
さて上句ハ序にて今ハ障あ  
りさも後にあはんさ也

廣河女王歌二首

コヒクサチカラグルマニナ、ケルマツミテコフヲクワカゴ、ロカフ  
戀草呼力車二七車積而戀良苦吾心柄

コヒハイマハアラシトソレハ、ガモヒシチイックノコヒツツカミカ、レル  
戀者今葉不有常吾羽念平何處戀其附見繫有

石川朝臣廣成歌一首

イヘビトニコヒスギメヤ、モカハヅナクイヅミノサトニトシノヘユケバ  
家人爾戀過目八方川津鳴泉之里爾年之歴去者

大伴宿禰像見歌三首

ワガキクニカケテナイヒソカリユ、モノミダレテオモフキミガタ、カヅ  
吾聞爾繫莫言刈薦之亂而念君之直香會

カスガメニ、アササキルクモノシクシクニソレハ、ゴヒマスツキニヒニケニ  
春日野爾朝居雲之敷布二吾者戀益月二日二異二

ヒトセニ、ハチタビサハラヒ、ユルミヅノチモアハナムイマニアラズトモ  
一瀬二波千遍障良比逝水之後毛將相今爾不有十方

大伴宿禰家持到娘子之門作歌一首

カクシテヤナホヤカヘラムチカ、トラメミチノアヒダチナツミマ、井キテ  
如此爲而哉猶入將退不近道之間乎煩參來而

河内百枝娘子贈大伴宿禰家持歌二首

ハツハツニヒトチアヒミテ、イカナラムイツレノヒニカマタヨソニミム  
波都波都爾人乎相見而何將有何日二箇又外二將見

メバタマノソノヨノツクヨケフ、マデニソレハワスレズマナクシ、ガモヘハ  
夜千玉之其夜乃月夜至于今日吾者不忘無間苦思念者

巫部麻蘇娘子歌二首

ワガセコチアヒミシソノヒケフマ、デニワガコロモデハヒルトキモナシ  
吾背子乎相見之其日至于今日吾衣手者乾時毛奈志

タクナハ、ナガキイノチホシケリハタ、エズテヒトナミマホシニコソ  
榜繩之永命乎欲苦波不絶而人乎欲見社

大伴宿禰家持贈童女歌一首

ハチカツライマ、スライモチイメニミテコ、ロノウチニコヒソタルカモ  
葉根蕪今爲妹乎夢見而情内二戀度鴨

童女來報歌一首

葉根蕪ハ少女の髪の飾にす  
るものによ  
今爲ハいませし或ハ今せん  
ミ訓へし今ハ新にの意なり  
ミ本居翁いへり

其日ハその日よりさいふな  
略けるなり  
榜繩之ハ枕詞あり  
欲苦波ハ命長かれと思ふハ  
こふり

其夜乃ハ初めて逢一夜を云  
ふに同し  
波都波都爾ハはつかにさい  
ふに同し

參來而ハまゐりきてなまか  
訓むなり



無四乎ははれつらはいこ  
幼き時のさまにて此童は既  
に其年頃をも過したるへし  
四の物の誤ならんか  
片塊の底さはん料の  
さく底なるさハ戀の至り  
極れるをいふ  
塊ハ腕の誤なり  
因毛有奴可ハよしあれか  
ひし願ふなりさて今一度あ  
ひたらひいひ止んさ世古  
さるいはひ事ありしならん

行いにませなり新勅撰に  
此歌をかへれ吾せこての  
せたり

鴨島之云々本ハうかふさい  
ハん序なり

ハ子カヅライマスルイモハナカリシナイカナルイモソコトタコヒタル  
葉根蕪今為妹者無四乎何妹其幾許戀多類

粟田娘子贈大伴宿禰家持歌二首

オモヒヤルスベノシラ子メカタモヒノソコニソワレハコヒナリニケル  
思遣為便乃不知者片塊之底曾吾者戀成爾家類  
マタモアハムヨシモアラメカシロタヘノワガコロモテニイハヒトメム  
復毛將相因毛有奴可白細之我衣手二齋留目六

豊前國娘子大宅女歌一首

ユフヤミハミナタツタツツキマナチイマセワガセソノマニモミム  
夕闇者路多豆多頭四待月而行吾背子其間爾母將見

安都扉娘子歌一首

ミソラユクツキノヒカリニタビトメアヒミシヒトノイメニシミユル  
三空去月之光二直一目相三師人之夢西所見

丹波大娘子歌三首

カモドリノアツコノイケニコノハオチテツカベルコ、ロワガオモハナクニ  
鴨鳥之遊此池爾木葉落而浮心吾不念國

味酒呼ハまくらこさばなり  
忌杉ハ云々な引はへたる  
齊木を云々てそれ手ふれ  
し卵よや祈るひもなくて  
君あひひたき事よさ也  
垣穂成ハ垣の如く中を隔つ  
る事にいへり本居著ハまけ  
き事なりさいはれたり

佐保ハ大和の佐保よて妹か  
りハ入道なるへし

云別ハよるひるさいふわか  
ちさり  
附ハ一本に獨さあるそよき  
感ハ一本に獨さあるそよき  
さまよもあらす感の誤なる  
へし

不念爾ハ思ひもかけすして  
なり  
念流香乎ハ香なるをの意か  
されさわれやさなくて未  
句にかあはす乎ハ世の誤か  
三禮ハ身やつれの約言なり  
日本紀ハ祓をやつれと訓り  
村肝之ハ枕詞なり於ハ一本  
に情さあるそよき

味酒呼三輪之祝我忌杉手觸之罪歟君二遇難寸  
カキホナスヒトゴトキテツカセコガコ、ロタユタヒアハメコノゴロ  
垣穂成人辞聞而吾背子之情多由多比不合頃者

大伴宿禰家持贈娘子歌七首

コ、ロニハオモヒワタレドヨシナミヨソノミシテナゲキノゾガスル  
情爾者思渡跡縁乎無三外耳為而嘆曾吾為  
ナドリナクサホノカハトノキヨキセチリマツキシイカニカヨハム  
千鳥鳴佐保乃河門之清瀬乎馬打和多思何時將通  
ヨルヒルトイフワキシラズワガコフルコ、ロハケダシイメニミエキヤ

夜盡云別不知吾戀情蓋夢所見寸八

ツレモ ナクアルラムヒトチカタモヒニソレハオモヘバワビシクモアルカ  
都禮毛無將有人乎狩念爾吾念者惑毛安流香

不念爾妹之咲憐乎夢見而心中二燎管曾呼留

オモハズニイモガエマヒナイメニミテコ、ロノウチニモエツ、ソナル  
マスヲナトオモヘルソレナカリ、バカリミツレカタモヒサセム  
丈失跡念流吾乎如此許三禮二見津禮片思男責

ムラギモノコ、ロクダケテカリバカリワガコフヲクシラズカアルラム  
村肝之於摧而如此許余戀良苦乎不知香安類良武



献れる人さたかならすし  
ハ坂上女郎の母の内命婦の  
歌にや  
吾為類和射乎云々ハ何そ山  
里ひたる物を奉れるに添へ  
たるるへし

如是許云々ころなき石木  
に成て物思はすしてあらん  
なと也

常呼二跡ハハ異國を云  
呼ハ興の誤ならん  
小金門ハ鎖ふさす門を云  
悲其爾さいふまてハ別る  
時のさまなり  
刀自ハ老女のみにあらず家  
あるしなへり  
本名四戀者のハ助辞也  
くよしよく戀るふらハも也  
古郷爾ハ此すめる跡見庄を  
いふなるへし

朝髪之ハ枕こはかり  
名姉ハハあむる詞ハ  
姉の意ふりさて母よりた  
れさもかくうやまひいふ  
古の常なりハ戀れそな  
れハ詞をうちカへして意  
得へし

池水ハ其池の如く深く思ひ  
牽る心まらせ奉れ池水  
にいふ也ハ只君を思奉る  
にて常の戀ハあらぬ古  
の歌ハさる事ハかくよめ  
るなりけり  
外居而云々ハ別時別人に  
て後人の並へ載たるならん

鬼乃志許草ハわろき草ふり  
と罵ていへる詞なり  
事二思安利家理ハ事ハ言  
にて音のみにて實なきを云  
今名斗さいふよひさして  
忘草を帯れハ憂を忘るこ  
へハ下紐につけたれ名  
みにてわろき草よと也  
糲ハ糲の誤なるへしあらぬ  
ハ願ふ詞なり

献天皇歌一首

アシビキノヤマニシナレバミヤビナミツガスルリザナトガメタマフナ  
足引乃山二四居者風流無三吾為類和射乎害目賜名

大伴宿禰家持歌一首

カクバカリコヒツアラズハイハキニモナラマシモノモハズシテ  
如是許戀乍不有者石木二毛成益物乎物不思四手

大伴坂上郎女從跡見庄贈賜留宅女子大嬢歌一首并

短歌

トヨヨニトロガユカナクニナカナドニモノカナシラニオモヘリシワゴノト  
常呼二跡吾行莫國小金門爾物悲良爾念有之吾兒之刀  
シチヌバタマノヨルヒルトイハズガモフニシワガミハヤセヌナゲクニシソテ  
自緒野于玉之夜盡跡不言念二思吾身者瘦奴嘆丹師袖  
サヘメヌカクバカリモトナシコヒバフルサトニコノツキゴロモアリガテマシナ  
左倍沾奴如是許本名四戀者古郷爾此月期呂毛有勝益士

反歌

アサガミノオモヒミダレテカクバカリナチゴフレンジイメニミエケル  
朝髪之念亂而如是許名姉之戀曾夢爾所見家留

右歌報賜大嬢歌也

献天皇歌二首

ニホドリノカヅクイケミツコトアラバキミニロガゴフコ、ロシメサチ  
二寶鳥乃潜池水情有者君爾吾戀情示左禰

ヨソニ非テコヒツアラズハキミガイヘノイケニスムトフカモナラマシナ  
外居而戀乍不有者君之家乃池爾住云鴨二有益雄

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌二首

フスレガサリガシタヒモニツケタレドシコノソコサコトニシアリケリ  
萱草吾下紐爾著有跡鬼乃志許草事二思安利家理

ヒトモナキリニモアラマカワギモコトタツサヒユキテタケヒテナラム  
人毛無國母有糲吾妹兒與携行而副而將座

大伴坂上大嬢贈大伴宿禰家持歌三首

タマナラバテニモマカムナウツセミノヨノヒトナレバニマキガタシ  
玉有者手二母將卷乎齣臆乃世人有者手二卷難石



將相夜者云々ハあふへき夜  
ハかの夜ならてもいつもあ  
るへきをさ也  
惜前泣ハ君の名のなさに  
さそなるれさ也

今時有四の二つのし文字ハ  
助辭なり

二行ハ此世ハ二たひ經行く  
へきやハこの意にて前の歌  
に逢夜あはね夜二行ぬらん  
さいへるハふれさ異なり  
玉二毛我ハ玉にもあれかし  
と願ふなり

春日山云々二句ハ心く、と  
いはん序あり  
情具久ハくもる意にてお  
ほつかなき事にいへり

足トハ足ふみて占ふ事あり  
行乎欲焉ハ乎の巻の誤にて  
おまくほしみさらんさ本  
居翁いへり

後瀬山之ハ後さいはん序也  
將念ハ會の誤なるへし

世間之云々ハ戀さいふもの  
ハよの中の苦しきものよあ  
りけるさ也けらくはけるを  
のへいへる也

念社ハ思へハこそばを省  
きし也  
事耳乎ハこそばにのみ意  
なり  
手ハ毛の誤あり  
不相の下妹或ハ有の一字を  
脱せるなりさ本居翁いへり

夢之相さハ夢よあふさ見る  
事ハ相さハ夢よあふさ見る  
夢見十娘遊仙窟に少時睡則  
とあるによれる也  
一重耳云々ハ遊仙窟に日  
寛朝々帯緩さいふに似たり  
神之諸伏ハ神の依ましてさ  
も寐し給ふをいふかさてさ  
引の石をあまた頸に結付た  
らん如くに苦しき思はずれ  
さも神の共寐し給ふ故に達

アハムヨハイツモアラムナナニス  
トカソノヨヒアヒテコトシヤキモ  
將相夜者何時將有乎何如爲常香  
彼夕相而事之繁裳  
ツガサハモチサノイホサニタ  
メトモキミガナタハサシニコソ  
ナケ  
吾名者毛千名之五百名爾雖立  
君之名立者惜社泣

又大伴宿禰家持和歌三首  
今時有四名之惜雲吾者無妹丹  
因者千遍立十方

空蟬乃代也毛二行何爲跡鹿妹  
爾不相而吾獨將宿  
ツガサモヒカクテアラズハタ  
タニモガマコトモイモガテニ  
マカレナム  
吾念如此而不有者玉二毛我眞  
毛妹之手二所纏牟

同坂上大嬢贈家持歌一首  
カスガヤマカスミタナビキコ  
ロクケテレルツクヨニヒトリカ  
モ子ム  
春日山霞多奈引情具久照月  
夜爾獨鴨念

又家持和坂上大嬢歌一首  
ツクヨニハカドニイテタチユ  
フケトヒアウラナゾセシユカ  
マクサホリ  
月夜爾波門爾出立夕占問足  
卜平會爲之行乎欲焉

同大嬢贈家持歌二首

カニカクニヒトハイフトモワカ  
サゲノチセノヤマノチモアハム  
キミ  
云々人者雖云若狹道乃後瀬山  
之後毛將念君  
ヨノナカノクルシキモノニアリ  
ケラクコヒニタヘズテシメク  
オモヘバ  
世間之苦物爾有家良久戀二不  
勝而可死念者

又家持和坂上大嬢歌二首

ノチセヤマノチモアハムトオモ  
ヘコソシメベキモノサケフマテ  
モイケレ  
後瀬山後毛將相常念社可死物  
乎至今日毛生有  
コトノミチノチモアハムト子モ  
コロニワレサタノメテアハザラ  
メカモ  
事耳乎後手相跡勸吾乎令憑而  
不相可聞

更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌十五首

イメノアヒハクルシカケリオド  
ロキテカキサグレドモテニモ  
フレ子ハ  
夢之相者若家里有覺而搔探友  
手二毛不所觸者  
ヒトヘノミイモカムスビムシ  
オビチスラミヘムスアベクワ  
ガミハナリヌ  
一重耳妹之將結帶平尙三重可  
結吾身者成  
ツガコヒハチビキノイシチナ  
ハバカリクビニカケムモカミ  
ノモロブシ  
吾戀者千引乃石乎七許頸二將  
繫母神之諸伏



かたきといふか賀茂翁い  
 けれたれさ隠ふらす荒木田  
 氏ハ將繁心神之難夜の誤よ  
 てつけさんさこのるのさき  
 さ剛へしさいへれさ猶考ふ  
 へし  
 開設ハあけまうけて也こも  
 遊仙窟に今宵冥閉戸夢裏向  
 退邊とあるをよめり  
 難見如不見ハ逢見るとも逢  
 見の如くさ也  
 事絶而ハ詞にもつたさ  
 ほさの意にて後世いひし  
 すさいふ詞に同じ  
 戀死六云々ハ戀しなん思ひ  
 ら世に見しられいひさ也  
 れん思ひも同じ事さ也  
 不所見有の下念字脱たるか  
 みゆさるもハさあるへし  
 さ木居翁いへり  
 久流比爾云々ハ物くるハし  
 きまてはほゆるさ也  
 人目擊而ハ四句よりつくと  
 にあらす初句の上におきて  
 意得へし  
 奈木六ハ慰むといふに同じ

ユフサラバヤド アケマケテワレマタムイメニアヒミニコムトフヒトナ  
 暮去者屋戸開設而吾將待夢爾相見二將來云比登乎  
 アサヨヒニミムトキサヘヤリヤモコガミトモミメゴトナホコヒシケム  
 朝夕二將見時左倍也吾妹之雖見如不見由戀四家武  
 イケルヨニソハイマダミズコトタエテカガモシロクメヘルフクロハ  
 生有代爾吾者未見事絶而如是何怜縫流蕩者  
 リヤモコガカタミノコロモシタニキテタニアフマテハソレヌガメヤモ  
 吾妹兒之形見乃服下著而直相左右者吾將脱入方  
 コヒシナソレモオナツンナニセムニヒトメヒトゴトコナクミワガセム  
 戀死六其毛同會奈何爲二人目他言辭痛吾將爲  
 イメニダニミエバコソアラメカリバカリミエズテアルハコヒテシトカ  
 夢二谷所見者社有如此許不所見有者戀而死跡香  
 ガモヒタエソビニシモノナナカノニナニカクソクアヒミソメケム  
 念絶和備西物尾中々爾奈何辛苦相見始兼  
 アヒミテハイクカモヘメシコバクモクハヒニクルヒオモホユルカモ  
 相見而者幾日毛不經乎幾許久毛久流比爾久流必所念鴨  
 カクバカリオモカケニノミガモホエバイカニカモセムヒトメシケリテ  
 如是許而影耳所念者何如將爲人目繁而  
 アヒミテハシマシモコヒハナギムカトオモヘドイトコヒマサリケリ  
 相見者須與戀者奈木六香登雖念爾戀益來

夜之穂杼呂ハ曉方うすく  
 と明る時をいふまたほのく  
 らきうちなり  
 念有九四ハ今にもふらし  
 げさふに同じ下のし文字  
 助字ふり別に臨みて名殘  
 の思ふおほに見ゆしハ猶而  
 影に見ゆさなるへし  
 吾胸云々ハ遊仙窟に未會飲  
 炭腹熱如燒不憶吞及腸穿似  
 刺とあるによれり  
 吾妹子ハまことの妹をいふ  
 事計ハ事を思ひ計れさ也  
 白雲之云々はたか〜とい  
 はん序あり  
 高々二ば仰き望みてこひれ  
 かつふふり物を願ふ事を望  
 むさいふも高きを望むより  
 出たりさ本居翁のいはれた  
 るさもあるへし  
 半具良布は蓍の生ひしけり  
 たるなり

ヨノホド ロワガデ、クレバワギモコガオモヘリシク、シオモカケニミユ  
 夜之穂杼呂吾出而來者吾妹子之念有九四四面影二三湯  
 ヨノホドロイテツ、クラク、タビマ子クナレバソガム子キリヤクガゴト  
 夜之穂杼呂出都追來良久遍多數成者吾胸截燒如  
 大伴田村家之大嬢贈妹坂上大嬢歌四首  
 ヨソニ非テコフレ、ケルシソギモコサツギテアヒミムコトバカリセヨ  
 外居而戀者苦吾妹子乎次相見六事計爲與  
 トホカラバソビテモアルササトチカクアットキ、ツ、ミメガスベナサ  
 遠有者和備而毛有乎里近有常聞乍不見之爲便奈沙  
 シラクモ、タナビクヤマノタカ〜ニワカガモフイモサミムヨシモガモ  
 白雲之多奈引山之高々二吾念妹子將見因毛我母  
 イカナラムトキニカイモサムカラフノイヤシキヤドニイリマサセナム  
 何時爾加妹乎牟具良布能穢屋戸爾入將坐  
 右田村大嬢坂上大嬢并是右大辨大伴宿禰麻呂卿  
 之女也、卿居田村里、號曰田村大嬢、但妹坂上大嬢者  
 母居坂上里、仍曰坂上大嬢、于時姊妹諮問、以歌贈答



打渡ハ枕こはふり本居翁  
 云くこは遠く見やる事にて  
 見渡きたる竹田の原の也枕  
 詞にあらずさいへり  
 鳴鶴之ハ鶴の子を思ひてな  
 くによせたり  
 早河之云々早河の瀬にすめ  
 る鳥の草木などのよるへも  
 なきに我子の便なきを誓ふ  
 神左夫跡ハ年ふけたるに云  
 入也多ハ八多也八多さあ  
 りしか脱字し或ハ上下して  
 誤れるさるへしさて年ハふ  
 けたりさていなにあらん時  
 さ違て後ハ心變たらん時  
 心さひしからん也  
 沫緒ハ後世訛りてあハひ結  
 ひ又ハあち結ひなこ云り  
 玉の緒をよりてあハなを結  
 ひたれハこ也  
 典余半ハ齒むちたる老人の  
 物いふ聲をいふ

大伴坂上郎女從竹田庄贈賜女子大嬢歌二首  
 打渡竹田之原爾鳴鶴之間無時無吾戀良久波  
 早河之湍爾居鳥之縁乎奈彌念而有師吾兒羽裳何怜  
 紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首山鹿名曰二  
 神巫夫跡不欲者不有八也多八如是爲而後二佐夫之家  
 牟可聞  
 玉緒乎沫緒二搓而結有者在手後二毛不相在目八方  
 大伴宿禰家持和歌一首  
 百年爾老舌出吾與余牟友而者不厭戀者益友  
 在久邇京思留寧樂宅坂上大嬢大伴宿禰家持作歌一首

一隔山云々ハ久邇ハ奈良と  
 山一重隔たれハまかいへり

物可良爾ハ物なからにこ也  
 目乎保利ハ相見ん事をほり  
 しての意なり  
 二の下首字を脱せり  
 得爾飯ハ誓ふ事又ハ祈る事  
 をいへる古語也爾ハ箭の誤  
 るへしさて心に祈りての  
 れさ部路の遠きにや妹ハ夢  
 に見ゆぬ也  
 今所知ハ今あらたに天皇の  
 まろしめす也

人眼多見云々心まで妹を思  
 ひ忘れんや也上に忘れて  
 思へやさありと如く思ふハ  
 そへたる詞也

一隔山重成物乎月夜好見門爾出立妹可將待  
 藤原郎女聞之即和歌一首  
 路遠不來常波知有物可良爾然會將待君之目乎保利  
 大伴宿禰家持更贈大嬢歌二  
 都路乎遠哉妹之比來者得飼飯而唯宿夢爾不所見來  
 今所知久爾乃京爾妹二不相久成行而早見奈  
 大伴宿禰家持報贈紀女郎歌一首  
 久壁之雨之落日乎直獨山邊爾居者鬱有來  
 大伴宿禰家持從久邇京贈坂上大嬢歌五首  
 人眼多見不相耳曾情左倍妹乎忘而吾莫念國



打布袋ハ現又は願の字の意にてまことにけしきしく香を懸ふるにはあらしき也保村毛友ハひほけさもを略けるにや本居翁いふ村は邪の誤にてほさけさもにてもあらんか志は者の誤にて又不相思者さありしを轉倒し誤れるかさいへり武の上元曆本に有字あり事不問さ百千遍の二首當時の諺か或ハ古事ふさありてよめるよやわきかたし人々の説もあれさ大方あたれりさもおほほす

鷓鴣は枕こさばなり故郷從云々は故京の奈良に居し時より思ひそめしき也事出之者云々ハそもくしめよ詞を出したるハ誰なるそやそよりいひ出して即又その中よさなれ給ふハいかにも也中興村さ川水は苗代へまかせてそこまはしよめさも又未へ流るハ故に其苗代の中よこさいふあり

打妙爾ハひたすらの意也將行常云哉ハゆかんさいふならんやの意あり板蓋之云々は遷都の頃なれば家造る事有なるへし黒木は皮の付たる木材をいふ取の上材の字にちたるならんかあすきりさりてなるへし木居翁いへり勤知氣さよくつさむる汝の意にて知和の誤なりけの事上にいへり長手は長道といふに同じ道の長道と重れいひし也

更毛不得言ハ今更に現よあらんさいえいハすさ也置露乃ハかく露の如くさ也蓋ハ身の誤ならん情は元暦本よ惜とあるよ従ふべし

イツハリモニツキテツスルツシクモモコトワギモコワレニコヒメヤ偽毛似付而曾爲流打布袋眞吾妹兒吾爾戀目入イメニダニミエムトワレハホドケドモアヒシモハ子ハツベミエザラム夢爾谷將所見常吾者保村毛友不相志思諾不所見武コトトハヌキスラアガサ井モロチラガ子リノムラドニアザムカレケリ事不問木尙味狹藍諸第等之練乃村戸二所詐來モトチタビコフトイフトモモロチラガ子リノゴトバシワレハタノマズ百千遍戀跡云友諸茅等之練乃言羽志吾波不信

大伴宿禰家持贈紀女郎歌一首

ウツラナツフリニシサトユカモヘドモナニツモイモニアフヨシモナキ鷓鴣故郷從念友何如裳妹爾相縁毛無寸

紀女郎報贈家持歌一首

コトデシハタガコトナルカサヤマダノナハシロミツノナカヨドニシテ事出之者誰言爾有鹿小山田之苗代水乃中與村爾四手

大伴宿禰家持更贈紀女郎歌五首

ワギモコガヤドノマカキナニニユカバクダシカドヨリカヘンナムカモ吾妹子之屋戸乃笛乎見爾往者蓋從門將返却可聞

ウツタヘニマカキノスガタミマクホリユカムトイヘヤキミナニニコソ打妙爾前垣乃酢墜欲見將行常云哉君乎見爾許曾

イタブキノクロキノヤチハヤマチカシアスシモトリテモマ非リコム板蓋之黒木乃屋根者山近之明日取而持將參來

クロキトリカヤモカリツツカヘメドイソシキワケトホメムトモアラズ黒樹取草毛刈乍仕目利勤知氣登將譽十方不在一登母仕

メバタマノヨベハカヘシツコヨヒサヘワレチカヘスナミチノナガテチ野于玉能昨夜者令還今夜左將倍吾乎還莫路之長手呼

紀女郎襄物贈友歌一首 女耶名曰小鹿

カゼタカミヘニハフケレドイモガタメソテサヘメレテカレタマモソ風高邊者雖吹爲妹袖左倍所沾而刈流玉藻鳥

大伴宿禰家持贈娘子歌三首

ナトハシノサキツトシヨリコトシマテコフレドナソモイモニアヒガタキ前年之先年從至今年戀跡奈何毛妹爾相難

ウツハニハサラニモイハズイメニダニイモガタモトナマキメトシミバ打乍二波更夢不得言夢谷妹之手本乎纏宿常思見者

ワカヤドノクサノヘシロクオクツコノイノチモナシカラズイモニアハザレバ吾屋戸之草上白久置露乃壽母不有情妹爾不相有者



彌布落爾は重々ふる也こは  
響歌にてまたいさ若き女  
を思ふるなるへし  
麻禰久ハまけき意なり

浦若見うらハ草木の末を云  
こハ梢の若きあり

情八十一は上にいへり

春風之云々は風の音を答へ  
するに譬へていひまも答  
たにあらハありて君の  
いはんまにまつへしと也  
奥山之云々本ハねもころと  
いはん序なり  
不相念有哉は吾もあひ思は  
すあらんや相思ふと也  
含有はつばめるないふまた  
いわけなきよたさへたるな  
るへし

大伴宿禰家持報贈藤原朝臣久須麻呂歌三首

ハルノアメハイヤシキフルニウメノハナイマダサカナクイトワカミカモ  
春之雨者彌布落爾梅花未咲久伊等若美可聞

イメノゴトオモホユルカモハシキヤシキミカツカヒノマ子ケカヨハバ  
如夢所念鳴愛八師君之使乃麻禰久通者

ウラワカミハナサキカタキウメチウエテヒトノコトシゲミオモヒソワガスル  
浦若見花咲難寸梅乎殖而人之事重三念曾吾爲類

又家持贈藤原朝臣久須麻呂歌二首

コ、ロケ、オモホユルカモハルカスミタナビクトキニコトノカヨヘバ  
情八十一所念可聞春霞輕引時二事之通者

ハルカセノオトニシテナバアリサリテイマナラズトモキミガマニク  
春風之聲爾四出名者有去而不有今友君之隨意

藤原朝臣久須麻呂來報歌二首

カクヤマノイハカゲニオフルスカノ子ノ子モゴロワレモアヒモハザレヤ  
奥山之磐影爾生流菅根乃勸吾毛不相念有哉

ハルサメチマツトニシアラシソカヤドノワカギノウメモイマゲフイメリ  
春雨乎待常二師有四吾屋戸之若木乃梅毛未含有

萬葉集卷第五

雜歌

太宰帥大伴卿報凶問歌一首

筑前守山上臣憶良悅歌一首并短歌

山上臣憶良令反感情歌一首并短歌

山上臣憶良思子等歌一首并短歌

山上臣憶良哀世間難住歌一首并短歌

太宰帥大伴卿相聞歌二首

答歌二首

帥大伴卿梧桐日本琴贈中衛大將藤原卿歌二首

悦ハ挽の誤ありさて此前に  
序并詩一首あるをこいにそ  
の標出をおさせり



並ハ井の歌ナリ

中衛大將藤原卿報歌一首  
 山上臣憶良詠鎮懷石歌一首并短歌  
 太宰帥大伴卿宅宴梅花歌三十二首並序  
 思故卿歌二首  
 後追和梅花歌四首  
 遊松浦河贈答歌二首  
 蓬客等更贈歌三首  
 娘等更報歌三首  
 帥大伴卿追和歌三首  
 吉田連宜和梅花歌一首

吉田連宜和松浦仙媛歌一首  
 吉田連宜思君未盡重題二首  
 山上臣憶良松浦歌三首  
 詠領巾廳嶺歌一首  
 後人追和歌一首  
 最後人追和歌一首  
 最々後人追和歌二首  
 書殿餞酒日和歌四首  
 聊布私懷歌三首  
 三島王後追和松浦佐容媛歌一首



並ハ井の誤ふリ

- 大典麻田連陽春爲大伴君熊凝述志歌二首
- 山上臣憶良和爲熊凝述志歌一首并並短歌
- 貧窮問答歌一首并短歌
- 山上憶良好去好來歌一首并短歌
- 山上臣憶良沉痾自哀文一首
- 山上臣憶良悲歎俗道假合即離易去難留詩一首并序
- 山上臣憶良重病思兒等歌一首并短歌
- 戀男子名古日歌一首并短歌

雜歌

太宰帥大伴卿報凶問歌一首  
 福故重疊凶問累集、永懷崩心之悲、獨流斷腸之泣、但依兩  
 君大助、傾命纒繼耳、筆不盡言、古今所歎、  
 余能奈可波牟奈之伎母乃等志流等伎子伊與余麻須萬  
 須加奈之可利家理

神龜五年六月二十三日

蓋聞四生起滅、方夢皆空、三界漂流、喻環不息、所以維摩大  
 士在平方大、有懷染疾之患、釋迦能仁坐於雙林、無兔泥洹  
 之苦、故知二聖至極、不能拂力負之尋至、三千世界、誰能逃

報凶問ハ神龜五年大伴卿の  
 妻大伴那女身まかれる時都  
 よりさふらひおこせたるに  
 答へてよまれし也  
 福ハ禍の誤なり禍故ハ禍  
 の事といふ意也  
 崩心斷腸ハ心も腸も  
 まむるをいふ  
 兩君ハ誰とも知かつし  
 傾命ハ年老てよはひ傾ける  
 意纒繼ハ大伴卿の自の病  
 氣の愈たるをいふなるへし  
 志流等伎子の下のし文字ハ  
 助辞なり  
 此序ハ詩の題目録にも見  
 えず脱失せしなるへし  
 四生ハ胎生卵生濕生化生を  
 いふ起滅ハ生起死といはん  
 方夢ハ莊子に方其夢也不知  
 其夢也とあり  
 三界ハ欲界色界無色界を云  
 環不息ハ越絶書に終而復始  
 如環之無端とあり



緋摩大士云々大士方丈の室  
 にありて疾を現せし事あり  
 方丈の誤あり  
 釋迦能仁云々釋尊婆羅雙樹  
 林にて滅度を示したるを云  
 能仁の梵語なり死の誤也  
 度の梵語なり死の誤也  
 力負の莊子に死於於密山  
 於瀟湘之固實然夜半力者負  
 之而走味者不知也さあるに  
 りて死する事な云  
 黒闇ハハも死を云涅槃聖行  
 品より出たる語あり  
 二鼠執走云々釋那代醉編に  
 佛齊人有進死者入井則遇四  
 蛇咬藤而不能下上樹則逢二  
 鼠咬藤而不能升四蛇以噬四  
 時二鼠以日四蛇以噬四  
 見資頭盧法經最勝王經等  
 詩に人生瀟海内忽如鳥過目  
 紅顏素質ハ婦人なハ三從  
 親ハ從夫ハ從子ハ從  
 從夫者なるを云四德ハ婦  
 言婦德婦容婦功なハ  
 何圖云々ハ夫婦の契たハハ  
 半途よして別るハハハハハハ  
 半途の誤あり  
 闕空ハ闕室の誤婦人の闕

黒闇之搜來、三鼠競走、而度目之鳥且飛、四蛇爭侵、而過隙  
 之駒夕走、嗟乎痛哉、紅顏共三從長逝、素質與四德永滅、何  
 圖階老違於要期、獨飛生於半路、闕空屏風徒張、斷腸之哀  
 彌痛、枕頭明鏡空懸、染筠之淚逾落、泉門一掩、無由再見、嗚  
 呼哀哉、  
 愛河波浪已先滅、苦海煩惱亦無結、從來厭離此穢土、本願  
 詫生彼淨刹、  
 日本挽歌一首  
 オホギミノトホノミカドトシラマヒツクシノタニナクコナスシタ  
 大王能等保乃朝廷等期良農比筑紫國爾泣子那須斯多  
 ヒキマシテアイキダニモイマダヤスメズトシツキモイマダ  
 比積摩斯提伊企陀爾母伊摩陀夜周米受年月母伊摩他

染筠ハ舞の妃娥皇女英二人  
 舞を慕ひ其涙にて竹を染た  
 る事博物志に見ゆ其事を云  
 愛河ハ人情の愛を河に譬へ  
 苦海ハ世間の苦を海に譬ふ  
 士ハ此士をいひ淨刹ハ淨  
 日本挽歌ハ右の漢文と詩  
 くに對へて殊更にまか書り  
 期良農比ハ枕詞期ハ斯の誤  
 あり  
 泣子那須ハ泣子の如くなり  
 きて妻の都より來りて程な  
 きハハハハハハハハハハハハ  
 於母波奴阿比陀爾ハ思ひも  
 の下婆の字落たるあるへし  
 石水乎母云々ハ石木にたに  
 語りて思をばらし慰さめん  
 を非情の物なれハハハハハハ  
 て思をやる方もまらさき也  
 迦多知波ハ死屍をいふ葬り  
 て家におらぬよし也末の家  
 さかりいますさいへるに對  
 へて意得へし  
 爾保鳥能ハ枕詞なり  
 許々呂會半企豆ハ背向の意  
 にて世を背くさいふに同  
 摩久良豆ハ枕詞あり

アラチババコヨユモオモハマアヒダニウチナナヒキコ  
 阿良彌婆許許呂由母於母波奴阿比陀爾字知那比積許  
 ヤシメレイハムスベセムスベシラニイハキチモトヒサ  
 夜斯努禮伊波牟須弊世武須弊斯良爾石木乎母刀比佐  
 ケシラズイヘナラバカタチハアラムチウラメンキイ  
 氣斯良受伊弊那良婆迦多知阿阿良牟乎字良賣斯企伊  
 モノミコトノアレナバモイカニセヨトカニホドリノフ  
 毛乃美許等能阿禮乎婆母伊可爾世與等可爾保鳥能布  
 タリナラビ非カタラヒシコ、ロソムキテイヘサカリ  
 多利那良毗爲加多良比斯許許呂會牟企豆伊弊社可利  
 イマス  
 伊摩湏  
 反歌  
 イヘニユキテイカニカアガセムマクラゾクツマヤサ  
 伊弊爾由伎豆伊可爾可阿我世武摩久良豆久都摩夜佐  
 フシクオモホユベシモ  
 夫斯久於母保田倍斯母  
 ハシキヨシカクノミカラニシタヒコシイモガココロ  
 伴之枝與之加久乃未可良爾之多比已之伊毛我已許呂







都智奈其婆云々ハ地に在リ  
日月能斯多波ハ天の下さい  
阿麻久毛能云々ハ雲ハ遠く  
望めハヒキクハ如ク見  
多爾具久能云々ハ蝦蟇にて  
谷の草木を安ク浴る故に  
たぐましく歩み也其ハ渡  
のさ云りさて天雲蝦蟇云々  
天地の涯さいはんか如し  
企許斯遠周ハきしめす見  
大王伊麻周よりかけて見  
久爾能麻保良ハまほむる  
阿麻久毛能ハ物につまれ  
こもりたる事ハ古語也  
らハ助辭なりされハ國の奥  
區をいふ也  
斯可爾波阿長慈迦ハ欲する  
まにハさかあるまじき事  
にハひささす意あり  
奈保々々爾ハ直々にて心の  
事ハき意にいふ  
奈利ハ業あり斯麻佐爾ハま  
ませたるハハハハハハハハハハ  
誤ふるへし

マホラソカニカクニホシキマニシカニハアラツカ  
麻保良叙可爾迦久爾保志伎麻爾麻爾斯可爾波阿羅慈迦  
反歌  
比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保奈保爾伊弊爾可弊利  
アナリナシマサニ  
提奈利乎斯麻佐爾  
思子等歌一首并序  
釋迦如來金口正說等思衆生如羅睺羅又說愛無過子至  
極大聖尙有愛子之心况乎世間蒼生誰不愛子乎  
宇利波米婆胡藤母意母保由久利波米婆麻斯提斯農波  
ユイヅクヨリキタリシモノバナカヒニモトナカカ  
由伊豆久欲利枳多利斯物能會麻奈迦比爾母等奈可  
リテヤスイシナサマ  
利提夜周伊斯奈佐農

羅羅羅ハ釋迦の子也さて最  
勝王經に吾觀衆生無偏黨如  
羅估羅愛無過子誰不愛子乎  
とあり  
伊豆久欲利云々ハいかふる  
過去の因縁にて吾子を生れ  
こしものそ也  
麻奈迦比ハ眼之間にて常に  
目前に在る如く思ふ意ふる  
へし  
夜周伊斯云々ハ安く寝る事  
なせぬ也爪をばみ栗をば  
むにつけても子等の面影を  
見はて忘るハ時もおしこ也  
八大辛苦ハ佛典に生老病死  
受別離怨憎會求不得五陰成  
の八ハいへり  
二毛ハ老て白毛の交り生ふ  
るをいふ  
年月波云々ハ勢米余利伎  
多流さいへるまで年月ハ水  
の流るゝ如く過るにそれ  
つきて追ひ來るやうに様  
々の愁の貴來るも也まつ一  
首の大意を序しさて其事に  
いひ及ぶ  
遠等呼佐備周等ハなごめ  
ふるまひすさいふ意也呼ハ  
昨の誤あり  
余知古良ハ同じころほひの  
子等ないふ

反歌  
シロガ子モコガ子モタマモナニセムニマサレルタカラコニシカメ  
銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米  
ヤモ  
夜母  
哀世間難住歌一首并序  
易集難排八大辛苦難遂易盡百年賞樂古人所歎今亦及  
之所以因作一章之歌以撥二毛之歎其歌曰  
ヨノナカノスベナキモノハトシツキハナガルゴトシトリツ  
世間能周弊奈伎物能波年月波奈何流流其等斯等利都  
バキガヒリルモノハモトクサニセメヨリキタルナト  
都伎意比久留母能波毛比久佐爾勢米余利伎多流遠等  
メラガナトメサビストカラマサタモトニマカシ  
呼良何遠等呼佐備周等可羅多麻乎多母等爾麻可志  
此句云之路多倍乃阿可毛須蘇昆伎余知古良等手多豆佐波  
之久禮奈爲乃阿可毛須蘇昆伎余知古良等手多豆佐波







披雲ハ人に違事を尋みてい  
ふ時にいふ晋の樂廣カ事な  
若披雲霧而觀青天さいへる  
さて此書讀ハ京人の答書に  
て答歌二首さいへるさつ  
き多都馬母の歌さ宇豆都仁  
婆の歌ハ旅人卿のにて京に  
まぐれりし歌されハ替讀の  
又前に大伴淡等難状さありて  
れついでに乱れたるさるへし  
多都能馬ハ周禮に凡馬八尺  
以上爲龍さいへるを思へる  
ふるへし

多仁ハ一本に多米さあるそ  
よき  
多陀爾阿波須云々ハた  
に達すある月日の重なるを  
いふ阿良久ハあるをのへい  
へる也於保久の久ハ之の誤  
ふるへしさいへり

歌詞兩首 大伴卿

多都能馬母伊麻勿愛豆之可阿遠爾與志奈良乃美夜古  
爾由吉帝已牟丹米

宇豆都仁波安布余志勿奈子奴波多麻能用流能伊昧仁  
越都伎提美延許會

答歌二首

多都乃麻乎阿禮波毛等米牟阿遠爾與志波良乃美夜古  
邇許牟比等乃多仁

多陀爾阿波須阿良久毛於保久志岐多閉之麻久良佐良  
受提伊米爾之美延牟

大伴淡等謹狀

梧桐日本琴一面 山對馬結石也

大伴淡等ハ旅人ふり蘇我孫  
子因香さ書るにひさし  
梧桐日本琴の云々目錄に帥  
大伴卿桐日本琴贈中衛大  
將藤原朝歌二首さ有こらも  
例に原題ハ二首さ有こらも  
余託根遠島之嶺生云々ハ  
康琴賦に梧桐之所生今託  
嶽之樂岡また且啼幹於九陽  
また吸日月之休光さある  
也九陽ハ九天休光ハ高き嶺  
出入雁木之間ハ山に伐  
て大樹の茂りたる用きさ  
木ふりさいへりかくて其木  
の事な知るを山を殺して人  
の家を宿りしに雁を殺して  
るるさるを殺せりな殺さて  
たわろき物さるを殺せりな  
故事に事あるを知れりさい  
額ハ盤の誤かり  
左琴ハ古列女傳楚於陵子終  
妻の左琴右書樂在其中さ  
いふより出たり  
伊可爾安良武云々ハいつの  
時いつれの日にかこの意也  
詩詠一本に歌さあれミ歌を

此琴夢化娘子曰余託根遙嶋之崇巒啼幹九陽之休光長  
帶煙霞逍遙山川之阿遠望風波出入鴈木之間唯恐百年  
之後空朽溝瀆偶遭良匠散爲小琴不願質魚音少恒希君  
子左琴即歌曰  
伊可爾安良武日能等伎爾可母許惠之良武比等能比射  
乃倍和我摩久良可武  
僕報詩詠曰  
許等等波奴樹爾波安里等母宇流波之吉伎美我拜奈禮



詩といへる事此卷の末にも  
卷十七にもあり  
拜ハ手の誤なり

闇ハ闇の誤なるへし謹空ハ  
後世左白なまもかきて昔  
の末を白くあましくわく如  
く敬ふ時にく事なり東寺  
にある空海の書版なまにも  
すへてかく書りこそ  
龍門ハ後漢の李膺ハ故事に  
て即ち大伴卿なます也  
蓬身ハ卑下の詞にて蓬頭  
いへるに同じ意あるへし  
白雪ハ白雪の誤あるへし白  
雪之什ハ歌をほめていふ  
和何世古ハ旅人卿なます  
美巨騰ハ御琴さり

能許等爾之安流倍志

琴娘子答曰敬奉德音幸甚幸甚片時覺即感於夢言慨然

不得默止故附公使聊以進御耳謹狀不具

天平元年十月七日附使進上

謹通中衛高明閣下謹空

跪承芳音嘉懼交深乃知龍門之恩復厚蓬身之上戀望殊

念常心百倍謹和白雲之什以奏野鄙之歌房前謹狀

許等騰波奴記爾茂安理等毛和何世古我多那禮乃美巨

騰都地爾意加米移母

十一月八日附還使大監

謹通云々目錄に山上臣憶良  
詠鏡石歌一首并短歌と有  
こいも題の脱しふるへし

幽ハ楹の誤置ハ壁の誤也

徑尺壁ハ淮南子に聖人不費  
尺之壁とありて大なる玉な  
いふさり

往昔云々神功紀に既而皇后  
云々朝欲西征于時也適皇  
后之崩胎息后則取不插腰  
之曰竟遺日產於此十其不  
今在于伊弉縣道邊と見はた  
り伊弉縣ハ今の怡土郡也

謹通尊門記室

筑前國怡土郡深江村子負原臨海丘上有二石大者長一

尺二寸六分圍一尺八寸六分重十八斤五兩小者長一尺

一寸圍一尺八寸重十六斤十兩並皆墮圓狀如鷄子其

美好者不可勝論所謂徑尺壁是也或云此二石者肥前國

而取去深江驛家二十許里近在路頭公私往來莫不下馬

跪拜古老相傳曰往者息長足日女命征討新羅國之時用

茲兩石插著御袖之中以為鎮懷實是御所以行人敬拜此

石乃作歌曰

可既麻久波阿夜爾可斯故斯多良志比咩可尾能彌許等







美都夜ハ見つゝヤハの意  
にて反語のやあり  
古飛斯宜志惡夜ハこひしけ  
ハ戀しき也しゝるやハよしや  
ハ企の誤にてこひしきふれ  
ハ本居翁云く戀繁しゝやに  
てゑやハ嘆息の詞ありとも  
いへりさて世の中かく戀し  
くハ非情の梅にもふらんを  
こ也

斯豆奈ハしてんの意也

ウメノハナサキタルソノアチヤギハカヅラニスベ  
クナリニケラズヤ少貳粟  
久奈利爾家良受夜田大夫  
ハルサレバマヅサクヤドノウメノハナヒトリミツ  
波流佐禮婆麻豆佐久耶登能烏梅能波奈比等利美都  
ヤハルヒククラサム筑前守山  
夜波流比久良佐武上大夫  
ヨノナカハコヒシケシエヤカクシアラバウメノハナ  
余能奈可波古飛斯宜志惠夜加久之阿良婆烏梅能波奈  
ニモナラマシモノサ豊後守大  
爾母奈良麻之勿能怨伴大夫  
ウメノハナイマサカリナリガモフドチカザシニシテ  
烏梅能波奈伊麻佐可利奈理意毛布度知加射之爾斯豆  
ナイマサカリナリ筑後守葛  
奈伊麻佐可利奈理井大夫  
アチヤナギウメトノハナチナリカザシノミテノチ  
阿乎夜奈義烏梅等能波奈乎遠理可射之能彌豆能能知  
ハチリメトモヨシ  
波知利奴得母與斯笠沙彌

那何列久流ハ集中降る事を  
流るさ多くいへり  
主人ハ大伴旅人卿あり

志可須我爾ハしかしふら  
さすかおさいふ意也  
紀能夜麻ハ筑前國下座郡三  
城あり又卷四に城山道ハ三  
ひしけんもさあるも同じ  
所あり  
家ハ我を草書よりあやまれ  
るふるへし

ワガソノニウメノハナチルヒサカダノアメヨリユキ  
和何則能爾宇米能波奈知流比佐可多能阿米欲里由吉  
ノナガレクルカモ  
能那何列久流加母主人  
ウメノハナチラクハイツクシカスガニコノキノヤマ  
烏梅能波奈知良久波伊豆久志可須我爾許能紀能夜麻  
ニユキハフリツハ大監大伴  
爾由企波布理都々氏百代  
ウメノハナチラマクシミソガソノノタケノハヤシ  
烏梅乃波奈知良久怨之美和家會乃乃多氣乃波也之  
ニウグヒスナクモ少監阿  
爾于具比須奈久母氏與島  
ウメノハナサキタルソノアチヤギナカヅラニスツ  
烏梅能波奈佐岐多流會能能阿乎夜疑遠加豆良爾志都  
ツアソビクラサナ少監土  
々阿素毗久良佐奈氏百村  
ウチナナビクハルノヤナギトソガヤドノウメノハナト  
有知奈毗久波流能也奈宜等和家人夜度能烏梅能波奈等  
チイカニカワカム大原史  
遠伊可爾可和可武氏大原

有知奈毗久ハ枕詞あり  
家ハ我の誤ふる事前のに同  
伊可爾可和可武ハいづれま  
さりたこりもさしと愛るこ  
ふるへし



許奴禮我久利ハ木末隠れふ  
伊奴奈流ハ往ぬふり或ハ  
ハ發語にて寝るふり或ハ  
れさいカトあらん猶孝ふへ

米豆良之波の波ハ岐の誤也  
舟氏麻呂ハ丹氏ニ一本にあ

久良の上官本に佐の字ある  
によるへし

岐布得母ハ來り經るこも也  
婆奈ハ波奈の誤あり

岐美乎於母布得ハ君ハ梅を  
さしてハ梅の花を思ふ  
さて待まハ夜もいれさり  
しこ也  
板氏一本に板氏とあるをよ  
しこす

ハルサレバコメレガクリ  
波流佐禮婆許奴禮我久利  
ルウメガシヅエニ少典山氏  
流烏梅我志豆延爾若麻呂

比等期等爾平理加射之都都阿蘇倍等母伊夜米豆良之

波烏梅能波奈加母大判事舟

烏梅能波奈佐企豆知理奈婆久良婆那者伎豆佐久倍久

奈利爾豆阿良受也藥師張氏福子

萬世爾得之波岐布得母烏梅能婆奈多由流已等奈久佐

吉和多流倍子筑前介佐氏子首

波流奈例婆宇倍母佐积多流烏梅能波奈岐美乎於母布

得用伊母爾奈久爾安岐守板氏

烏梅能波奈平利豆加射世留母呂比得波家布能阿比太

波多努斯久阿流倍斯神司布氏

得志能波爾波流能伎多良婆可久斯已曾烏梅平加射之

豆多努志久能麻米大令史野氏宿奈麻呂

烏梅能波奈伊麻佐加利奈利毛毛等利能已惠能古保志

积波流岐多流良斯少令史田氏肥人

波流佐良婆阿波武等母比之烏梅能波奈家布能阿素比

爾阿比美都流可母藥師高義通氏

烏梅能波奈多平利加射志豆阿蘇倍等母阿岐太良奴比

波家布爾志阿利家利陰陽師磯氏法麻呂

得志能波爾ハ毎年也

古保志積ハ戀しき也

阿波武等母比之ハ梅の咲に  
あハ人と思ひし也



乎加肥ハ同邊也

波流加多麻豆ハ春方向也  
春のはじめからいへり或  
ハ片段とも聞ゆれど猶も  
つかし

波流楊奈那宜ハかつらの梅  
詞ふり那字術字あり  
右の下一本に可の字あるそ  
よき

ハルノメニナクヤウグヒスナツケムトソガヘノソノ  
波流能努爾奈久夜汗隅比須奈都氣牟得和何弊能會能

ニウメガハナサク久氏竿道志

鳥梅能波奈知利麻我比多流乎加肥爾波字具比須奈久

母波流加多麻氣豆氏大隅呂

波流能能爾紀利多知和多利布流由岐得比得能美流麻

提鳥梅能波奈知流筑前目田

波流楊奈那宜可豆良爾乎利志鳥梅能波奈多禮可有倍

志佐加豆岐能倍爾氏彼岐日村

于遇比須能於登企久奈倍爾鳥梅能波奈和企弊能會能

爾佐伎豆知留美由對馬目高氏老

家ハ我の誤ふるへし

月高氏ハ目高此の誤ふり

毛布ハ思ふの於を略ける也

許々陀ハそこはくに同じ許  
多の意あり

阿利許曾ハ在乞にて願ふ意  
あり

意母布故我多米ハ見せまほ  
しく思ふ女の爲也

那我比の比もし術字ふれハ  
除くへし

リガヤドノウメノシグエニアソビツウグヒスナク  
和家夜度能鳥梅能之豆延爾阿蘇毗都都字具比須奈久

毛知良麻久乎之美陸海人高

宇梅能波奈乎理加射之都都毛呂比登能阿蘇夫遠美禮

婆彌夜古之叙毛布御師氏

伊母我陸遷由岐可母不流登美流麻提爾許許陀母麻我

不鳥梅能波奈可毛小野氏

宇具比須能麻知迦豆爾勢斯字米我波奈知良須阿利許

曾意母布故我多米筑前椽門

可須美多都那我比岐波流卑乎可謝勢例杼伊野那都可

子岐鳥梅能波那可毛淡野氏



員外ハ右の多くの歌の外  
 いふ意あるへしさて憶良の  
 歌さ見ゆ  
 久多知奴はくたりぬにて齡  
 の傾きたるをいふ  
 久毛爾得夫久須利さハ淮南  
 王劉安の仙薬の白に殘れる  
 を雞犬のなめて天へのほり  
 しさいふ故事によれり  
 遠知米也母ハなちハ若還る  
 こさにて郭公鷹さこの初  
 方へ返るをいふに同じ老て  
 又初の若きいへるよし也  
 さ本居翁いハれたり  
 波牟用波ハ食むよりハ也  
 後追加梅歌ハ前後のついき  
 を見るにこも憶良の歌ふる  
 へし

員外思故郷歌兩首

和 我 佐 可 理 伊 多 久 久 多 知 奴 久 毛 爾 得 夫 久 須 利 波 武 等

母 麻 多 遠 知 米 也 母

久 毛 爾 得 夫 久 須 利 波 牟 用 波 美 也 古 彌 婆 伊 夜 之 古 阿 何

微 麻 多 越 知 奴 倍 之

後追和梅歌四首

能 許 利 多 流 由 棄 仁 末 自 列 留 烏 梅 能 半 奈 半 也 久 奈 知 利

會 由 吉 波 氣 奴 等 勿

由 吉 能 伊 呂 遠 有 婆 比 豆 佐 家 流 有 米 能 波 奈 伊 麻 左 加 利

奈 利 彌 牟 必 登 母 我 聞

半梅ハ字梅の誤ふるへし梅  
 をむめさいへる例集中に見  
 ゆす

伊米爾ハ夢にふり  
 美也備多流ハ都ひにて風流  
 のもしなよめり

余以暫往松浦之縣云々神功  
 紀に夏四月北到火前國松浦  
 縣而進食於玉島里小河之側  
 云々因舉筆乃獲細鱗魚時皇  
 后曰希見物故時人號其處曰  
 梅豆羅國今謂松浦訛語是以  
 其國女人每當四月上旬以釣  
 投河中捕魚於今不絕唯男  
 夫雖釣不能獲魚さ見ゆ

ソガヤドニサカリニサケルウメノハナチルベクナリ  
 和我夜度爾左加里爾散家留牟梅能波奈知流倍久奈里

ヌミムヒトモガモ  
 奴美牟必登聞我母

ウメノハナイメニカタラクミヤヒタルハナトアレモ  
 烏梅能波奈伊米爾加多良久美也備多流波奈等阿例母

フサケニウカベコソ  
 布左氣爾于可倍許會

一云伊多豆良爾阿例乎知良須奈左氣爾于可倍已曾

遊於松浦河序

余以暫往松浦之縣趙遙聊臨玉島之潭遊覽忽值釣魚女

子等也花容無雙光儀無匹開柳葉於眉中發桃花於頰上

意氣凌雲風流絕世僕問曰誰鄉誰家兒等若疑神仙者乎

娘等皆咲答曰兒等者漁夫之舍兒草菴之微者無鄉無家



或臨洛浦云々曹植洛神賦に  
洛浦の神女の事をいひ宋玉  
高唐賦に巫山の神女の事な  
いへるを思ひて此魚をひつる  
女子を神女の如くいひふせ  
るあり王魚ハ巨魚ハ或ハ生  
魚の誤るべし  
歎ハ歎の誤り歎曲を陳ふ  
とハ心のまことなへのつく  
すあり  
騷馬將去ハ文選懸休連曹  
徒限宴樂始酣白日傾夕騷  
就從意不宣展さあり  
さて此序さ歌さハ作者誰さ  
も知つたし或云ハ天平二  
年君の事にて大伴卿さハ人  
さいへさきたつちあらすは  
考ふへし  
有麻必等ハ日本紀に貴人を  
うまひさ或ハ良家子をうま  
ひさのこさ訓り  
夜佐之美ハ耻しさにの意  
あり  
容ハ客の誤り蓬客さハ蓬  
轉の旅客の意にて自ら卑下  
していへるあり

何足稱云唯性便水復心樂山或臨洛浦而徒羨王魚乍臥  
巫峽以空望烟霞今以邂逅相遇貴客不勝感應輒陳歎曲  
而今而後豈可非偕老哉下官對曰唯唯敬奉芳命于時日  
落山西騷馬將去遂申懷抱因贈詠歌曰  
阿佐里須流阿未能古等母等比得波伊倍騰美流爾之良  
延奴有麻必等能古等  
答待曰  
多麻之未能許能可波加美爾伊返波阿禮騰吉美平夜佐  
之美阿良波佐受阿利吉  
蓬容等更贈歌三首

可波能世比可利ハ河瀬もて  
るはつりにうるはしきを云

等部日等ハ枕こさば也  
和可由都流ハ若あつたつる  
あり  
伊毛多干等乎云々ハ我こ  
そ妹さ相贈せめさ也

奈美邊之母波婆ハ並々に思  
ハハにてしハ助辞也

和伎彌ハ吾家也  
阿由故ハ年魚子あり佐婆斯  
留ハさハ發語にて只走る也

麻都良河波可波能世比可利阿由都流等多多勢流伊毛  
河毛能須蘇奴例奴  
麻都良奈流多麻之麻河波爾阿由都流等多多世流古良  
何伊弊遲斯良受毛  
等富都比等末都良能加波爾和可由都流伊毛我多毛等  
平和禮許曾末加米  
娘等更報歌三首  
和可由都流麻都良能可波能可波奈美能奈美爾之母波  
婆和禮故飛米夜母  
波流佐禮婆和伎彌能佐刀能加波度爾波阿由故佐婆斯







衡阜神駕ハ曹子建洛神賦云  
稅駕乎衡阜馴乎芝田有疑  
ハ疑の誤衡ハ葦の誤ふるへ  
戚謝ハ感謝の誤ふる  
那我古飛世殊波ハ長く戀て  
あらんよりハの意ふる

等已與能久爾ハ雄略紀に蓬  
萊山をさこよの國と訓りこ  
も其意ふる

於久禮爲天那我古飛世殊波彌會能不乃于梅能波奈爾  
母奈良麻之母能乎  
和松浦仙媛歌一首  
伎彌乎麻都麻都良乃于良能越等賣良波等已與能久爾  
能阿麻越等賣可忘

思君末盡重題二首

波漏婆漏爾ハはるくにあ  
於忘一本に於母さあり  
志滿ハ嶋にて大和の地名あ  
るへし

波漏婆漏爾於忘方由流可母志良久毛能智弊仁邊多天  
留都久紫能君仁波  
積義可由伎氣那我久奈理努奈良遲那留志滿乃已太知  
母可牟佐飛仁家理

天平二年七月十日

憶良誠惶頓首謹啓

憶良聞方岳諸侯都督判吏並依典法巡行部下察其風俗

意內多端口外難出謹以三首之鄙歌欲寫五藏之鬱結其

歌曰

麻都良我多佐欲比賣能故何比列布利斯夜麻能名乃美

夜伎々都々遠良武

多良志比賣可尾能美許等能奈都良須等美多多志世利

斯伊志遠多禮美吉

一云阿山都流等

憶良誠惶云々月録に山上臣  
憶良松浦歌三首さありこ  
し頃の落しあるへし  
判吏ハ判吏の誤ふるへし

比列布利斯夜麻の事下にあ  
り

多良志比賣ハ神功皇后を申  
す上に神功紀を引いていへり  
奈都良須等ハ魚を釣ますこ  
の意ふる紀に魚此云離と  
もあり



毛々可斯母ハ首日しもにて  
たい久しきないふ  
佐夜禮留ハさハれる也

大伴佐提比古郎子云々目録  
に詠領巾磨嶺一首さあり  
奉仲蕃候ハ宣化紀に二年冬  
十月以新羅終於任那詔大伴  
余村大連道其子磐與狹手彦  
以助任那大將軍大伴連狹手  
彦領兵數万伎于高麗さ有  
黙ハ點の誤さあり  
領巾ハ天武紀に用巾此云比  
例さ見

モカシモモカメマツラガケフユキテアスハキサム  
毛毛可斯母由加奴麻都良遲家布由伎豆阿須波吉奈武  
チナニカサヤレレ  
遠奈爾可佐夜禮留

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹上

大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國穢棹言歸稍赴蒼  
波委也松浦佐用嗟此別易歎彼會難即登高山之嶺遙望  
離去之船悵然斷肝默然銷魂遂脫領巾磨之傍者莫不流  
涕因號此山曰領巾磨之嶺也乃作歌曰  
トホツヒトマツクサヨヒメツマバヒニヒレフシヨ  
得保都必等麻通良佐用比米都麻胡非爾比例布利之用  
リガヘルヤマノナ  
利於返流夜麻能奈

後人追和

夜麻能奈等云々佐用姫  
のッ名も山の名さ共に音續  
げさ思ひてか領巾なふりけ  
んささ山のへハ山の上也

ヤマノナトイヒツツノトカヒメガコノヤマノヘ  
夜麻能奈等伊賀都夏等可母佐用比賣何許能野麻能閉  
ニヒレチフリケム  
仁必例遠布利家無

最後人追和

許能多氣仁ハ此嶽にてたけ  
ハ高トこいふより出たる器  
さあり

ヨロヅヨニカタリツゲトシコノタケニヒレフリケラ  
余呂豆余爾可多利都夏等之許能多氣仁比例布利家良  
シマツラサヨヒメ  
之麻通羅佐用嬪而

最最後追和二首

後の下人の字脱たるさあり  
布良斯家武ハ振りけんを延  
へたるさあり

ウナバヲノガキユクフ子カヘレトカヒレフラシケ  
字奈波良能意吉由久布禰遠可弊禮等如比禮布良斯家  
ムマツラサヨヒメ  
武麻都良佐欲比賣

布利等騰尾加禰ハ領巾を振  
りてさいめかれさいふへき  
な略きていへり

ユクフ子ナフドミカ子イカバカリコホソクアリ  
由久布禰遠布利等騰尾加禰伊加婆加利故保斯苦阿利  
ケムマツラサヨヒメ  
家武麻都良佐欲比賣







許布夜須疑南道の長手を戀ひつゝや行過ぎふんこ也  
日等騰比母奈久ハ次の長歌  
によるに父母にもいふ事  
もなきないへり

比等國爾ハ他國にいふ  
意夜能目遠保利ハ親を見ま  
くほりする事也

國司守ハ椽目ふさかも國司  
さいへばまかかける也

肥前一木に肥後さあるなよ  
しとす

宮ハ官の誤かり

假合ハ佛典に四大假合と云  
事ありて人の身ハ假に地水  
火風を相合せたるものなり  
といへる事也

大伴君熊凝歌二首 大典麻田

國遠伎路乃長手遠意保保斯久許布夜須疑南已等騰比  
母奈久

朝露乃既夜須伎我身比等國爾須疑加豆奴可母意夜能  
目遠保利

筑前國司守山上憶良敬和爲熊凝述其志歌六首并序  
大伴君熊凝者肥前國益城郡人也年十八歲以天平三年  
六月十七日爲相撲使某國司宮位姓名從人參向京都爲  
天不幸在路獲疾即於安藝國佐伯郡高庭驛家身故也臨  
終之時長歎息曰傳聞假合之身易滅泡沫之命難駐所以

二説ハ二親の誤かり

得親ハ父母の起居をさふな  
親さふ  
さてこの序ハ憶良の能避に  
代りて作れる事なり  
宇知比佐受ハ枕詞受ハ殿ハ  
須の誤るへし  
多羅知斯夜ハ冠群多ハ斯ハ  
福の誤ハ夜一本に能に作れ  
り然らハたらねのミ訓へ  
きよしハへりされミたらち  
ハ日足にて育て日を足らし  
むる義にしてしヤハ助辞ハ  
らんカ  
意久迦ハ國の夷處也  
迦多良比去禮勝ハミに旅  
ゆく人と語りひついでゆく  
るへし  
伊多波斯ハ勢しにて病を云  
道方の下一本に久字あるな  
よしとすさてくまみハくま  
へにて道の折まける所を  
いふくまみハミ訓へける事

千聖已去百賢不留况乎凡愚微者何能逃避但我老親並  
在菴室待我過日自有傷心之恨望我違時必致喪明之泣  
哀哉我父痛哉我母不患一身向死之途唯悲二説在生之  
苦今日長別何世得觀乃作歌六首而死其歌曰

宇知比佐受宮弊能保留等多羅知斯夜波何手波奈例  
常斯良奴國乃意久迦袁百重山越豆須疑由伎伊都斯可  
母京師乎美武等意母比都々迦多良比袁禮騰意乃何身  
志伊多波斯計禮婆玉梓乃道乃麻尾爾久佐太袁利志婆  
刀利志伎提等計自母能宇知許伊布志提意母比都都奈  
宜伎布勢良久國爾阿良波父刀利美麻之家爾阿良婆母







に替るものなるべし  
伎倍騰毛の着能へさも也  
未の答よて別るやうなれ  
天の答よて別るやうなれ  
大答よて別るやうなれ  
意に人を生れ来るはたの  
和氣佐我禮流の肩衣の海  
反可布也新撰字に續先列  
直土爾云々たに土の上  
伊等乃伎提いこいさいふ  
短物乎云々の短杖截端の意  
楚の苦杖あり  
五十月其の長の誤ふるへし  
里置長一人さいへるを以て  
長杖をさきよめり  
處に立て田租賦役等をばた  
るをいふ  
字之等夜佐之等ハうしと思  
ひ耻しと思へさし也  
飛立可禰都云々の詩經に靜  
言思之不愆飛さあり  
好去好來さの長歌の末に惹  
ふくまきくいましてはやハ  
へりませこあるなもていハ  
りこハ天平五年三月多治比  
真人廣成遣唐使にて出立時  
憶良のよみておくれる也  
伊都久志吉國さの皇神の殿  
にもろくの大御神たち云

之等伊倍禰安我多米波狹也奈理奴流日月波安可之等  
伊倍騰安我多米波照哉多麻波奴人皆可吾耳也之可流  
和久良婆爾比等等波安流平比等等奈美爾安禮母作平細  
毛奈伎布可多衣乃美留乃其等和和氣佐我禮流可可布  
能尾肩爾打懸布勢伊保能麻宜伊保乃内爾直土爾護解  
敷而父母波梳乃可多爾妻子等母波足乃方爾圍居而愛  
吟可麻度柔播火氣布伎多豆受許之伎爾波久毛能須可  
伎提短物乎端伎流等云之如楚取五十戶良我許惠波寢  
屋度麻但來立呼比奴可久婆可里須部奈伎物能可世間

炊飯器也さあり  
奴延鳥乃の枕詞能村與比ハ  
ぬえの咽聲の如くうめくや  
伊等乃伎提いこいさいふ  
短物乎云々の短杖截端の意  
楚の苦杖あり  
五十月其の長の誤ふるへし  
里置長一人さいへるを以て  
長杖をさきよめり  
處に立て田租賦役等をばた  
るをいふ  
字之等夜佐之等ハうしと思  
ひ耻しと思へさし也  
飛立可禰都云々の詩經に靜  
言思之不愆飛さあり  
好去好來さの長歌の末に惹  
ふくまきくいましてはやハ  
へりませこあるなもていハ  
りこハ天平五年三月多治比  
真人廣成遣唐使にて出立時  
憶良のよみておくれる也  
伊都久志吉國さの皇神の殿  
にもろくの大御神たち云

乃道  
世間乎宇之等夜佐之等於母倍禰母飛立可禰都鳥爾之  
安良禰婆  
山上憶良頓首謹上  
好去好來歌一首反歌二首  
神代欲理云傳介良久虛見通倭國者皇神能伊都久志吉  
國言靈能佐吉播布國等加多利繼伊比都賀比計理今世  
能人母許等期等目前爾見在知在人佐播爾滿豆播阿禮  
等母高光日御朝廷神奈我良愛能盛爾天下奏多麻比志  
家子等撰多麻比天勅旨  
イハノコトエラビタマヒテオホミコト反云  
イタビキモチテモロコシノトホキカヒニツ  
載持豆唐能遠境爾都加播











善爲者ハ爲善者の轉倒ふるへし

笑ハ算の古字あり

任微君ハ梁の任昉字元卑といへる人也

厚訓一本に原訓に作れり

羽翮ハ道を得て飛行する事なほ仙術を得し人を羽客ともいへり

有比丘名曰難達臨命終時詣佛請壽則延十八年但善爲者天地相畢其壽夭者業報所招隨其修短而爲半也未盈斯竿而過死去故曰未半也

任微君曰病徒口入故君子節其飲食由斯言之人遇疾病不必妖鬼夫醫方諸家之廣說飲食禁忌之厚訓知易行難處鈍情三者盈目滿耳由來久矣抱朴子曰人但不知其當死之日故不愛耳若誠知羽翮可得延期者必將爲之以此而觀乃知我病蓋斯飲食所招而不能自治者乎

帛公零說曰伏思自厲以斯長生生可貪也死可畏也天地之大德曰生故死人不及生鼠雖爲王侯一日絕氣積金如

二九五

註の北望ハ北邙に同じ又何懐ハ文選に常懷とあり

合樂ハ合樂の誤あり帛出ハ帛公の誤あり生好物也死惡物也ハ左傳の語あり

山誰爲富哉威勢如海誰爲貴哉遊仙窟曰九泉下人一錢不直孔子曰受之於天不可變易者形也受之於命不可請益者壽也見鬼谷先故知生之極貴命之至重欲言言窮何以言之欲慮々絶何由慮之惟以人無賢愚世無古今咸悉嗟歎歲月競流晝夜不息宣子曰往而不反者年也老疾相催朝夕侵動一代歡樂未盡席前魏文惜時詩曰未盡千年愁苦更繼坐後古詩云人生不滿百何憂三千年矣若夫群生品類莫不皆以有盡之身並求無窮之命所以道人方士自負丹經入於名山而合樂之者養性怡神以求長生抱朴子曰神農云百病不愈安得長生帛出又曰生好物也死惡物也若不幸而



無福至甚の下脱語あるへし

以鼠爲喻ハ毛詩に相鼠有皮人而無儀人而無儀不死何爲とあり

註の已見上也の四字一本にみし

註の慈氏ハ彌勒を云

三邪淫ハ三不邪淫の不字を脱せり齊濟の齊の字官本にふし郡國一本邪國に作るをよしとす  
陵谷更ハ高岸爲谷深谷爲陵とありて世の移りかはる事にいへり  
擊目申臂ハ莊子に目擊而道存矣云々又父一臂而失之云々とありて共に須臾の間のたさへあり

不得長生者猶以生涯無病患者爲福大哉今吾爲病見惱不得臥坐向東向西莫知所爲無福至甚總集于我人願天從如有實者仰願頓除此病賴得如平以鼠爲喻豈不愧乎  
已見上也

悲歎俗道假合即離易去難留詩一首并序

竊以釋慈之示教謂釋氏先開三歸謂歸佛歸法歸僧五戒而化法界

謂一不殺生二不偷盜三不妄語四不飲酒五不飲酒也周孔之垂訓前張三綱謂君臣夫婦

五教以齊濟郡國謂父義母慈兄友弟順子孝故知引導雖二得悟惟

一也但以世无恒質所以陵谷更變人无定期所以壽夭不

同擊目之間百齡已盡申臂之頃千代亦空且作席上之主

白馬走來ハ白駒の隨を過る事にて日月の早くゆくを云空懸信劔ハ季札が徐君の家ハ史記を見て知るへし白楊ハ墳墓に植るもの世古詩ふさに多く見ゆたり

維摩大士云々維摩病を方丈に現したるをいふ釋迦能仁云々釋尊沙羅雙樹の下にて涅槃を示したるをいふふり内教ハ聖行品也

俗道一本に世道に作れり

靈剋ハ枕詞あり

夕爲泉下之客白馬走來黃泉何及隴上青松空懸信劔野中白楊但吹悲風是知世俗本無隱遁之室原野唯有長夜之憂先聖已去後賢不留如有贖而可免者古人誰無價金乎未聞獨存遂見世終者所以維摩大士疾玉體于方丈釋迦能仁掩金容乎雙樹内教曰不欲黑闇之後來莫入德天之先至德天者生也故知生必有死死若不欲不如不生况乎縱覺始終之恒數何慮存亡之大期者也俗道變化猶擊目人事經紀如申臂空與浮雲行大虛心力共盡無所寄

老身重病經年辛苦及思兒等歌七首長一首短六首

靈剋内限者謂浮州人壽平氣久安久母阿良牟遠事母



數無わさきなきを云さて集  
中多く襲の字をわけけれは此  
も襲の字の誤るるへし  
痛伎瘡爾波云々上の自長  
文に諺曰さて書る詞あり  
表荷打ハ今も上荷或ハ小付  
中荷おと添へうつないふ  
老爾豆阿留ハ老去たる也  
病遠等のハ助辞あり

今比ハ一本に吟比さあるそ  
よき  
許等許等波ハ異事にて幼き  
子を殘したかん悲しみの外  
にハ死ふんと思ふさ也  
五月蠅奈周ハ枕こさバ也  
宇都ハ豆波ハ打捨てハの約  
にて知須の反都ふれハ也  
死波不知ハえしふぬの意也  
心波母延農ハ思ひのやくる  
ないふ

出波之利云々ハ走出てい  
ふらん所へいふらんと思  
さも子等に障へらるさ也

富人能云々ハ富める人の家  
にハ衣ハ多きを着すへき子  
等の少ふさにさの意さるへ  
し久多志ハ腐しかり  
越ハ泡の誤るるへし  
さて此歌ハ次の麗妙の歌さ  
ハ上の貧窮問答の反歌の紛  
れてこゝに入たるふるへし  
水沫奈須ハ水の泡の如くさ  
也  
倭父手纏ハ枕詞かり父一本  
に文さあるに従ふへし

ナクモナクモアラムチヨノナカノウケツツラケクイトノキテ  
無裳無母阿良牟遠世間能宇計久都良計久伊等能伎提  
イタキキズニハカラシホナソ、グチフガゴトクマス、モモモキマニニウハ  
痛伎瘡爾波、鹹摺遠灌知布何其等久益益母重馬荷爾表  
ニウツトイフコトノゴト、オイニテアルワガミノウヘニヤマヒナラクハ  
荷打等伊布許等能其等老爾豆波留我身上爾病遠等加  
テアレバ、ヒルハモナゲカヒクラン、ヨルハモイキツキアカシトシ  
豆阿禮婆盡波母歎加比久良志夜波母息豆伎阿可志年  
ナガクヤミシワタレバ、ツキカサ子ウレヘサマヨヒコトハシナトオモヘ  
長久夜美志渡禮婆月累憂今比許等許等波斯奈奈等思  
ドサバヘハナスサワグ、コドモチウツテ、ハシニハシラズミツ、  
騰五月蠅奈周佐和久兒等遠宇都豆波死波不知見乍  
アレバ、コ、ロハモエヌカニカクニ、オモヒワツラヒ子ノミシナ  
阿禮婆心波母延農可爾可久爾思和豆良比爾能尾志奈  
カユ  
可由

反歌

ナグサムルコ、ロハナシニクモガクリナキユクトリノ子ノミシナカユ  
奈具佐牟留心波奈之爾雲隱鳴往鳥乃爾能尾志奈可由

スベモナクケルシクアレバ、イデハシリイナ、トオモヘドコラ  
周弊母奈久苦志久阿禮婆出波之利伊奈々等思騰許良  
ニサヤリヌ  
爾佐夜利奴  
トミヒトノイヘンコドモノキルミナミクダシスツラム、キヌワタラ  
富人能家能子等能伎留身奈美久多志須都良牟絶綿良  
ハモ  
波母  
アツタヘン、ノギメナダニキセ、ガテニカクヤナゲカムセム、スベチナミ  
危妙能布衣遠陀爾伎世難爾可久夜歎敢世牟周弊遠奈美  
ミナハナス、モロキイノチモクナハノチヒロニモカト子ガヒク、ラシツ  
水沫奈須微命母考經能千尋爾母何等慕久良志都  
シツタマキカズニモアラヌミニ、ハアレドチトセニモガトオモホユ  
倭父手纏數母不在身爾波在等千年爾母何等意母保由  
ルカモ  
留加母  
去神龜二年作之、但  
以類故更載於茲

天平五年六月丙申朔三日戊戌作

戀男子名古日歌三首長二一首







此卷憶良の家集に見ゆれは  
自名を記さざりしふるへし

萬葉集卷第五

萬葉集卷第六

雜歌

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作

歌一首并短歌

或本三首

車持朝臣千年作歌一首并短歌

或本二首

神龜元年甲子冬十月幸于紀伊國時山部宿禰赤人作

歌一首并短歌

二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一



首并短歌

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村歌一首并短歌

車持朝臣千年歌一首并短歌

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

三年丙寅秋九月十五日幸于幡磨國印南野時笠朝臣

金村作歌一首并短歌

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

過幸荷嶋時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

過敏馬浦時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

金村の下作字を脱せり

千年の下亦作字を脱せり

幡磨の播の字あるを本文も  
しかりけるは同音にてかく  
も書しあるへし

幸荷ハ辛の誤あり

力ハ刀の誤あり

于年ハ千年の誤あり

四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授力寮時作

歌一首并短歌

五年戊辰幸于難波宮時車持朝臣于年作歌四首

同幸之時膳王作歌一首

太宰少貳石川朝臣足人歌一首

帥大伴卿和歌一首

冬十二月太宰官人等奉拜香椎庶時帥大伴卿作歌一首

大貳小野朝臣老作歌一首

豐前守宇努首男人作歌一首

帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首

帥ハ帥の誤あり



同卿宿次田温泉鴨聞鶴喧作歌一首  
 天平二年庚午勅遣攝駿馬使大伴道足宿禰等時勅使  
 大伴道足宿禰饗帥家日葛井連廣成應聲吟歌一首  
 冬十一月大伴坂上郎女名兒山作歌一首  
 同坂上郎女向京海路見濱貝作歌一首  
 冬十二月太宰帥大伴卿上京之時娘子作歌二首  
 大納言大伴卿即和歌二首  
 三年辛未大納言大伴卿在寧樂家思故鄉作歌二首  
 四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使時高橋連蟲磨  
 作歌一首并短歌

廣ハ麻呂の誤ふり

三〇六  
三〇七

御ハ卿の誤ふり

杜ハ社の誤丸ハ麻呂の誤な  
リ

天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌  
 中納言安倍廣庭御歌一首  
 五年癸酉超草香山時神社忌寸老丸作歌二首  
 山上臣憶良沈痾之時歌一首  
 大伴坂上郎女與姪大伴宿禰家持歌一首  
 安部朝臣蟲磨月歌一首  
 大伴坂上郎女月歌三首  
 豊前國娘子月歌一首  
 湯原王月歌二首  
 勘公卿補任今年二十

勘公卿補任云々九字後人の  
書入あるを誤りて本文よ入  
たるふり



庶人の誤り又本文に見渡岡之松樹とあり此ハ略ける也

- 藤原朝臣八束月歌一首
- 市原王宴禰父安貴王歌一首
- 湯原王打酒歌一首
- 紀朝臣庶人松樹歌一首
- 同鹿人泊瀬河歌一首
- 大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首
- 同郎女初月歌一首
- 大伴宿禰家持初月歌一首
- 大伴坂上郎女宴親族歌一首
- 六年甲戌海犬養宿禰崗磨應詔歌一首

- 春三月幸于難波宮時歌六首
- 作者未詳歌一首
- 船王歌一首
- 守部王歌一首
- 山部宿禰赤人歌一首
- 安部朝臣豊繼歌一首
- 筑後守葛井連大成遙見海人釣船作歌一首
- 按作村主益人歌一首
- 八年丙子夏六月幸于芳野離宮時山部宿禰赤人應詔歌一首并短歌



友人の人の字本文よかし

市原王悲獨子歌一首

忌部首黒麿恨友人賒來歌一首

冬十一月葛城王等賜橘姓之時御製歌一首

橘宿禰奈良麿應詔歌一首

十二月葛井連廣成家宴歌二首

九年丁丑春正月橘少卿并諸大夫等宴彈正尹門部王

橘文明本文に橘宿禰文成とあり

宅歌二首 門部王橘文明

榎井王後追和歌一首

春二月諸大夫等宴左少辨巨勢朝臣宿奈麿家歌一首

夏四月大伴坂上郎女越相坂山時作歌一首

麿ハ麿の誤なり

八月の下半年に二十日とあり此ハ略せるあるべし

十上の十一の誤なり

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首

石上乙麿卿配土左國時歌三首并短歌

秋八月右大臣橘家宴歌四首

十上年巳卯天皇遊獵高圓野之時獲遁走堵中小獸擬

獻御在所大伴坂上郎女作歌一首

十二年庚辰冬十月依太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發

軍幸于伊勢國之時河口行宮內舍人大伴宿禰家持作

歌一首

天皇御製歌一首

丹比真人屋主歌一首



多勢ハ多藝の誤ふり

八月の下文に十六日あり此ハ略けるからん

正月の下文に五日あり

狹殘行宮大伴宿禰家持作歌二首

美濃國多勢行宮大伴宿禰東人作歌一首

大伴宿禰家持作歌一首

不破行宮大伴宿禰家持作歌一首

十五年癸未秋八月内舍人大伴宿禰家持讚久邇京師

作歌一首

高丘連河内歌二首

安積親王宴左少辨藤原朝臣八束家之日内舍人大伴

宿禰家持作歌一首

十六年甲申春正月諸卿大夫宴安倍朝臣蟲麿家歌一首

同月十一日登活道岡集一株松下飲歌二首大伴宿禰家持市原王

傷惜寧樂京師荒墟作歌三首 作主未詳

悲寧樂京故郷作歌一首并短歌

讚久邇新京歌二首并短歌

春日悲傷三香原荒墟作歌并一首短歌

難波宮作歌一首并短歌

過敏馬浦時作歌一首并短歌



此卷養老七年より天平十六年までの年號を擧げて次第にありては家持卿の家集なる事帥大伴卿の名をさねなして知るべし

御舟乃山ハ吉野の瀧の上あり  
水枝ハひつゝしき枝にて  
刀其乃能ハまくら詞なり  
集中の例ツツの木さあり刀  
部とハ通ヘミ猶刀ハ部の  
誤にもやあらん  
清瀧二字のち一字ハ誤に  
て晴清ふさやありけん然ら  
ハたのみさやけみさ訓へし  
さて此下一句脱しあらん

見牡鹿ハ見てしかな願ふ  
詞なりかし濁りて訓へし  
河内ハ可の曲れる所を云  
白木綿草云々ハゆふもて作  
れる花の如くよの意なり

雜歌

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作  
歌一首并短歌

タギノウヘノミフ子ノヤマニミツエサシシワニオヒタルトガノキノイヤツヤ  
瀧上之御舟乃山爾水枝指四時爾生有刀我乃樹能彌繼  
ツギニヨロツヨニカクシシラサムミヨシメノアキツノミヤハカミカラカダフト  
嗣嗣萬代如是二二知三三芳野之晴蛉乃宮者神柄香貴  
カラムクニガカラカミガホシカラムヤマカハトキヨミサヤケミツベカニヨサダケラシ  
將有國柄鹿見欲將有山川乎清清諾之神代從定家良思母

反歌

トシノハニカクモミテシガミヨシメノキヨキカフチノタギツシラナミ  
每年如是蒙見牡鹿三吉野乃清河内之多藝津白波  
ヤマタカミシラユフバナニオチタギツタギノカフチハミレドアカメカモ  
山高三白木綿花落多藝追瀧之河内者雖見不飽香聞  
或本反歌曰

夕還將見ハゆきツヘリノ  
たゆることさく見んミ也

瀧乃水沫云々ハたきりたつ  
る水の泡の木綿花の如く見  
ゆるをいふ  
于年ハ元暦本に千年に作れ  
るに従ふへし

味凍ハまくらことばなり  
綾丹乏敷ハあふつらしく  
の意なり  
鳴神乃ハまくら詞なり  
開來者ハ夜の明けぬれハの  
意なり

辨ハ古葉略要に利さあるを  
よしとす又詳の字一本にな  
きよ従ふへし  
紐ハ紐の誤なるへし  
惟ハ元暦本に惜さあるをよ

雖畏ハ雖見の誤よてみつれ  
こらなるへしさくハ開  
いたして下句ハ故郷人な  
思ひわすれぬ意なり

カミカラカミガホシカラムミヨシメノタギツカフチハミレドアカメカモ  
神柄加見欲賀藍三吉野乃瀧河内者雖見不飽鴨

ミヨシメノアキツノカハノヨロツヨニタユルコトナクマタカヘリミム  
三吉野之秋津乃川之萬世爾斷事無又還將見

ハツセメノツクルユフバナニヨシメノタギノミナツニサキニケラズヤ  
泊瀧女造木綿花三吉野瀧乃水沫開來受屋

車持朝臣于年作歌一首并短歌

ウマゴリノアヤニトヒシクナルカミノオトノミキハシミヨシメノマキタツヤマユミ  
味凍綾丹乏敷鳴神乃音耳聞師三芳野之真木立山湯見  
クダセバカハノセゴトニアケクレバアサギリタチサレバカハツナナリヒモトカ  
降者川之瀨毎開來者朝霧立夕去者川津鳴奈辨詳紐不  
メタビニシアレバアノミシテキヨキカハラナミラクシサシモ  
解客爾之有者吾耳爲而清川原乎見良久之情蒙

反歌一首

タギノヘノミフ子ノヤマハカシコケドオモヒリスルトキモヒモナシ  
瀧上乃三船之山者雖畏思忘時毛日毛無

或本反歌曰



音の上一本に川字あり

西刺はまくらこまばなり  
日不並二の日をも重ねぬに  
の意あり  
霧丹立乍はなけきの霧あり

千鳥鳴三吉野川の音成止時梨二所思公

昔刺日不並二吾戀吉野之河乃霧丹立乍

右年月不審但以歌類載於此次焉或本云養老七年

五月幸于芳野離宮之時作

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿禰赤

人作歌一首并短歌

左日鹿野の紀伊國海部郡に  
雜賀庄あり若浦の邊也

安見知之和期大王之常宮等仕奉流左日鹿野由背上爾  
所見與鳥清波激爾風吹者白浪左和伎潮干者玉藻菰管  
神代從然會尊吉玉津島夜麻

反歌

潮干満今潮干なるか後にみ  
ちての意あり

伊隱去ハハ發語潮のみち  
て玉藻の隠れハハをしく思  
はれん也  
満乎無美ハ潮の滿來て干満  
のなきになり  
霧ハ一本に深さあるそよき

與島荒磯之玉藻潮于滿伊隱去者所念武香聞

若浦爾臨滿來者満乎無美籬邊乎指天多頭鳴渡

右年月不記但備從駕玉津島也因今檢注行幸年月

以載之焉

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作

歌一首并短歌

御山ハ吉野の宮所あれハま  
かいふあり  
上邊下邊ハ上つ瀬下つ瀬ハ  
越乞爾云々此處字の誤あら  
ん古本に思自の自字ハし  
文舟ハ元曆本ハ文舟とある  
に從ふへし  
玉葛ハまくらこまば也

足引之御山毛清落多藝都芳野河之河瀬乃淨乎見者上  
邊者千鳥數鳴下邊者河津都麻喚百磯城乃大宮人毛越  
乞爾思自仁思有者每見文舟乏玉葛絕事無萬代爾如是  
霜願跡天地之神乎會禱恐有等毛



見友ハみるさもの意なり  
人皆乃云々ハ人のよも昔よ  
もこの意ふり元曆本に昔人  
乃あり  
常有沼鴨ハ磐の如く常にあ  
れしと願ふ意あり

離の下宮の字を脱せり  
立名附ハ枕こさばなり  
青牆隱ハ青山四方にそはた  
ち廻れるなふ  
花咲乎遠里ハ花のさきたわ  
むなふ  
其山之此河之ハ其山の如く  
此河の如くさふを略けり

久木ハ楸にて俗に木さつけ  
さいふものなり

反歌二首

ヨロツヨニミトモアカノヤミヨシヌノタギツカフチノオホミヤドコロ  
萬代見友將飽八三吉野之多藝都河内之大宮所

ヒトミナノイノチモソレモヨシメノタギノトコハノツチナラメカモ  
人皆乃壽毛吾母三吉野乃多吉能床磐乃常有沼鴨

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

ヤスミシ、ワゴホキミノタカシラスヨシヌノミヤハタ、ナツクアナガキゴモリカハ  
八隅知之和期大王乃高知爲芳野離者立名附青牆隱河  
ナミノキヨキカフチンハルハハナサキチナリアキサレバキリタチツタルソノヤマノ  
次乃清河内曾春部者花咲乎遠里秋去者霧立渡其山之  
イヤマスノニコノカハ、タユルコトナクモ、シキノオホミヤビトハツチニカヨハム  
彌益々爾此河之絶事無百石木能大宮人者常將通

反歌二首

ミヨシヌノキサヤマギハノコヌレニハコゴダモサワグトリノコエカモ  
三吉野乃象山際乃木末爾波幾許毛散和口鳥之聲可聞  
メバタマノヨノフケユケバヒサヤカフルキヨキカハラニチドリシバナク  
鳥玉之夜乃深去者久木生留清河原爾知鳥數鳴

跡見ハ鳥獸の跡をもさめ見  
る人なふ  
射固ハ射部にて弓射る人を  
いふ固ハ誤にて元曆本に日  
さあるに従ふへし

馬並而ハ馬を乘並へて也

得物矢ハ即ち幸箭也  
狭ハ挾の誤なり

便ハ便の誤ふるへし

忍照基垣乃ハ枕詞なり  
念息而ハおしひたのみての  
意なるへし又息の字しハ  
誤なるんか  
都禮母爲ハよしもなくさい  
ふ意なり爲ハ無の誤ふるん  
續麻成奥鳥ハ枕詞なり  
味原乃原ハ攝津國東生郡味  
原郷あり桓武紀に陸生野も  
見也

ヤスミシシワゴホキミノミヨシヌノアキツノチヌノメノヘニハト  
安見知之和期大王波見芳野乃飽津之小野笑野上者跡  
ミエオキテミヤマニハイメタテラタシアサガリニシ、フミオコシユフガリニト  
見居置而御山者射固立波朝獵爾十六履起之夕狩爾十  
リフミタテラマメテミカリンタタスハルノシゲメニ  
里踰立馬並而御獵曾立爲春之茂野爾

反歌一首

アシビキノヤマニヒメニモミカリビトサツヤタバサミミダレタルミ  
足引之山毛野毛御獵人得物矢手狹散動而有所見

右不審先後但以便故載於此次

冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌

カシテルナニハノクニハアシガキノフリメルサトヒトミナノオモヒイコヒテツレサク  
忍照難波乃國者葦垣乃古郷跡人皆之念息而都禮母爲  
アリシアヒダニウミナナスナガラノミヤニマキバシラフトカシキアナスグニナオサマ  
有之間爾續麻成長柄之宮爾真木柱太高敷而食國乎取  
タマハバオキツトリアザフノハラニモノ、フノヤツトモノハイホリシテミヤコナシタリ  
賜者與鳥味經乃原爾物部乃八十伴雄者盧爲而都成有



八十伴雄者云々ハ從駕の官  
人假慮に居るをいふ  
都成有云々の行幸によりて  
旅ながら都の如しこの意也

客乃屋取ハ官人の假慮を云

鯨魚取ハまくらこまばなり

百五重ハ五百重の誤なり  
益敷布爾ハいよ一重々に  
なり

雖見ハ欲見の誤にてみかほ  
しならんか本のまゝにてハ  
未へついきさまわろし  
五十開回有ハいハ發語にて  
さきめくるさハ浪の花の高  
くたちめくるさハいふ  
往吉ハ元曆本に住吉とある  
よしとさいへるハ和名抄に見

タヒニハアレド  
旅者安禮十方

反歌二首

アヲノノニサトハアレドモホヤミノシキマストキハミヤコトナリメ  
荒野等丹里者雖有大王之敷座時者京師跡成宿

アマノトメタナトシナアチヨクシラシタビノヤドリニカチカトキコ  
海未通女棚無小舟榜出良之客乃屋取爾梶音所聞

車持朝臣千年作歌一首并短歌

イサナトリハマバチキヨミツチナビキオフルタマニアサナギニチヘニナミヨセユフ  
鯨魚取濱邊乎清三打靡生玉藻爾朝名寸二千重浪縁夕

ナギニイホヘナミヨルヘツナミノイヤシクシクニツキニケニヒニミル  
菜寸二百五重波因邊津浪之益敷布爾月二異二日日雖

トモイマノミニアキタラメヤモシラナミノイサキメケレルスミノエノハマ  
見今耳二秋足目八方四良名美乃五十開回有往吉能濱

反歌一首

シラナミノチヘニヤヨスルスミノエノキソノハニフニヒテユカサ  
白浪之千重來縁流住吉能岸乃黄由粉二寶土天比香名

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

アメツチノトホキガゴトクヒツキノナガキガゴトクカシアルナニハノミヤニワゴホキ  
天地之遠我如日月之長我如臨照難波乃宮爾和期大王

ミクニシラスラシメケツクニヒノミツギトアハゲノメシマノアマノ  
國所知良之御食都國日之御調等淡路乃野島之海子乃

ワタノソコガキツイクリニアヘビタマサハニカツキオチナメテツカハマツルガタフ  
海底與津伊久利二鰈珠左盤爾潛出船並而仕奉之貴見

トキミレバ  
禮者

反歌一首

アサナギニカチノトキコユミケツクニメツマノアマノフチニシアルラシ  
朝名寸二梶音所開三食津國野島乃海子乃船二四有良信

三年丙寅秋九月十五日幸於幡磨國印南野時笠朝臣

金村作歌一首并短歌

ナキズミノフナセユミユルアハゲシママツホノウラニアサナギニタマモ  
名寸隅乃船瀬從所見淡路島松帆乃浦爾朝名藝爾玉藻

えて其頃よりの事なるハし  
古ハすみのえさのみいへり  
白浪之云々ハ卷一に草枕旅  
行君さまさま岸の日に  
ふに句はさましなさいへる  
に同じ  
國所知良之こゝにて句也さ  
て貴き見ハいふより打  
かへして心得へし  
御食都國ハ御食の物を奉る  
國をいふ  
日之御調ハ日次の貢物を云  
潮底ハまくらこまばなり  
奥津伊久利ハ海底の石を云  
鰈珠ハ則ち鰈の貝をいふ也  
貴見禮者ハめてたき意也さ  
てかく盤の子までがいたつ  
き仕へ奉るさまを見わつ天  
地と共久しく我大王の國  
まろしめすらしと也

名寸隅乃船瀬ハ幡磨國なる  
へし



手弱女乃ハたわやめの如く  
船楫無三ハまこに船楫  
のなきにあらねど從駕に  
て播磨に在て淡路の船に  
さを見ゆるよしのなきを  
ちてよめるなり

四寸流ハ重る意なり

荒妙ハまくらこはなり  
藤井乃浦ハ播磨國明石郡葛  
江郷ありその浦なるへし  
さて井江の誤ハ卷三にも  
荒妙ハ藤江の浦にまきつ  
るこよめり  
蟻往來云々ハさきくより  
行幸し給ひて見ますもうへ  
なる事よき也

カリツトユフナギニモシホヤキツトアマヲトメアリトハキケドミニユカム  
菊管暮菜寸二藻鹽燒乍海未通女有跡者雖聞見爾將去  
ヨシノナケレバマスラチノコトハナシニタラヤメノオモヒタラミテタモトホリ  
餘四能無者大夫之情者梨荷手弱女乃念多和美手徘徊  
アレハゾコフルフチカザナシ  
吾者衣戀流船楫雄名三

反歌二首

タマモカルアマヲトメヲラニニユカムフチカザモガモナミタカクトモ  
玉藻菊海未通女等見爾將去船楫毛欲得浪高友  
ユキメグリトモアカメヤナキズミノフナヒノハマニシキルシラナミ

往回雖見將飽八名寸隅乃船瀬之濱爾四寸流思良名美

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

ヤスミシシラガホギミノカムナガラタカシラシメルイナミヌノオホウミノハラノ  
八隅知之吾大王乃神隨高所知流稻見野能大海乃原笑  
アラタヘノフヂ非ノウウラニシビツルトアマテサワギシホヤクトヒトソサハナ  
荒妙藤井乃浦爾鮪釣等海人船散動鹽燒等人曾左波爾  
ルウラチヨミミツベモツリハスハマサヨミウベモシホヤクアリカヨヒミ  
有浦乎吉美宇倍毛釣者爲濱乎吉美諾毛鹽燒蟻往來御

白濱ハ地名にあらず白まな  
こささいふに同じし

下咲異六ハ心のうちによろ  
こはしくて打よまるこ也

味澤相ハまくらこはなり  
妹目云々ハ妹をまはし見  
すしての意也或ハ數字術文  
にていもかめみすてさある  
方調よくきこや不敷見而  
の四字なかりて訓へしこ  
木居翁ハいへり  
敷細乃ハ枕詞にて敷の誤也  
櫻皮細ハ舟の軸を櫻の皮も  
て巻たるをいふへし今も  
細して巻けるか如きないふ  
青山乃云々ハ淡路島を西へ  
過れハ故郷の青山も白雲ち  
へにへたりていつくとも  
見えわがぬこ也

マスモシルシキヨシラハマ  
覽母知師清白濱

反歌三首

オキツナミヘナミシジケミイザリストフヂエノウウラニフチザサアゲル  
奥浪邊波安美射去爲登藤江乃浦爾船會動流  
イナミヌノアサガオシナベサヌルヨノケナガクシアレバイヘシヌバユ  
不欲見野乃淺第押靡左宿夜之氣長在者家之小篠生  
アカシガタシホヒノミチチアスヨリハシタエマシケムイヘチカツケバ  
明方潮干乃道乎從明日者下咲異六家近附者

過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

アサハフイモガメシバミズラシキタヘノマクシラモマカズカニバマキツケレルフチニ  
味澤相妹目不敷見而敷細乃枕毛不卷櫻皮纏作流舟二  
マカデメキワガコキクレバアハヂノメシマモスギイナミヅマカラニノシマノ  
真梶貫吾榜來者淡路乃野島毛過伊奈美孀辛荷乃島之  
シマノマユツギヘナミレバアチヤマノソコトモミエズシラクモモチヘニ  
島際從吾宅乎見者青山乃曾許十方不見白雲毛千重爾  
ナリキヌコギタムルウラノコトゴトユキカクルシマノサキノクマモオカズオモヒソ  
成來沼許伎多武流浦乃盡往隱島乃埼埼隅毛不置憶曾







なめてへかかれり木屑宜長  
 考も符合せりさいへるそ秘  
 なるか如くきこゆる  
 決巻ハ飲巻の誤なるへし  
 孫云々かくやいしからんこ  
 兼て知てあらはし  
 管根取而ハ秋ハ管して掃清  
 むれハまかいへり  
 さて一首の意ハ春日野の春  
 の遊ハの忍ハひつたてて出た  
 るをかく散禁に遇んこ豫て  
 知せハ被除身そきなきし  
 てさる罪よあはさらん物な  
 と也  
 佐保乃内爾ハ佐保の地の内  
 にさ也  
 宮動々爾ハ宮中にいひまわ  
 かるよし也動の下重元  
 曆本になきをよしとす  
 待従ハ侍従の誤授力ハ授刀  
 の誤ふり  
 宮の下目録ハ時字ありさて  
 神龜五年行幸紀に見ゆす又  
 歌意相聞されハ此端詞誤れ  
 る  
 界賜跡ハこいを限と界を立  
 るをいふこの譬喩歌よく親  
 の守る女なきを思ふる意な  
 るへし  
 加我欲布ハかやくなり是

タマホコノミチニモイデズコフルコノゴロ  
 玉杵之道毛不出戀比日

反歌一首

ウメヤナギスグラクナシミサホノウチニアソビシコトナミヤセトビロニ  
 梅柳過良久惜佐保乃内爾遊事乎宮動々爾

右神龜四年正月數王子及諸臣子等集於春日野而

作打毬之樂其日忽天陰雷雨電此時宮中無待従及

侍衛勅行刑罰皆散禁於授力寮而妄不得出道路于

時悵憤即作斯歌 作者未詳

五年戊辰幸于難波宮作歌四首

カホギキノサカヒタマフトヤマモリスエモルトフヤドニイラズハヤマシ  
 大王之界賜跡山守居守云山爾不入者不止

ミツタセバチカキモノカライソガクリカガヨフタマサトラズハヤマシ  
 見渡者近物可良石隱加我欲布珠乎不取不已

ハ近くて逢かだき妹に譬へ  
 たるなるへし  
 韓衣服櫓乃里ハたし益其の  
 里なるを衣着ならしさいひ  
 かけたり  
 島ハ所の名待ハ松ふるへし  
 本居翁云く島ハ君の歌にて  
 結句好ハ取の誤ならんきか  
 まつに云々ならんひともし  
 もさ訓へしさいへり  
 竿壯鹿之云々ハ秋旅行事あ  
 る頭女を戀ふるなるへし結  
 句當字元曆本にハなくてあ  
 りすしてあらんこ訓り  
 歌の下與字脱たるふるへし  
 雁四乏母ハ雁のうらやまし  
 き意なり是ハ旅の歌ふるへ  
 し

刺竹之ハまくらこさけふり  
 さて大伴卿の家佐保にあれ  
 ハかくより

御食國者ハをすくにハこも  
 訓へし  
 日本ハこハ大和國を云ふ

カラコロモキナラノサトノシマツニタマナシツケムヨキヒトモガモ  
 韓衣服櫓乃里之島待爾玉乎師付牟好人欲得

サナシカノナクナルヤマナコエユカムヒダニヤキミニタダアハザラム  
 竿壯鹿之鳴奈流山乎越將去日谷八君當不相將有

右笠朝臣金村之歌中出也或云車持朝臣千年之作也

膳王歌一首

アシタニハウナビニアサリシユフサレバヤマトヘコユルカリシトモシモ  
 朝波海邊爾安左里爲暮去者倭部越鴈四乏母

右作歌之年不審也但以歌類便載此次

太宰少貳石川朝臣足入歌一首

サスタケノオホミヤヒトノイヘトスムサホノヤマチバガモフヤモキミ  
 刺竹之大宮人乃家跡住佐保能山乎者思哉毛君

帥大伴卿和歌一首

ヤスミシシワガオホギミノミケツクニハヤマトモコトモオナシトソオモフ  
 八隅知之吾大王乃御食國者日本毛此間毛同登曾念



香推ハ香椎の誤ナリ

兒等ハ從者ニイフナルヘシ  
浦爾ハ于瀧ニ也  
朝菜ハ朝食の料ニする磯菜  
といふ

時風ハ沙のさしくる時の風  
をいふ  
浦ハ水の曲をいふ

準人乃ハ薩摩の枕詞ふるを  
やめて薩摩さしてよめり  
瀧門ハ薩摩出水郡勢度郷の  
瀧門の所管なり行てみ  
らわしなるヘシ盤ハ盤の誤  
也

冬十一月太宰官人等奉拜香推唐訖退歸之時馬駐于

香推浦各述懷作歌

帥大伴卿歌一首

イザヤコラカシヒノカタニシロタヘノソデサヘメレテアサナツミテム  
去來兒等香推乃瀧爾白妙之袖左倍所沾而朝菜採手六

大貳小野老朝臣歌一首

トキツカセフクベクナリメカシヒガタシホヒノウラニタマモカリテナ  
時風應吹成奴香推瀧潮干納爾玉藻荇而名

豊前守宇努首男人歌一首

ユキカヘリツチニワガミシカジヒガタアスユノチニハミムヨシモナシ  
往還常爾我見之香推瀧從明日後爾波見緣母奈思

帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首

ハヤビトノセトノイハホモアユハシルヨシメノタギニナホシカズケリ  
準人乃瀧門乃盤母年魚走芳野之瀧爾尙不及家里

三二八  
三二九

次田ハ筑前御笠郡次田郷あり

湯原も御笠郡なり

奥山之云々山深き岩ほの昔  
むせる物すく恐しけに  
見ゆる物なれはかしこし  
いはん序なりさて恐毛ハ歌  
よめさあるをかしこめる也  
巻七に奥山の岩に苦むも恐  
さ思ふ心いかに少し引直  
さあるを思ひ出して少し引直  
して吟せしなるヘシ  
盤ハ亦盤の誤なり

大汝云々ハ大巳貴命少彦名  
命と御心を一つよして天の  
下を經營し給ひしによりて  
かくいへり  
名兒山跡云々ハ和名和名に  
て慰むといふも和より出た  
る前なれハ山の名よかけて  
まよめるなり  
未ハ米の誤なるヘシ  
此歌大汝の前猶句のあり

帥大伴卿宿次田温泉聞鶴喧作歌一首

ユノハラニナクアシタヅハラガゴトクイモニコフレイトキワカズナク  
湯原爾鳴蘆多頭者如吾妹爾戀哉時不定鳴

天平二年庚午勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰時歌一首

カクヤマノイハニコケムシカシヨクモトヒタマフカモオモヒアヘナクニ  
奥山之盤爾蘿生恐毛問賜鴨念不堪國

右勅使大伴道足宿禰鑿于帥家此日會集衆諸相誘

驛使葛井連廣成言須作歌詞登時廣成應聲即吟此歌

冬十一月大伴坂上郎女發帥家上道超筑前國宗形郡

名兒山之時作歌一首

カホナムチスクナヒコナノカミコソハナヅケケメメナノミナコヤマトオヒテ  
大汝小彦名能神社者名著始鷄目名耳乎名兒山跡負而  
ワガコヒノサヘノヒトヘモナグサメナクニ  
吾戀之千重之一重裳奈具佐末七國



か脱しにや又反歌も傳はらぬなるへし  
具の貝の誤なり元曆本に耶女の下向京二字あり  
捨の拾の誤なり

時の上之字脱しなるへし

凡有者ハ大凡の人ならハ也  
左毛右毛ハハカモセムナカシコミトフリタキソテナシメビタルカモ  
ふらんをさ也  
恐跡ハ貴人なれハ恐みて袖  
もふらすあり也  
倭道者云々ハ本ハまつ歸路  
の遠き事なれハひて然れども  
見ゆすなるまて袖をふら  
んをわやなくさめけ也さな  
思ひ給ひそと也

同坂上郎女海路見濱具作歌一首  
ソガセコニコフルハクルシイトマアラバヒロヒテユカムコヒソスレガヒ  
吾背子爾戀者苦暇有者捨而將去戀忘貝

冬十二月太宰帥大伴卿上京時娘子作歌二首

オホナラバカモセムナカシコミトフリタキソテナシメビタルカモ  
凡有者左毛右毛將爲乎恐跡振痛袖乎忍而有香聞

ヤマトガハカリモカクレンタリシカレドモソガフルソテナシメシトモフナ  
倭道者雲隱有雖然余振袖乎無禮登母布奈

右太宰帥大伴卿兼任大納言向京上道此日馬駐水

城願望府家于時送卿府吏之中有遊行女婦其字曰

兒島也於是娘子傷此易別嘆彼難會拭涕自吟振袖

之歌

大納言大伴卿和歌二首

三三〇

兒島ハ備前國なりきて娘子  
の名兒島なれハ都へ上る道  
に兒島を過ん時思出んさ也  
水莖之ハ枕詞にてみつさ  
重ねたる也  
水城ハ天智天皇三年筑紫に  
大堤を築て水を貯ふ名つけ  
て水城といふさあり上附ハ  
ほさりさいはんか如し  
神名火乃ハ故郷ハ神南備里  
なれハなり

指進乃ハ枕詞栗柄ハ大和忍  
海郡也さて今秋の盛に行  
かるましけれは行て手向人  
頃ハ又ハ散ぬへし也故郷  
の神ハ又ハ先祖の墓なさへ  
手向せんとなるへし  
茅ハ茅のあやまりなり

白雲乃ハ立こいばん爲なり  
露霜爾ハ秋深くわく露をい  
へるにて露霜をいへる  
にあらす  
賊守云々ハ西蕃の賊を守る  
爲に筑紫のさきくいに防入  
を遣したる故にいへり  
山乃曾伎云々ハそきい遠く  
放るいなふ前よしいへり

ヤマトガノキビノコジマナスギテユカバツクシノコジマオモホエムカモ  
日本道乃吉備乃兒島乎過而行者筑紫乃子島所念香裳  
マスラチマオモヘルソレヤミヅクキノミヅキノウヘニナミダノゴハム  
大夫跡念在吾哉水莖之水城之上爾泣將拭

三年辛未大納言大伴卿在寧樂家思故郷歌二首

シマラクモユキテミテシガカミナビノフチハアサビテセニカナルラム  
須曳去而見牡鹿神名火乃淵者淺而瀬二香成良武

サシズミノクルスノサメノハギガハナチラムトキニシユキテタムケム  
指進乃栗栖乃小野之茅花將落時爾之行而手向六

四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋連蟲

應作歌一首并短歌

シラクモノタツタノヤマノツツモニイロツクトキニウチナコエテタビユクキミハイホ  
白雲乃龍田山乃露霜爾色附時丹打越而客行公者五百  
ヘヤマイユキサリミアタマモルツクシニイタリヤマノソキメノソキミヨト  
隔山伊去割見賊守筑紫爾至山乃曾伎野之衣寸見世常  
トモノベナリカチツカハシヤマビコノコタヘムキハミタニガノサリタルキリミクニガタチミシ  
伴部乎班遣之山彦乃將應極谷潜乃狭渡極國方平見之



國方乎の國の形をにてその所のまさいはんか如し冬木成の成の盛の誤なる事概に上よりいへり丹管士の紅羅躑躅なり山多頭能ハ前にいへり迎へさいけん爲ふり參出六ハ字の如くまぬりてんさ也

千ハ元曆本に千さあるに従ふへ！言舉不爲ハ常の詞に物いはすにさいふ意ふり右云々この後人の註ふるへ

天皇ハ聖武天皇を申す手抱而ハ拱手にてこまぬくをいふ宇部乃御手ハ大御手をいふ撫撫會禰宜ハ撫愛して勢ふさ世下の打撫云々も同し撫も打も詞ふり禰宜ハねきらふなり豊御酒ハ大御酒さいはんか

如しさて此時酒を賜ふに又事終て眞幸くて還來ん時此大御酒をきこしめし賜りもせんさの意なるへし凡可爾ハわほよそに也大方の行たひさな思ひそささし給ふなるへし太上天皇ハ元正天皇を申す此註元曆本に小字にかけれはもさなかりしなるへし

在久乎好叙ハかくてあるかよさにその意也何事かよるこひある時の歌ふるへし草香山ハ河内國河内郡也見の下一本よ君字あれさ君ハ名の誤にてみてななさあるへし押越哉ハ河内國より直路に押越て難波へ至れハかくいへる也枕詞ハ意異なりさ冠辭考ハいへり本居翁云く押照哉ハ波ハ次第して三四一二五と句を上のふきて解へしと或云海上のふきて解なるは今も猶考へし士也母ハ男にしてやの意也

タマヒテフニゴモリハルサリユカバトアリノハヤクキマサ子タツタチノナカベノ賜而冬木成春去行者飛鳥乃早御來龍田道之岳邊乃路ニニツツツノニホハムトキノサクラバナサキナムトキニヤマダツノムカヘマ井テ爾丹管士乃將薰時能櫻花將開時爾山多頭能迎參出六ムキミガキマサバ公之來益者

反歌一首

チヨロツノイクサナリトモコトアゲセズトリテキメベキナノコトゾガモフ千萬乃軍奈利友言舉不爲取而可來男常會念

右檢補任文八月十七日任東山山陰西海節度使

天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌

ナスクニノトホノミカドニナムチラガカクマカリナバタヒラケクワレハアツバムタ食國遠乃御朝廷爾汝等之如是退去者平久吾者將遊手ムダキテワレハイマサムスメラフガウヅノミテモアカキナアソ子ギタマフウチ抱而我者將御在天皇朕宇頭乃御手以搔撫會禰宜賜打ナアソ子ギタマフカヘラムヒアヒノマムキゾコノトヨミキハ撫會禰宜賜將還來日相飲酒會此豊御酒者

反歌一首

マスラサノユクトイフミチアガホロカニガモヒテユクナマスラサノトモ大夫之去跡云道會凡可爾念而行勿大夫之伴

右御歌者或云太上天皇御製也

中納言安倍廣庭卿歌一首

カクシツアラクチャヨミツタマキハルミシカキイノチナナガクホリスル如是爲管在久乎好叙靈剋短命乎長欲爲流

五年癸酉超草香山時神社忌寸老鷹作歌二首

ナニハガタシホヒノナゴリヨクミテナイヘナルイモガマチトハムタメ難波方潮干乃奈凝委曲見在家妹之待將問多米

タバコエノコノミチニシテオシテルヤナニハノウミトナツケケラシモ直超乃此徑爾師互押照哉難波乃海跡名附家良思裳

山上臣憶良沈疴之時歌一首

チノコヤモムナシカルベキヨロツヨニカタリツツベキナハタハスシテ士也母空應有萬代爾語續可名不立之而



須の下史の字落たるか喚の  
下元曆本に跡字あり

著衣はけるきぬさ訓て着た  
るきのさいふ意の古言也  
佐保風は其所にふく風をい  
よ飛鳥風ふさ云か如し

雨隠はまくらこさばなり  
更降管は集中多くまか訓り  
ふくろなふ

獵高は地名なるへし姓氏録  
に雁高管の氏も見にたり  
不清云々たほしくてすま  
ぬを見るかかなしきさかり此  
のさふしは愁の深き意也

右一首山上憶良臣沉痾之時、藤原朝臣八束使河邊  
朝臣東人、令問所疾之狀、於是憶良臣報語已畢、有須  
拭涕、悲嘆口吟此歌、

大伴坂上郎女與姪家持從佐保還歸西宅歌一首

ワガセコガケルキヌスシサホカセハイタクナフキノイヘニイタルマデ  
吾背子我著衣薄佐保風者疾莫吹及家左右

安部朝臣蟲麿月歌一首

アマゴモリミカサノヤマチタカミカモツキノイテコスヨハクダチツ、  
雨隠三笠乃山平高御香裳月乃不出來夜者更降管

大伴坂上郎女月歌三首

カリタカノタカマトヤマチタカミカモイデケルツキノオソクテララム  
獵高乃高圓山平高彌鴨出來月乃遲將光

ウバタマノヨギリノタチテホホシクテレルツクヨノミレバカナシサ  
烏玉乃夜霧立而不清照有月夜乃見者悲沙

左佐良國壯子ハ月をいふさ  
らハ小なき意ハ美き意  
ハハ月をほめていへる也  
右云々の註後人の書入ふり

月讀壯子ハ則ち月をいふ  
幣者ハ上に出たりまひさひ  
の意なり  
大能備爾ハ諸説從ひいたし  
誤あるへし者ハ大野邊の意  
にや

好之善ハまくらこさはなり  
是ハ未だ出ぬ月をよめる也

ヤマノノササラエサトコアマノハラトワタルヒカヨミラクシヨシモ  
山葉左佐良榎壯子天原門度光見良久之好藻

右一首歌、或云、月別名曰佐散良衣壯士也、緣此辭作

此歌、

豐前國娘子月歌一首 娘子字曰大宅、姓氏未詳也

クモガクリユクヘチナミトワカコフルツキチヤキミガミマクホリスル  
雲隱去方乎無跡吾戀月哉君之欲見爲流

湯原王月歌二首

アメニマスツキヨミサトコマヒハセムコヨヒノナガサイイホヨツギコソ  
天爾座月讀壯子幣者將爲今夜乃長者五百夜繼許增

ハシヤヤシマヤカキサトノキミクヤトホホノビニカモツキノテラセル  
愛也思不遠里乃君來跡大能備爾鴨月之照有

藤原八束朝臣月歌一首

マチケテニワカスルツキハイモガキルミカサノヤマニコモリアアリケリ  
待難爾余爲月者妹之著三笠山爾隱而有來



落易ハ或ハかれやすしとし  
訓ヘシ殿ハ魔盤ハ祭の誤也

打酒ハ祈酒の誤にてさかほ  
かひま訓むるへし

焼刀ハたゞ刀をいふ加度ハ  
刀のまのきをいふさて今稜  
をけつるさいふ事に似たり

見の上一本に跡字あるに従  
ふへし

千代松樹ハ千代待つさいひ  
かけたるあり

鳥ハ鳥奴ハ好の誤なりさて  
元興寺ハ飛鳥寺也飛鳥より  
奈良へ移してそこを飛鳥  
といへり

市原王宴禱父安貴王歌一首

ハルリサハノチハウツラフイハホナストキハニイマセタフトキワギミ  
春草者後波落易殿成常盤爾座貴吾君

湯原王打酒歌一首

ヤキダチノカドウチハナツマストラチノホグトヨミキニワレエヒニケリ  
焼刀之加度打放大夫之禱豊御酒爾吾醉爾家里

紀朝臣鹿人見茂岡之松樹歌一首

シゲチカニカムサビタチテサカエタルチヨマツノキノトシノシラナグ  
茂岡爾神佐備立而榮有千代松樹乃歲之不知久

同鹿人至泊瀬河邊作歌一首

イハバシルタギチナガレルハツセガハタユルコトナクマタモキアミム  
石走多藝千流留泊瀬河絶事無亦毛來而將見

大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首

フルサトノアスカハアレドアチニヨシナラノアスカナミラクシヨシモ  
古郷之飛鳥者雖有青丹吉平城之明日香乎見樂奴裳

同坂上郎女初月歌一首

ツマタチテタビミカヅキノマユチカキケナガクコヒシキミニアヘルカモ  
月立而直三日月之眉根搔氣長戀之君爾相有鴨

大伴宿禰家持初月歌一首

フリサケテミカヅキレバヒトメシヒトノマヨビキオモホユルカモ  
振仰而若月見者一目見之人之眉引所念可聞

大伴坂上郎女宴親族歌一首

カクシツアソビノミコソクサキスラハルハモエツアキハカレユク  
如是爲乍遊飲與草木尙春者生管秋者落去

六年甲戌海犬養宿禰岡應詔歌一首

ミタミワレイケルシルシアミアメツチノサカユルトキニアヘラクオモヘバ  
御民吾生有驗在天地之榮時爾相樂念者

春三月幸于難波宮之時歌六首

スミノエノコバマノシツミアケモミズコモリノミヤモコヒワタリナム  
住吉乃粉濱之四時美開藻不見隱耳哉戀度南

三日月之ハ眉といはん序の  
力にて此歌ハ相聞の意ふる  
を端詞いかにそや  
戀之ハこひたりしの意也

眉引ハ仲哀紀に據此云麻用  
引根とあり

遊飲興ハ榮けてあらん程ハ  
遊ひ樂しみてあらまほしと  
願ふ意也興ハ乞の誤ならん

相樂念者ハ逢へるを延へた  
るなり

四時美ハ蜺にて二句ハあけ  
し見すさいはん序のみ  
隠耳哉ハ下にのみさいふに  
同じく心の中に戀る也



懸而阿波の方へむけて、  
きこくこと也

千沼河内國泉郡茅渚海  
り今和泉國なり  
四八津住吉の東方なり  
源郎白水郎の誤なり  
網一本細よ作れと網の誤  
なり網一本に細に作れり  
さてつなてふは舟の大綱  
を云沽將堪香聞はちふる  
に堪へしこの意なり  
兒等の故郷の妹をいひふ  
るへし

押止駐余たさへといめよ  
もよむへし一本上に乗  
る豆の誤なるへし此の香乘  
れる思な從者にさいめよ  
いふなり黃土の前にいへり

右一首作者未詳

マユノゴトクモ非ニミルアハノヤマカケテゴクフ子トマリシラズモ  
如眉雲居爾所見阿波乃山懸而榜舟泊不知毛

右一首船王作

チメヲヨリアメツフリケルシハツノアマアミテナハホセリヌレバタムカモ  
從千沼回雨曾零來四八津之泉郎網手綱乾有沽將堪香聞

右一首遊覽住吉濱還宮之時道上守部王應詔作歌

コラガアラバフタリキカムチオキツスニナクナルタヅノアカツキノコエ  
兒等之有者二人將聞乎與渚爾鳴成鶴乃曉之聲

右一首守部王作

マスラナハミカリニタシチトメヲハアカモスソビクキヨキハマビチ  
大夫者御獵爾立之未通女等者赤裳須素引清濱備乎

右一首山部宿禰赤人作

ウマノアユミオシテトメヨスミノエノキシノハニフニホヒテユカム  
馬之步押止駐余住吉之岸乃黃土爾保比而將去

右一首安倍朝臣豐繼作

筑後守外從五倍下葛井連大成遙見海人鈞船作歌一首

アマチトメタモトムラシオキツナミカシヨキツミニフナデセリミユ  
海城孀玉求良之與浪恐海爾船出爲利所見

按作村主益人歌一首

オモホエズキマセルキミササホカハノカハツキカセズカヘシツルカモ  
不所念來座君乎佐保川乃河蝦不令聞還都流香聞

右内匠寮大屬按作村主益人聊設飲饌以饗長官佐

爲王未及日斜王既還歸於時益人怜惜不厭之歸仍

作此歌

八年丙子夏六月幸于芳野離宮之時山部宿禰赤人應

詔作歌一首并短歌

玉ハすなほちあはひをいふ  
結句非出せり切て見ゆ  
いへるはつにしへぶりなり

君乎結句へつけて心得  
へし後世の歌ならは君にさ  
いふへし



見給ハ見させ給ふの意也  
神佐備而ハ山をいひ宜名備  
ハ川をほめていへり  
此山乃云々以下ハ此山河の  
たえ盡る時のあらん時よの  
みこそ此宮所もやむ時もあ  
らめさらてハ止時なからん  
となり

山河平吉三ハ山さ川さのよ  
きにさふり  
水尙妹與兄云々ハ人の子に  
兄弟あるか如く木にもひこ  
はえなるといひて子孫さいふ  
へきものあれハかく云らさ  
本居翁云く一本のみならす  
同しつらに幾本も生立るを  
いふふらんさいへりこハ人  
の子の上をよめるなるへし  
不知世経月乃ハ月の出ん  
してたのたふ程をいへり十  
六夜をのみいさよひの月さ  
いへるハいさ後なりきて月  
なまつ如く友を待つハ夜の  
ふけたりさ也  
臣ハ一本に辨に作れるに従  
ふへし

ヤスミジソカホヤミノミシタマフヨシメノミヤハヤマカミクモツタナヒクカハ  
八隅知之我大王之見給芳野宮者山高雲曾輕引河速禰  
ヤミセノトツキヨカムサビテミレバタフトクヨロソナヘミレバサヤケシコノヤマ  
湍之聲會清寸神佐備而見者貴久宜名部見者清之此山  
ノツキバノミコソコノカハノタエバノミコソモハシキノオホミヤドコロヤムトキセアラ  
乃盡者耳社此河乃絶者耳社百師紀能大宮所止時蒙有目  
反歌一首

自神代芳野宮爾蟻通高所知者山河平市吉三

市原王悲獨子歌一首

コトトハメキスライモトセアリトフナダヒトリゴニアルカクルシサ  
不言問木尙妹與兄有云乎直獨子爾有之苦者

忌部首黑麿恨友除來歌一首

ヤマノハニイサヨフツキノイデムカトワカマツキミガヨハクダチツ  
山之葉爾不知世経月乃將出香常我待君之夜者更降管

冬十一月左大臣葛城王等賜姓橘氏之時御製歌一首

常葉ハ冬枯せぬ云常磐ハ  
さきほにて別の詞ありきて  
橘ハ實も花もめてたく葉も  
霜よあへさいよ榮るをも  
てほき給へる御歌なり  
太上天皇の下天皇二字を脱  
せるハ或ハ皇后ハ天皇の誤  
にもやあらん

爲ハ壽の誤かり

奥山之云々木ハふるさいハ  
人爲の序なりさて元皇族ハ  
れハ年の經るさもふりハく  
たらしみの意なるへし

タチバナハミサヘハナサヘソノハサヘエダニシモフレドイヤトコハノキ  
橘花者實左葉花左倍其倍左倍枝爾霜雖降益常葉之樹

右冬十一月九日從三位葛城王從四位上佐爲王等

辭皇族之高名賜外家之橘姓已訖於時太上天皇

后共在于皇后宮以爲肆宴而即御製賀橘之歌并賜

御酒宿禰等也或云此歌一首太上天皇御歌但天皇

皇后御歌各有一首者其歌遺落未得探求爲今檢案

内八年十一月九日葛城王等願橘宿禰之姓上表以

十七日依表乞賜橘宿禰

橘宿禰奈良麿應詔歌一首

オクヤマノマキノハシメギフルユキノフリハマストモツチニオチメヤモ  
奥山之眞木葉凌雲零乃零者雖益地爾落日八方



興ハ典のあやまりなり  
有ハ在の誤なるへし

來云似有ハ來れかしこいふ  
に似たり也結句ハさて防  
ひ來て後ハちりぬさもよし  
さいへり  
乎呼理爾乎呼里ハ花のさき  
たわむをいふ集中花紅葉さ  
いはすしてた、咲散さのみ  
いへる例多し  
吾島曾ハ家の庭に作れる池  
の中島をいふなるへし  
門田屋戸爾毛ハ門にもやま  
よもの意なり

冬十二月十二日歌儂所之諸王臣子等集葛井連廣成  
家宴歌二首

比來古儂盛興、古歲漸晚、理宜共盡古情、同唱此歌、故擬此  
趣、輒獻古典二節、風流意氣之士、儂有此集之中、爭發念心、  
々和古體、

我屋戸之梅咲有跡、告遣者來云、似有散去十方吉  
春去者乎呼理爾乎呼里、思之鳴吾島曾、不息通爲

九年丁丑春正月橘少卿并諸大夫等集彈正尹門部王

家宴歌二首

豫公來座武跡、知麻世婆、門爾屋戸爾毛、珠敷益乎

後賜云々一本に此註あり

即云々亦一本にふし

多鷄蘇香ハたけハたか、  
こいハる詞に同じそ、かハた  
ろそ、かの意なるを合せ云り  
たま、く、な、こ、い、は、ん、か、如、し

湖原之云々遊士たちを見ん  
さて仙女の逢萊より遠き海  
路ハ渡來りしよしにてある  
し方の女房、さの戯てよめ  
るあるへ、土ハ士の誤ふり  
柴ハ菜の誤ふり  
所の下一本、よ作の字ありさ  
て、誤ハ焉の誤、誤ハ誤の誤ふ  
るへし

右一首主人門部王後賜姓大原  
真人氏也

前日毛昨日毛今日毛、雖見明日左、倍見卷欲寸君香聞

右一首橘宿禰文成即少卿之子也

榎井王後追和歌一首

玉敷而待益欲、利者多鷄蘇香、仁來有今夜四樂所念

春二月諸大夫等集、左少辨巨勢宿奈麻呂朝臣家宴歌

一首

海原之遠渡乎遊士之遊乎、將見登莫津左比曾來之

右一首書白紙懸著屋壁也、題云蓬萊仙媛所囊、藕爲

風流秀才之士矣、斯凡客不所望見哉、



使ハ一本に便さあるそよき

木綿疊ハ枕詞あり手向乃山  
ハ相坂山の坂上に有へし旅  
立人の必手向する所なる故  
よふふるへし  
子等ハ從へる女房かさをさ  
すふるへし一本に吾等さあ  
りさてハわれと訓へし  
嘆一本に賛さあり左註も然  
白珠者ハ自ら比したるふり  
是ハ旋頭歌あり  
時ノ下妻作歌二首ありさ  
て父公爾云々の歌ハ此所の  
端書あるへきを脱失せしふ  
るへし  
石上振乃ハ大和山邊郡也  
振乃乃ハ乙麻呂をさす  
羽女乃云々ハ乙麻呂久米連  
若實を好せし罪に依てさ也  
馬自物云々以下ハからめら  
れたるを馬に繩つけたるさ  
まにハ弓矢さりてもの  
ふの打園み行を狩人の猪鹿  
なかる様にいひさしたる也

夏四月大伴坂上郎女奉拜賀茂神社之時使超相坂山  
望見近江海而晚頭還來作歌一首

木綿疊手向乃山乎今日越而何野邊爾盧將爲子等

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首

白珠者人爾不知所不知友縱雖不知吾之知有者不知友  
任意

右一首或云元興寺之僧獨覺多智未有顯聞衆諸押

悔因此僧作此歌自嘆身才也

石上乙應卿配土左國之時歌三首并短歌

石上振乃尊者弱女乃惑爾緣而馬自物繩取附肉自物弓

三四四  
三四五

古衣ハ枕詞又打山ハ紀伊也  
王命恐見云々ハ次ふる長歌  
の初ふるを誤りて一首の短  
歌させるありさて出座の下  
脱字あり爾爾出座ハしき耶  
つ背乃君矣緊發云々  
刺難之ハさしからへるよし  
よて隣れるをいふこいハ紀  
伊上左邊を隔ていハ紀  
向ハハまかいへり  
繁ハ繁の字ハ誤れる也  
荒人神ハ現人神にて天皇を  
申す事ふるをこいハ違へり  
さて人ハ大の誤にてあらハ  
ほみたまさむへきハ神功  
紀に荒魂ハ先鋒さ爲てみハ  
を導くこと云を以ていへるさ  
るへし賀茂翁いへり  
草菅見ハ枕詞にて菅ハ菅の  
誤あり  
さて右二首の長歌の反歌ハ  
脱失せしふるへし  
父公爾の歌ハこれ乙麻呂の  
歌ありされハこい端詞あ  
りしハ脱せる成へし  
眞名子ハ實の子の意也愛兒  
ハ字の如しさて此下猶句あ  
るへきを脱しふるへし  
參拜ハ乙麻呂のまうのほろ  
にて恐坂へつく也さて八

ヤカクミテオホギミノミコトカシコミアマザカレヒナニマカセフルゴロモマツチノヤメユカヘリコヌカセ  
笑國而王命恐天離夷部爾退古衣又打山從還來奴香聞

オホギミノミコトカシコミサシナミノクニニイデマヌヤワカセノキミチ  
王命恐見刺並之國爾出座耶吾背乃公矣

カケマクモユシカシコシスミノエノアラヒトガミフナノヘニウシハキダヒツキダマハム  
繁卷裳湯湯石恐石住吉乃荒人神船舳爾牛吐賜付賜將

シマノサキザキヨリタマハムイソノサキザキアラキナミカセニアハセズクサツツミヤヒ  
島之埜前依賜將磯乃埜前荒浪風爾不令遇草菅見身疾

アラセズスムヤケクカヘシタマハ子モトノクニニ  
不有急令變賜本國部爾

チギミニワレハマナゴソハイトシニワレハメツコゾマ井ノホリヤソウサ  
父公爾吾者眞名子叙妣刀自爾吾者愛兒叙參昇八十氏

ビトノタムケストカシコノサカニメサマツリワレハゾオヘルトホキトサザチ  
人乃手向爲等恐乃坂爾幣奉吾者叙追遠杵土左道矣

反歌一首

オホサキノカミノチハマハセマケレドモフナビトモスグトイハナクニ  
大埜乃神之小濱者雖小百船純毛過迹云莫國

秋八月二十日宴右大臣橘家歌四首



十氏人乃云々二句ハ唯恐といはん序にて手向するも恐むといひつゝけたる也恐乃坂ハ大和より河内へ越る路あり  
 追ハ退の誤にてまかると訓へし  
 大崎乃神之小濱紀伊の地名  
 大崎乃土左の路ハ紀伊の地名  
 遠ヘリといへハ猶考ふへし  
 小或ハちひさけと訓へし  
 訓へして一首の意ハ舟人  
 我の直に過行さ也  
 奥真經而ハかくめてにて心に深めてといふに同じ  
 上二句ハかくめてといはん料あり  
 里爾の家をいふこの歌宴にあつかるよし見ぬす唯阿さく詠したるふるへし  
 花の歌卷二に三方沙彌たし  
 物なそ思ふ妹にあはすして  
 詠したるふるへし

ナガトナルオキツカリシマオクマヘテワガモフキミハチトセニモガモ  
 長門有與津借島與真經而吾念君者千歲爾母我毛

右一首長門守巨曾倍對馬朝臣

オクマヘテワレチオモヘルワガセコハチトセイホトセアリコセヌカモ  
 與真經而吾平念流吾背子者千年五百歲有巨勢奴香聞

右一首右大臣和歌

モシキノオホミヤヒトハケフモカモイトマチナミトサトニユカザラム  
 百磯城乃大宮人者今日毛鳴暇無跡里爾不去將有

右一首右大臣傳云故豐島采女歌

タチバナノモトニミチナムヤチマタニモノチゾオモフヒトニシラエズ  
 橋本爾道履八衢爾物乎曾念人爾不知所知

右一首右大辨高橋安應卿語云故豐島采女之作也

但或本云三方沙彌戀妻苑臣作歌也然則豐島采女

當時當所口吟此歌歟

泄一本に遊に作り堵一本に都に作り里之二字目錄になし

牟射佐妣ハ和名抄に麴鼠一名麴鼠毛俗無佐々此こあり今俗のぶすまといふものなり

十二年云々續紀天平十二年九月丁亥廣嗣起兵反同年十月三午行伊勢云々乙酉到伊勢國壹志郡河口頓宮謂之關宮也

十一年巳卯天皇遊獵高圓野之時小獸泄走堵里之中於是自值勇士生而見獲即以此獸獻上御在所副歌一首

牟射佐妣

マスラナガタカマトヤマニセメタレバサトニオリクルムサハヒソコ  
 大夫之高圓山爾迫有者里爾下來流牟射佐妣曾此

右一首大伴坂上郎女作之也但未送奏而小獸死斃

因此獻歌停之

十二年庚辰冬十月依太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發軍幸于伊勢國之時河口行宮內舍人大伴宿禰家持作

歌一首

カハケチノメベニイホリテヨノフレバイモガタモトシオモホユルカモ  
 河口之野邊爾廬而夜乃歷者妹之手本師所念鴨



昔乃ハ吾自の誤にてわかま  
つはらせし初旬のま  
つへかゝれる枕詞なりた  
松原よりいへるにて地名  
にあらすさ本居翁いへり  
右一首云々後人の註なり

四泥能崎ハ伊勢國朝明郡な  
るへし志氏神社あり  
取之泥而ハ垂るをまて云  
さりかけ垂ての意也即ち神  
に祈るをいふへし  
住ハ往の字を誤れるならん  
思沼ハ思泥の誤なり  
狹殘ハさゝむとよまんか河  
口行所より出給ひてかりに  
わかしまし宮なるへし

天皇御製歌一首

イモニコヒアガノマツバラミワタセバシホヒノカタニタヅナキワタル  
妹爾戀吾乃松原見渡者潮干之瀉爾多頭鳴渡

右一首今案吾松原在三重郡相去河口行宮遠矣若

疑御在朝明行宮之時所製御歌傳者誤之歟

丹比屋主真人歌一首

オクレンシヒトナオモハクシデアノサキユフトリシデアユカムトソオモフ  
後爾之人乎思久四泥能埒木綿取之泥而將住跡其念

右案此歌者不有此行宮之作乎所以然言之勅大夫

從河口行宮還京勿令從駕焉何有詠思沼埒作歌哉

狹殘行宮大伴宿禰家持作歌二首

スメロギノイデマシノマニワギモヨガタマクラマカズツキンヘニケル  
天皇之行幸之隨吾妹子之手枕不卷月曾歷去家留

從古云々續紀養老元年九月  
丁未天皇行美濃國云々甲寅  
至美濃國云々丙辰幸當郡  
多度山美泉云々甲子車駕還  
宮十一月癸丑天皇臨軒詔曰  
朕以今年九月到美濃國不  
行宮留連數日因覽當郡多  
度山美泉自隘手而皮膚如多  
亦洗滌處無不除愈在朕之躬  
其驗又就而飲浴者或白髮反  
黑或頑髮更生或開目如明  
餘痼疾皆平愈云々改竄絶三  
年爲養老元年云々見也

還爾谷藻ハ俗に立縮になり  
こもゆきて來んこの意なり

ミケツクニシマノアマナラシマクマメノサア子ニノリアオキベユグミユ  
御食國志麻乃海部有之眞熊野之小船爾乘而與部榜所見

美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首

ムカシヨリヒトノイヒクルカイビトノワカユチフミツソナニオフタギノセ  
從古人之言來流老人之變若云水曾名爾負瀧之瀬

大伴宿禰家持作歌一首

タドカハノタギナキヨミカイニシヘユミヤツカヘケムタギノメノヘニ  
田跡河之瀧平清美香從古宮仕兼多藝乃野之上爾

不破行宮大伴宿禰家持作歌一首

セキナクハカヘリニガニモウチユキテイモガタマクラマキテ子マンナ  
關無者還爾谷藻打行而妹之手枕卷手宿益乎

十五年癸未秋八月十六日內舍人大伴宿禰家持讚久

遷京作歌一首

イマツクルクニノミヤコハヤマカハノキヨキナミレバウベシラストラシ  
今造久邇乃王都者山河之清見者宇倍所知良之



一重山ハたひさへなる山  
越我ハ加良爾ハこゆる故に  
いふに同し  
吾背子ハ友をさせる也  
里爾者云々ハ山に月を隔て  
たるなり

念子ハ主人入東朝臣を  
へまか又ハ相聞の古歌なる  
を其折訃したるならんか

作者不審の四字一本になし

君松樹ハ君を待つさかけた  
るなりさて下句こよりハ  
訪ゆかし貝待てあらんさ也  
而ハ一本に西さあるそよき

高丘河内連歌二首

フルサトハトホクモアラズヒトヘヤマコユルガカラニオモヒゾツガセシ  
故郷者遠毛不者一重山越我可良爾念會吾世思

ワガセコトフタリシナレバヤマタカミサトニハツキハテラズトモ日シ  
吾背子與二人之居者山高里爾者月波不曜十方余思

安積親王宴左少辨藤原入東朝臣家之日内舍人大伴

宿禰家持作歌一首

ヒサカタノアメハフリシクガモフコガヤドニコヨロハアカシテユカム  
久堅之雨者零敷念子之屋戸爾今夜者明而將去

十六年甲申春正月五日諸卿大夫集安倍蟲麿朝臣家

宴歌一首作者不審

ワガヤドノキミマツノキニフルユキノユキニハユカシマチニシマタム  
吾屋戸乃君松樹爾零雪乃行者不去待而將待

同月十一日登活道岡集一株松下飲歌二首

ヒトツマツイヨカヘメルフリカセノコエノスメルハトシフカミカモ  
一松幾代可歷流吹風乃聲之清者年深香聞

右一首市原王作

タマキハルイノチハシラズマツガエチムスアゴ、ロハナガクトツオモフ  
靈剋壽者不知松之枝結情者長等會念

右一首大伴宿禰家持作

傷惜寧樂京荒墟作歌三首作者不審

クレナ非ニフカクソミニシコ、ロカモナラノミヤコニトシノヘヌベキ  
紅爾深染西情可母寧樂乃京師爾年之歷去倍吉

ヨノナカチツ子ナキモノトイマツシラノミヤコノウツロフミレバ  
世間平常無物跡今會知平城京師之移徙見者

イハツナノマダツカガヘリアナニヨシナラノミヤコナマタモミムカモ  
石綱乃又變著反青丹吉奈良乃都乎又將見鳴

悲寧樂故京鄉作歌一首并短歌

ヤスミシシワガホギミノタカシカスヤマトノクニハスメロギノカミノミヨ  
八隅知之吾大王乃高敷為日本國者皇祖乃神之御代

松之枝結ハ松ハ久しく年経  
るものなれハ齡を契る也

紅爾ハ深くさいはん翁なり  
さて賑ひたりし奈良の都の  
深く心にまみてあれハにや  
わく荒行ても猶此によを經  
ぬへく思はるいさ也

石綱乃ハまくらこさばなり  
若ハ一本に若さあるに従ふ  
へし

日本國ハ大和國をいふ



阿禮將座ハ生繼給はんこ也  
炎乃ハまくらこほ也

罕ハ罕の字を誤れるなり  
貌鳥ハ呼子鳥と同一物なる

射鉤山ハやつり山ならん  
又鉤ハ駒の誤ならん或云  
八鉤も伊駒もこいに叶はず  
羽飼山の誤ならんと猶よく  
考ふへし

愚並ハ一木に里並さあるそ  
よき

事世乃ハ唯世といふ事なる  
こも既にいへり  
引之眞爾真荷ハ天皇のひき  
ぬさせ給ふまいになり  
春花乃ハうつるひさいなん  
爲なり村鳥乃ハ枕詞也

ヨリシキマセルクニニシアレバアレマサムミコソツギアメノシタシラシマサム  
自敷座流國爾之有者阿禮將座御子之嗣繼天下所知座  
トヤホヨロツチトセナカ子テサダメケムナラノミヤコハカギロヒノハルニシナレ  
跡八百萬千年牟兼而定家矣平城京師者炎乃春爾之成  
バカスガヤマミカサノメニサクラバナコノクレガクリカホドリハマナクシバナキツエ  
者春日山御笠之野邊爾櫻花木晚罕貌鳥者間無數鳴露  
シモノアキサリクレバイコマヤマトアヒガナカニハギノエチシガラミチラシ  
霜乃秋去來者射鉤山飛火賀塊丹芽乃枝平石辛見散之  
サナシカハツマヨビドヨメヤマミレバヤマモミガホシサトミレバサトモスミ  
狹男牡鹿者妻呼令動山見者山裳見貌石里見者里裳住  
ヨシモノ、フノヤソトモノウチハヘテサトナミシケバアメツチノヨリアヒノキハミヨ  
吉物負之八十伴緒乃打經而思並敷者天地乃依會限萬  
ロツヨニサカエユカムトオモヒニシオホミヤスラタノメリシナラノミヤコチアタラヨ  
世丹榮將往迹思煎石大宮尙矣恃有之名良乃京矣新世  
ノコトニシアレバスメロギノヒキノマニハルバナノウツロヒカハリムラトリノ  
乃事爾乃有者皇之引之眞爾真荷春花乃遷日易村鳥乃  
アサタチエケバサスタケノオホミヤビトノフミナラシカヨヒシミチハウマモユカズビト  
且立往者刺竹之大宮人能踏平之通之道者馬裳不行入  
モユカ子バアレニケルカモ  
裳往莫者荒爾異類香聞

三五二  
三五三

名付西ハ馴付來し意なり  
出立毎爾ハ出立て見るこも  
にこ也  
久邇新京ハ布常宮三香原都  
郡なり  
明津神ハ天皇ハ申す

山並川次ハ山々のつゞき川  
川のつゞけるをいふ  
卿ハ卿の字を誤れるなり  
布常ハ此地瀧川の二筋落合  
へる所なれハ二瀧の意にて  
名つきたるなるへし

働ハ働字の誤なるへし  
凝者云々ハ岩ほに花のさき  
かゝりたるさまをいふ痛何  
恰ハ恰なるあはれとも幽ハ  
しほめいづる意也  
君之隨ハ神なからさいはん  
こ如ししく山川の宜しき園  
さきこしめさせ給ひてきて

反歌二首

タチカハリフルキミヤコトナリヌレバミチノシバクサナガクガヒニケリ  
立易古京跡成者道之志婆草長生爾異梨  
ナツキニシナラフノミヤコノアレユケバイデタツゴトニナゲキシマサル  
名付西奈良乃京之荒行者出立毎爾嘆思益

讚久邇新京歌二首并短歌

アキツカミワガオホギミノアメノシタヤシマノウチニクニハシモオホクアレトセサトハシモサハ  
明津神吾皇之天下八島之中爾國者霜多雖有里者霜澤  
ニアレドモヤマナミノヨロシキクニトカハナミノタチアアサトトヤマシロノカセヤマノマ  
爾雖有山並之宜國跡川次之立合卿跡山代乃鹿脊山際  
ニミヤパンラフトシキタテ、タカシラスフタギノミヤハカチカミセノトツキヨキヤマチカ  
爾宮柱太敷奉高知爲布常乃宮者河近見湍音叙清山近  
ミトリガ子ドムアキサレバヤマモトバロニサナシカハツマヨビドヨメハルサレ  
見鳥賀鳴働働秋去者山裳動響爾左男鹿者妻呼令響春去  
バナカベモツツニイハホニハナサキナリアナニヤシフタギノハラアナタフトオホ  
者岡邊裳繁爾巖者花開乎呼理痛何怜布當乃原甚貴大  
ミヤドコロウベシコソツガオホギミハキミノマニキコシタマヒテサスタケノオホミヤコト  
宮處諾已曾吾大王者君之隨所聞賜而刺竹乃大宮此跡



こそ大宮作ま給ひけめさ也

定異等霜一本に此跡標刺  
さありこいごまめさせ  
へしめめふさいふに同し  
領し給へりこの意也  
弓ハ山の草書を誤れる也  
神ノ味ハ神佐備と同し  
ハさひと通へり  
百樹成の成ハ例ハ如くの意  
なれこいに叶ハす成ハ盛  
の誤にてもハ森の用語茂  
る事ないふなり

壯ハ牡の字を誤れるなり  
天霧合ハ天の陰りあひて  
くろハなり  
狹丹類歴ハまくら詞なり  
安禮衝之乍ハ生繼せ給ひて  
さなり

サダメケラシモ  
定異等霜

反歌二首

ミカノハラフタギノヌベサキヨミコソオホミヤドコロサダメケラシモ  
三日原布當乃野邊清見社太宮處定異等霜  
ヤマタカクカハノセキヨシモ、ヨマアカミシミユカムオホミヤドコロ  
弓高來川乃湍清石百世左右神之味將往大宮所  
ワガオホギミカミノミコトノタカシラスフタギノミヤハモ、キナスヤマハコダカシオチ  
吾皇神乃命乃高所知布當乃宮者百樹成山者木高之落  
タギツセノトモキヨシウケヒスノキナケハルベハイハホニハヤマシタヒカリニシキナス  
多藝都湍音毛清之器乃來鳴春部者巖者山下耀錦成花  
ハナサキナリサチシカノツマヨアキハアマガラフシゲレサイタミサニツラ  
咲乎呼里左壯鹿乃妻呼秋者天霧合之具禮乎疾狹丹類  
フモミチチリツヤチトセニアレツガシツアメノシタシラシメサムトモ、ヨニ  
歷黃葉散乍八千年爾安禮衝之乍天下所知食跡百代爾  
モカハルベカラメオホミヤドコロ  
母不可易大宮處

反歌五首

泉川往瀨乃水之絶者許曾大宮地遷往目  
フタギヤママナミミレバモ、ヨニモカハルベカラメオホミヤドコロ  
布當山山並見者百代爾毛不可易大宮處  
チトメラガウミナカクツフカセノヤマトキノユケレバミヤコトナリヌ  
媾媾等之續麻繫云鹿脊之山時之往者京師跡成宿  
カセノヤマゴダチチシゲミアササラズキナキトヨモスウケヒスノコエ  
鹿脊之山樹立矣繁三朝不去寸鳴響爲器之音  
コヤマニナリホト、ギスイヅミガハワタリチトホミコ、ニカヨハズ  
狛山爾鳴霍公鳥泉河渡乎遠見此間爾不通一云渡遠哉

春日悲傷三香原荒墟作歌一首并短歌

ミカノハラクニノミヤコハママタカミカハノセキヨシアリヨシトヒトハイヘドモアリ  
三香原久邇乃京師者山高河之瀬清在吉迹人者雖云在  
ヨシトワレハオモヘドフルサレシサトニシアレバクニミレドヒトモカヨハズサトミレ  
吉跡吾者雖念故去之里爾四有者國見跡人毛不通里見  
バイモアレタリハシケヤシカクアリケルカミモロツクカセヤマノマニ  
者家裝荒有波之異耶如此在家留可三諸著鹿脊山際爾  
サリハナノイロメヅラシクモ、トリノコエナツカシクアリガホシスミヨキサトノアル  
開花之色目列敷有鳥之音名東敷在泉石住吉里乃荒樂

泉川ハ相樂郡なり

媾媾等之云々二句鹿背山  
いひ爲てに麻をかくる持  
さいひかけたり持ハ四時祭  
式に加世比さりえてうみな  
な巻くる具なり

狛山ハ相樂郡なりさて長歌  
ハ春秋ののみいへるを此歌  
に郭公をよめるハつきなし  
此一首ハ別の歌の紛れ入し  
なるへし反歌五首と初に  
れと歌敷を巻るにハさら  
ぬ事所々あり

在吉跡後なるハ在ハ住の誤  
なるへしさらてハ未さかけ  
あハす  
耶の下一本に之字あるそよ  
きさて其下二句斗落たるそよ  
はしけやしかく云々さつ  
かぬ心ちす  
三諸著ハ生緒著の誤なるへ  
しさてうみをつと持さつ  
くなり又著も繫の誤にてう  
みなかくにて上の反歌の例  
なるへしさいへり



在果石のあらまほしき意  
果なかりたるかほ果の音  
うなかりたるかほ鳥を果  
鳥さもかけり  
哭一本よ襲さあるそよき

左通ハ難波宮ハ度々行幸も  
ありしなれハハハハハハハ  
海片就而ハ海邊によりたる

朝羽振ハ卷二にいへり  
蹠ハ蹠の俗字にて一本にハ  
蹠合の合ハ衍字なるへし  
海石之ハ石ハ原の誤にて  
なはらさ右へし又ハ若の誤  
にてわたつみならんハさい  
へり  
納一本に湧さあるそよき  
視人乃云々ハ其景色のよき  
を見て其人の語り戀ハそな

ラクナツモ  
苦惜哭

反歌三首

ミカノハラクニノミヤコハアレニケリオホミヤビトノウツリイメレバ  
三香原久邇乃京者荒去家里大宮人乃遷去禮者  
サリハナノイロハカハラズモトシキノオホミヤビトゾダチカハリヌレ  
咲花乃色者不易百石城乃大宮人叙立易去流

難波宮作歌一首并短歌

ヤスミシシワガオホギミノアリガヨフナニハノミヤハイサナドリウミカタツキテ  
安見知之吾大王乃在通名庭乃宮者不知魚取海片就而  
タマヒロフハマベサチカミアサハブルナミノトサワギユフナギニカザノトキコユ  
玉拾濱邊乎近見朝羽振浪之聲蹠夕難丹榎合之聲所聆  
アカトキノ子ガメニキケバアマイシノシホヒノムタウラスニハチドリツマヨビアシ  
曉之寐覺爾聞者海石之鹽干乃共納渚爾波千鳥妻呼菰  
ベニハタツナキドヨミミルヒトノカタリニスレバキクヒトノミマクホリスルミケムカ  
部爾波鶴鳴動視人乃語丹爲者聞人之視卷欲爲御食向  
フアザフノミヤハミレドアカカモ  
味原宮者雖見不飽香聞

聞人ハ見まくほりするさ也  
御食向ハまくらこまはなり  
味原ハ攝津國東生郡にて則  
ち此難波の宮所なり

八千俸之神ハ大巳貴命の一  
の御名にして上にもいへる  
如く少彦名命と共に天の下  
を經營し給ひし神なれハハ  
くいへるなり

眞十鏡ハまくらこまは也  
過而可往云々ハ景色のよき  
に見過したきよし也  
七八亡の字を誤れるならん

反歌二首

アリガヨフナニハノミヤハウミチカミアマチトメラガノレルフ子ミユ  
有通難波乃宮者海近見漁童女等之乗船所見  
シホヒレバアシベニサソグアシタツノツマヨアコエハミヤモトハロニ  
鹽干者葦邊爾蹠白鶴乃妻呼音者宮毛動響二

過敏馬浦時作歌一首并短歌

ヤチホコノカミノミヨリモトフチノハツルトマリトヤシマゲニモトフナビトノサダ  
八千銚之神之御世自百船之泊停跡八島國百船純乃定  
メテシミメメノウラハアサカビニウラナミサワギユフナニニタマモハキ  
而師三犬女乃浦者朝風爾浦浪左和寸夕浪爾玉藻者來  
ヨルシラマナゴキヨキハマバハユキカヘリミレドモアガズウベシコソミルヒトゴトニカダリ  
依白沙清濱部者去還雖見不飽諾石社見人每爾語嗣偲  
ツギシメビケラシキモトヨヘテシメバエユカムキヨキシラハマ

反歌二首

マソカミミメメノウラハモトフチノスギテユクベキハマナラナリニ  
眞十鏡見宿女乃浦者百船過而可往濱有七國



神世自ハ長歌に八千戈神の  
事にいへれハこいもいへり  
大和太乃濱ハ攝津國也

ハマキヨミウラウルハシミカミヨヨリチア子ノハツルホウダノハマ  
濱清浦愛見神世自千船湊大和太乃濱

右二十一首田邊福麿之歌集中出也

萬葉集卷第六

明治廿四年十月四日印刷  
明治廿四年十月五日出版

正價金廿五錢

編輯兼  
發行者

大橋 新太郎

日本橋區本石町三丁目十六番地

印刷者

宮 本 敦

神田區小川町一番地



發兌元 博文館

東京日本橋區本石町三丁目十六番地







エトB75

